

川柳塔

創刊大正十三年 通卷一一四七号



日川協加盟

No.1147

十二月号

寒中見舞募集

○ 本誌 令和5年2月号掲載
○ 締切 12月15日(木)

川柳塔社事務所宛

第十二回春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第十一回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

課題と選者 (各題2句 共選) 川柳塔社

課題吟

「花」 中 岡 千代美 (番傘川柳本社)

「待」 佐 藤 村 亜成 (川柳塔社)

「待」 木 本 朱 岳 俊 (川柳塔社)

自由吟 「樋」 樋 口 由 紀 子 (川柳塔社)

投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただけます。結構です。

投句料

一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切

令和5年2月20日(月) 消印有効

送付先

〒54310052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇―一
川柳塔社 誌上大会係 宛
TEL/FAX(〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選に賞呈。発表は川柳塔誌五月号誌上川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

2023年(令和5年) 本社句会 開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時 間	会 場
1月10日(火)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
2月7日(火)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
3月7日(火)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
4月10日(月)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
5月8日(月)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
6月7日(水)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
7月6日(木)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
8月10日(木)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
9月7日(木)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
10月7日(土) 第29回 川柳塔まつり	同人総会 10:00~11:00	生駒 3F
	句 会 11:00~17:00	金剛(全室) 4F
	懇 親 宴 17:00~20:00	葛城(全室) 3F
11月7日(火)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F
12月7日(木)	13:00~17:00	葛城の間(全室) 3F

第37回国民文化祭・おきなわ2022

小島 蘭 幸

ホテルからタクシーに分乗して、豊見城市の会場へ。受付を済ますとすでに多くの人が出席されていました。風の吹く中、休憩所で昼食の弁当をいただいていると小学生の男の子が空手の稽古をしていました。

会場の椅子に座って目を閉じていると、「蘭幸さん、蘭幸さん」振り向くと庄原市の石田素風氏でした。素風氏は郵政川柳、中国プロックの川柳仲間、出席されることを聞いていませんでしたのでビックリ。急に出席を決めたので広島空港からの沖縄便は満席、岡山空港の便で来たとのことでした。

12時、いよいよ開会式です。私は挨拶の中で15歳で初めて大会に出席して、選者の披露に感動したこと、大会は憧れの川柳作家の披露を生で聞けること、復帰50年の節目の年に出席出来たこと等を話させていただきました。

アトラクションは、豊見城市文化協会の皆様の「古典音楽斉唱」「琉球舞踊」「空手演武」でした。「空手演武」では、休憩所で一生懸命稽古をされていた男の子がトップでした。眼光鋭くキレッキレの演武、素晴らしかったです。

休憩をはさんで、いよいよ大会の華の披露です。今回の選者はやすみりえ氏をはじめ7名。トーク、披露、選評ともに素晴らしかったです。そして何よりも一生懸命さがひしひしと伝わってきました。台湾の杜青春氏の日本語、ユーモアのセンス、最高でした。

文部科学大臣賞

一房の葡萄家族であつた頃 平井 美智子

入賞10句の内、文部科学大臣賞をはじめ、川柳塔社同人4名の方が入賞されました。

おめでとうございます。

大会終了後、大会スタッフ、噴煙吟社の皆様と一緒に近くの居酒屋で懇親会。「良い会にしていたんだ」としみじみ挨拶された、池村幸夫沖縄県川柳協会会長。平田朝子、徳丸浩二氏のビッグニュース、泡盛がアツという間に空っぽになりました。

「麻生路郎読本」余瀆 (73)

インスピレーション・ナビ 印象吟

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

せんりゆう飛行船[㊦]

■句集紹介「おおきに」 鈴木いさお著

■句集紹介「残日句録」 水野 黒兎著

■エッセイ 勲章の光景

■エッセイ「川柳塔の人々」より

十一月本社句会

第24回全日本川柳誌上大会 入選作品

第37回国民文化祭・おきなわ2022 入選作品

各地柳壇（佳句地十選／山口光久・籠島恵子）

12月各地句会案内

柳界展望

高野山川柳塔碑合祀報告

■編集後記（ひとこと／前田楓花）

乗原道夫 … (76)

大西泰世 … (78)

石橋芳山 … (80)

富永恭子 … (82)

新家完司 … (83)

江島谷勝弘 … (84)

中山春代 … (85)

仁部四郎 … (86)

出口雨町 … (87)

… (88)

… (93)

… (95)

… (96)

… (110)

… (112)

江島谷勝弘 … (113)

道夫・じゅん子・勝弘 … (114)

座右の句

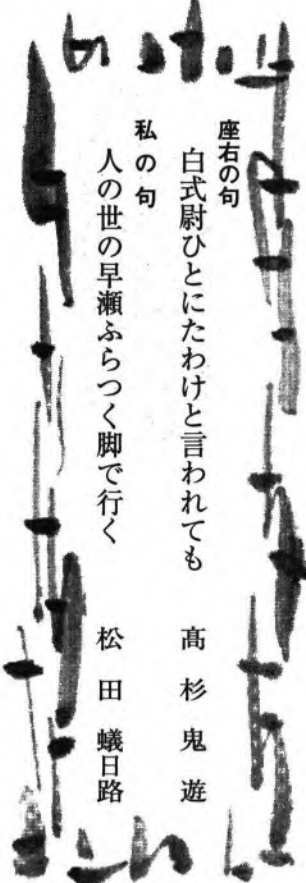
白式尉ひとにたわけと言われても

高杉 鬼 遊

私の句

人の世の早瀬ふらつく脚で行く

松田 蟻日路



会場が会社の近くで土曜日ということに惹かれて参加。何も考えず一人で参加したことが良かったようだ。もし友人と一緒にあれば、お互いの成績などを意識して落ち着かなかったかも知れない。

「セーター」という題で「セーターのセーターらしくない値段」という初めての句が「人位」に抜けた。当時三万円の馬鹿げたセーターを買った時の実感を詠んだものだった。「こんなので良いのか」。

たちまち私は川柳に惹かれた。当時の中筋三幸先生の教えは「一日に20分川柳のことを考えなさい。恥を書きなさい」だった。その言葉は40年の川柳生活のバックボーンとなっている。

先輩の「本気で川柳をするなら雅号を付けたほうが良い」とのアドヴァイスに従って雅号を考えた。五木寛之の講演で「朱夏」という言葉を知り、鮮明なイメージに惹かれて朱夏は誕生した。

「あなたの作品は川柳ですね」この一言がなかったら、私は川柳に出合っていなかっただろう。あの時の俳句の先生に感謝している。



小島蘭幸選

大阪市 田中 ゆみ子

新米を家族揃って朝の膳

人生にも刺激わさびに唐辛子

懐かしい我が家へという宇宙基地

嘘はつかない秘密は少しあるけれど

怖いのは目覚めてしまう午前二時

誹謗中傷 人は淋しい生きものだ

今治市 永井 松 柏

卵かけご飯が美味しい日本人

そば通の講釈を聞くかけうどん

豊作の笑顔が並ぶ精米機

喜寿米寿卒寿が揃う趣味の会

ブーチンも習近平も笑わない

二幕目は人間力で勝負する

大阪市 平井 美智子

一花ずつ声上げて咲く曼殊沙華

くだわりは捨てて三色ボールペン

浮き過ぎぬようにと水を飲んでる

哀しみが湿ったままでたまれる

ポケットの日にち薬も効かぬまま

豊かさの中で命が揺れている

読書の秋書架の梯子に腰掛けて

水族館海月になった気で回る

快楽が畳に吸い込まれてゆくよ

秋きりり山葵を舌の先に載せ

自転車のこと忘れそう秋の天

白鳥の白一色の多彩かな

子らのクレーム手押車は頓挫した

子ら三人ラインで環視するという

ありがたいこと言いなりにあっておく

とはいえど親のプライドまだ少し

芒ヶ原へざわつくものを捨てて行く

吾亦紅艶やかな日もあったのに

堺市 栗原 道夫

桜井市 安土 理恵

大阪市 谷口 義

少し変わっているという自覚はある

茹玉子つるりと剥けてまだこの世

リハピリも遊び行つてゐるようなもんですわ

むつかしいもんや長生きの夫婦

認知症の心配は毎日してる

あの頃はよかつたと言つても六十代

西予市 西田 美恵子

胸開けて少うし風を入れなさい

疲れました少し静かに浮いてます

両の手で受けてね温い心です

ひきつった笑顔だ無理をしてるんだ

受け入れる賞味期限も人生も

隅っこで光る誰もいないのに

岸和田市 岩佐 ダン吉

ひとしきり勝者称えている拳

強敵が守るものなどないと言う

ウクライナの大地死相に満ちている

まだ生きるやりたいことがひとつある

川柳をやる意味問うてくる彬

核兵器だけお友達さみしいね

阿南市 小畑 定弘

角砂糖罪なことばを聞いている

喜寿ですがまだ煩惱が生臭い

巣ごもりの羽をときどき陽にあてる

逆風のない人生もつまらない

年金日瘦せたサンマに手を伸ばす

この恋が終ればあの世へ参ります

藤井寺市 嶋谷 瑠美子

昭和ならいま何年と問いたがる

姉惜しむ真つ赤な彼岸花が咲く

エアコンを切り換えすぐに冬が来る

ふる里のお味にかぼちゃ煮えました

近くまで来ているけれど出会わない

ちよつとだけ化けて逢いたい人がいる

鳥取市 田賀 八千代

孫増えて愛を七等分にする

犬猫ウサギ皆な育児の応援団

前進む勇気をくれた曼珠沙華

産声をくれたスマホが愛おしい

コスモスの笑顔に感謝こころ癒え

孫七人少子化なんて別世界

大阪市 宮崎 シマ子

窓の外は冷たいビルの屋根ばかり

菓子が無いのでお茶も呑みたくないホーム

女王様と私同い年淋しいなあ

天国でなら女王様にお目通り

植木鉢の枯れ葉こぼれて秋になり

億の金使つて国葬民には菓子一つない

吹田市 太田 昭

寝返りを打てぬ柩が囲まれる
5Bの鉛筆のごと老いてゆく
冷奴ほどの軽さで愚痴を聞く

人混みに寂しい老いを包み込む
あてもなく無口な風と旅に出る
越すことも越されることも無い孤独

松山市 栗田 忠士

野良猫がトイレを借りにやってくる
お互いに寝息を聞いている安堵
さびかけの脳にヤスリをかけている
深いから覗いてみたくなるのです

太陽の季節惜しんだのは昔
プーチンの耳に聞こえぬ反戦歌

尼崎市 藤井 宏造

立候補者も書くことできる自分の名
がら空きの電車に迷う座る席
常連しかたのめないのが裏メニユー

村中が夜更かしをする村祭り
病人へ嘘しか言えぬ時もある
沖繩へ誰も出さない救いの手

香芝市 山下 じゅん子

海育ち天然もののわたしです
神に誓うだけど牧師はアルバイト
手のひらで夫踊らす得意技

夫留守テレビ見ながら上にぎり
非常ベルがわりに寝室はいっしょ
晩年の筆圧弱き父の文

奈良市 大久保 眞澄

弔問外交そうか外交だったのか
ゴンタの過ぎるロシアにお灸すえてやる
荒れ果てたもと豪邸にねこじやらし
一発で決めると言い訳も生きる

お昼何食べる 朝食食べながら
スーパリーの秋刀魚はみんな痩せている

鳥取市 福西 茶子

息子より嫁と気が合い盟結ぶ
婆ちゃんと呼ぶな私は君の母
夏バテも夏瘦せもなく秋の食
卒寿まで飛び立つ羽根も欲もある
台風は去った我が家は見向かずに
運動会パン食い種目だけに出る

枚方市 栃尾 奏子

年越しは仕事場ですがまだ何か
シンブルに転ばぬように十二月
郵便局も神も仏も急ぐ晦日
共稼ぎ師走阿吽の見せ処
人を恋う大事な時間です賀状
泣いて笑ってよい年でありました

鳥取市 前田 楓花

入院の初日あれこれ不眠症(醫病記)

病室はトイレに近い一等地

段々と病人らしくなつてきた

病室の友が助けてくれる夜

看護師のやさしい順に背番号

病んでみて脆さ強さを知るいのち

笠岡市 藤井 智史

神無月足を伸ばして良いですか

人生に難問奇問くれる神

ひとりぼっちのドリアンを包む愛

問題の答えは無限大の愛

愛に触れ尖つた芯が丸くなる

富士山の頂上に立つ句を作る

丹波篠山市 酒井 健二

告白を受けて気がつく十年後

姿見を覗みしゃきつと立つてみる

プチ断食明ければ美味い七分粥

先は読めぬが死ぬ気には成らぬ

性感がすこおし枯れて身が軽い

ガチャなんやガチャなんやから良しとする

鳥取市 倉益 一瑤

ちちははが側にいそよな星月夜

ときどきは手抜きレトルトうまく盛り

平熱に戻り答が見えて来た

み仏の情に沈んでゆく拳

洗つても私の灰汁は抜けません

譲られた漬物石が重すぎる

西予市 黒田 茂代

夫の作つた無農薬野菜これつきり

独りでも食事きつちり日に三度

つくり置き御菜独りになつて増え

今にして独りの卓袱台が広い

声掛けたら返事が返りそう茶の間

寂しくないいつも守つてくれている

大阪市 平賀 国和

賢治忌の法要参加延暦寺

延暦寺に賢治の碑あり興味湧く

リンドウを供えて祈る賢治の忌

賢治忌に雨ニモマケズ読み上げる

一隅を照らす精神賢治の詩

世直しに賢治のこころ欲しくなる

大阪市 榎本 舞夢

猛暑 骨折トンネル抜けてやつと秋

塔まつり肅肅と済みホツとする

骨折のリハビリ歩くただ歩く

歩いては寝て起きては食べる太りたい

自分ばかり勞り主人忘れてた

生活プランこの年になり話し合う

岩国市 上村 夢香

鳥取県 竹信 照彦

語り継ぐナカムラ広場永遠に

USBにひっそり眠る過去の恋

反省と失敗の文字日記には

がんばってね活を入れるは九歳児

深い森迷路のような四字熟語

防府市 坂本 加代

表現は自由自分を遺す旅

炎天にサボテンの花ボンと咲く

運転も油断禁物先を読む

通院にネックレスなど似合わない

さりげなくフォローしあつて二人旅

鳥取県 門村 幸子

雲間から月がひよっこりウオーキング

他人の目になってわたしを俯瞰する

さり気なく血に染みこんでいる演歌

要るものは要る家計簿はざっと見る

少しだけ善人になり募金箱

鳥取県 斉尾 くにこ

焼芋にバター自分を黙らせる

秋日和ひがな一日ぬらりひよん

実家でもないに安心する空気

ほぐされた土がぼこつと産むキャベツ

萩咲いて玄関マツト替えました

川柳を作り老脳活性化

痰を出せ健診急かすけど出ない

自損事故出口のガード邪魔をして

運転をいつまでやるか八十路坂

汽車バスの移動句会が遠くなる

鳥取県 本庄 ひろし

黙読は昼寝を誘うプレゼント

王道を軽くないした歩の力

あこがれのロマンスグレー間近かも

この歳を支える薬飲んでます

迷ってもスマホを使う術知らず

鳥取県 山下 節子

抜け道をたとえ話に入れておく

魚市場とろい作業はきらわれる

米がないなんと悲しい言葉です

白い米から透明な酒不思議

老い二人まさかの時は備えある

鳥取市 池澤 大鯨

句読点つけ直すのに苦勞する

おこなまけおたわけおこなます

横着じゃないペースが遅いだけのこと

ものぐさ太郎どうやら私子孫です

さめざめと身の上話またもかや

鳥取市 奥田由美

うきうきと政府が誘う旅プラン
へそくりの覗き見をする背後霊
減塩と腹は六分と医師の喝
たまに来る寺の便りは護持会費
団塊の夫は隠れサユリスト

鳥取市 加藤茶人

我を張らず二流と思う自尊心
対策の割りに手応えないコロナ
毎日がプラス思考のランドセル
初産は三日遅れてもう慌て
矛盾していようが父の言う通り

鳥取市 岸本宏章

男にも日傘持たせた温暖化
山脈が分ける雪国晴れの国
バランスはグー日の丸の白と赤
火を使う人間だけの技がある
Jアラート出ても隠れる場所がない

鳥取市 岸本孝子

暑い夏五ヶ月耐えてやっと秋
温度差に老いの体は四苦八苦
一ヶ月遅れて秋の衣更え
コーヒーもホットに変えたティータイム
ビッグボスやっぱり派手にしめくくり

鳥取市 棚田大

おっ寒や夏の猛暑日よかったな
プロレスのバトルロイヤル見入っちゃう
抜け道と聞いただけでも嫌になる
お土産を分けたはよいが睨まれる
何事も選り分けするも効果出ず

鳥取市 谷口回春子

秋風に負けるもんかと囁む奥歯
有料の一声聞いて安堵する
脳トレにはまり寝不足大欠伸
生き返る特効薬は妻の愚痴
長生きは素直に生きてやってくる

鳥取市 永原昌鼓

いい便り届かずに早や年の暮れ
血糖値今上がってる柿旨い
審美眼自信がた落ちピカソの絵
あれもこれも老いた証拠か胸を打つ
コロナ禍が新語産み出し老い惑う

鳥取市 中村金祥

ミサイルを操る神に気が揉める
一匹の蠅が友達四疊半
コロナ情報一喜一憂果てしない
鍵かけたか水は止めたかまた戻り
選挙戦コロナの中でひた走り

鳥取市 山下凱柳

老いた母生きた証を背なに負う

脳みそが枯れてきたのか没ばかり

老後への方程式が見つからぬ

お荷物と言われながらも生きてます

コッソリとメールを覗き妻チエツク

鳥取市 吉田弘子

そこそこの元気クスリが手離せぬ

わだかまりゼロになるまで湯に浸かる

傷の数恥の数増え丸くなる

後ろ前穿いたズボンについ苦笑

底なしの献金幸という信者

倉吉市 大羽雄大

砂時計睨めっこして湯につかる

黒塗りにシユレッダー悔しがる文

マスクして分からぬつもりなっている

面会が叶わぬ友のケアハウス

なるようになる言ひ聞かせ日を捲る

倉吉市 田中紀美恵

貝だつて言葉つぐまず言ひなさい

愚痴ひとつ言わぬ夫にシヤッポ脱ぐ

私も時には貝になりたいな

父母住んだ家だれも居ず軋みだす

人生は波瀾万丈喜怒哀楽

境港市 藤原久直

有難いシルバー席を譲られた

はっと気が付く素直さに欠けている

皆グルメすつかり慣れた妻の味

近頃はトイレある道散歩する

朝帰り猫の歩きを良く真似た

米子市 池田美穂

ぜい肉を落としたサンマ買う気うせ

隣でもわからなかつた家族葬

一石二鳥白髪隠して暖かい

秋寒にコンビニおでん買ってみる

ひさびさの化粧の顔に目を剥く子

米子市 伊塚美枝子

「おばさん」と呼ばれた二歳下なのに

十月の値上げラッシュに手が迷う

明日は雨今夜は虫が鳴きません

ムラカミもオオタニサンも他人の子

美味い秋芋栗柿が悩ませる

米子市 後藤宏之

年配のコーラスいつまでも若い

外面はいいが家では口への字

今日はこの看板掲げて出掛けよう

枝ぶりに騙され本物とり逃がす

両方は無理だ優しさ逞しさ

外す時機思案しているつかいかい棒
効果なく虚しく並ぶ化粧瓶
米子市 後藤美恵子

傍らで作句手伝う電子辞書

逢えぬ子とラインがスープ冷めさせぬ
幼馴染み老いても「ちゃん」で名前呼ぶ

壁にある耳に大ボラ吹いておく
米子市 妹能令位子

五七五原稿用紙百枚分

気まぐれに蒔いた種から赤い花
ありがとう言える人居てつつがなし
ワインなど似合うくらしの友がない

聞き返すたびに大きな声になる
米子市 竹村紀の治

撫でさすり甘やかして居る尾てい骨
こつそりと膝がつぶやく秋ですぬ

記念日を探して夜ごと飲んでいる
雨の日はウインクをする万歩計

ざんなんのない茶碗蒸し物足りぬ
杖をつき急に年寄りらしくなり
米子市 中原章子

一日のノルマを決めて無理をせず

佳子さまの表情豊か手話みとれ
丁寧顔に顔を洗って生きている

波静かまたいつかしら荒れる日も
米子市 成田雨奇

体重はすっぱんぼんで計ります
一人ずつ違つてないと気味悪い

水道水ベットボトルに詰めて出る
便利さを求め失くしたものがあ

気まぐれの告白私何番目
米子市 野川宣子

ふだんから感謝いっぱい暮らしている
出来不出来手作りどうふそれも味

便利さに浸つて脳が退化する
秋空に歴史刻んだ人が逝く

神輿ゆく家々総出でお賽銭
出雲市 伊藤玲峰

年寄りの昔料理もよろこばれ
もう三纏足が長いと降りやすい(車から)

齢もらい身が縮んだか駆けまいぞ
一年二ヶ月早いものだねスタスタ歩く

「アラート響いてタコ壺へ籠る
松江市 石橋芳山

味噌煮込みうどんに深々と潜る

ジャムセツション始める渦のど真ん中
ざらついた話に添えるリングジャム
ジャズ好きな海鼠と夜を踊り切る

松江市 藤井寿代

焙煎の匂いで朝がやってくる
通学の子供の声に若返る

何がなんでもひ孫見るまで生きてやる

週二回コートに立てばまだ若い

動けばお金人っこひとり通らない

松江市 松本知恵子

新米に浅漬け作り事足りる

熊がいる山に背高アワダチ草

秋の風いい塩梅の柿揺らす

物価高バーゲンセール駆け廻る

秋が来て伸び伸び猫も闊歩する

出雲市 岸桂子

ヒントだけ与えて若い樹を伸ばす

話の種をいっばいもって友が来る

前略と書いてそのまま二三日

神の国やたら事件が多すぎる

蹟いて来た人生のページ数

岡山市 高岡茂子

コロナ明け半世紀振り友と会う

三年待ってローマから里帰り

60年同級生は二人だけ

今日もまた思い出のなか生きていた

トラ勝った匂友の笑顔すぐ浮かぶ

岡山市 田中恵

コロナ禍で神もさみしい村祭り
老々介護オーム一匹飼っている

生きている飯は一度も忘れない

秋冷や元気に勝るものは無し

紺緋古い女の国訛

岡山市 藤澤照代

お返しにあげる蕾の多い枝

ジャンケンポン勝って明日の船に乗る

行きずりにあやしたくなる乳母車

句読点それぞれ違う古い二人

巢籠もりをしていた神輿よく暴れ

岡山市 大石洋子

ヘラヘラでなくケラケラと笑いたい

笑い疲れたあとのよう枯れ蓮

捜し物見つけ情熱消えてゆく

ドキドキを忘れ光陰矢の如し

いっばいいいっばい生きていますか 空

岡山市 工藤千代子

やわらかな言葉が欲しい今日の雨

労りを拒み続ける向かい風

接続詞ばかりで本音まだ包む

この庭で生まれて育ち子も育て

したたかな月いくら欠けても丸くなる

岡山市 丹下 凱夫

りりりりり 秋の扉を開く虫
祭り酒よばれて隣町にいく
祭りから帰りじつくり飲んでる
熱いのが馳走だと言う掛うどん
戦争は嫌だと団子虫が言う

岡山市 前田 恵美子

子や孫を信じて託す令和の世
太極拳口も体も活性化
掃除って気持ちがいいと夫誘う
隔世遺伝悪いとこだけ伝わるの？
コタツ出しやつと落ち着く秋の雨

広島市 岸本 清

ヤクルトを飲んで村上祝福す
人口は減るが寿命は伸びている
失態に笑うしかない老い二人
老けたなあ仲間の老いはよくわかる
不都合に耳遠なつたふりをする

竹原市 岩本 笑子

嬉しいネ返礼品という制度
それでいいんだ分相応の税の額
税務署を出てから大きな溜息を
もう少し安ければと酒も思うなり
とんぼトンボ今日は日曜日なんだよ

三原市 鴨田 昭紀

近道を知ってしまつてから狂う
出来過ぎた誘いに助走繰り返す
衣食住足りて未だに不幸せ
火の用心聞いて安眠する枕
ストレスに聞かせる寂聴の法話

三原市 笹重 耕三

忘れ物はないかと風が追いかける
追伸へ母の心配性が棲む
母さんを見つけた白い彼岸花
終章の余白に添える二輪草
年金の椅子どこまでも不安定

東かがわ市 川崎 ひかり

相談会答えが白紙埋めてゆく
相談も煮詰まり安堵の座が和む
飲み会の相談無口がよく喋る
仮面脱ぎ時計も外す二十五時
青年の夢蒼天を突き抜ける

松山市 大内 せつ子

冬になったら冬に従うつもりです
泡ひとつたつたひとつがまだ消えぬ
真つ白い翼ひとつで生き伸びる
ノンストップの愛と信じたばかりに
迷えばいいさ生きていてことだから

松山市 古手川 光

三連休二つも台風ばあにする
台風よ日本嫌いになつてくれ
エアコン悲鳴冷房終りやすぐ暖房
一年がこんなに速くなる老化
年の暮れ今年の目標何だっけ

松山市 宮尾 みのり

成せば成る勵んだ頃が懐かしい
命には別状ないが医者通い
お笑いのコンビ格差の出る非情
呑めなくてごめん付き合い狭くなる
一件落着国葬はもう済みました

松山市 柳田 かおる

ごほうびのように夕焼け真つ赤か
スッピンで行けるプランを立てている
マスク外して口角を上げてみる
探しています昨日おとしてきた記憶
出不精で針の穴から見る世間

土佐清水市 辻内 次根

わが町のお酒屋さんが店じまい
体重が軽い強風注意報
骨と皮そして涙で出来ている
独り者ひとり言葉が消えていく
メダカの池にトンボ挨拶して去った

唐津市 坂本 蜂朗

妻が病みよつしやよつしやと無理をする
歳の功ざらりと使う鼻薬
まあいいか息子は頑固動かない
秋刀魚にはレモンと決めて譲らない
肝臓も大丈夫だというお酒

唐津市 山口 高明

鶯替えの神事脈々受け継がれ
喜捨の子の頭を撫でて僧は去り
旗色の悪い方には味方せず
甘党の父は飴玉隠し持つ
七福神の名前を五人までは言え

熊本市 杉野 羅天

若さつていいなコロナは死とならず
令和とは心寂しき日の焦り
七十七年忌核撃つという者ありき
生真面目も不真面目もいる生社会
碧き空旅の仰臥のわれとあり

北九州市 小松 紀子

お早うメリーは元気にしつぽふる
八十二優先席へ足が向く
ときめきが今の私にないのです
隠蔽も村度もない息子と暮らす
平然とウソつく政治家の昨日今日

札幌市 小澤 淳

土曜日のポスト休みはちと痛い
近隣に行けず遠くと仲がよい
ソバガラ枕刑務所製で安眠す
炎帝は凌ぎ冬將軍は眠る
後味の悪い侵略いつ終わる

塩竈市 木田 比呂朗

家計簿も値上げに追われ日暮坂
日常を監視のように健診値
まだポケは時間があると言うカルテ
無念だがコロナコロナで年を越す
来年はマスク外せるよう祈願

男鹿市 伊藤 のぶよし

愚痴はよせよせ肩組んで歌おうよ
風のまんまに身を任すコスモスだ
神頼み声を出すのは止めなさい
語り部のトンボ肩から離れない
アリガトウ言われて言ってオヤスミナサイ

黒石市 石澤 はる子

コスモスの絵手紙もらう誕生日
畳のない間取りに慣れぬ昭和世代
鬱ぐ日は生きてる証拠ケセラセラ
フライパン一ヶで足りる暮らし方
まだ僕は無敵の笑顔持っている

黒石市 北山 まみどり

迷ったら近道だった知らぬ道
リニューアル三年ぶりのご対面
酔い足りぬ人とはつまり話し好き
シンデレラ日付はとうに変わったが
ハプニング笑い飛ばせる余裕など

弘前市 稲見 則彦

同床異夢人生そんなものですね
通帳は赤の点滅したままで
止まぬ雪より不安です止まぬ雨
少子化の波がここまで秋茜
百円バス乗って爺さんどこへやら

弘前市 今 愁女

ミサイルが日本飛び越え太平洋
威力と權威世界に示す北のドン
億万を注ぎ込み民の暮し如何に
移ろいの早さ岩木山に冠雪が
土地の象徴お山を仰ぎ冬支度

東京都 川本 真理子

散歩道 一緒に四季を踏みしめる
空を見るようになったな散歩道
「泣かなくなった」鼻すすりつつ言ってみる
目業の的中率が減るばかり
立ち位置は初老のままで頑張ろう

八王子市 川名 洋子

朝霞市 前田 洋子

七波過ぎ三年振りのクラス会
秘めやかに愛育んで老いの恋

よいしょと言わずに立てる事を目指す

彼岸には律義に開花彼岸花

むきになりミサイル撃つて来るお国

横浜市 川島 良子

越谷市 久保田 千代

長生きと健康寿命とは違う

寒暖差さのうTシャツ今日ダウン

古稀の足弾ませお洒落楽しもう

温暖化日本の四季はどうなるの

孫自慢さすがいい子に育つてる

横浜市 菊地 政勝

ロシアへの怒りが消えることはない

ゆるい球投げ合い老いの波静か

晩学の知識を孫に教え込む

見栄はもう張らぬ本音でゆくとする

コロナ禍の自粛で増した思考力

上尾市 中村 伸子

献花する人デモをする人いる国葬

初冠雪あまた冬に季は向かう

虫たちのオーケストラは無料です

行かぬのに世界の天気聞いている

遠くから思いを馳せる巴里は雨

台風の中継で視る故里の家

拉致されてミサイル向けて脅される

プーチンと将軍に塗る薬無し

この夏は猫に病の有りつ文

遠回しに猫の寿命を獣医師が

雑念も忘れて富士と青空と

塔まつり幸せだった頃が来る

生きるっていいな皆んなの顔浮かぶ

大阪はやっぱり庶民の生きる街

コロナ禍もどこ吹く風の大坂の街

愛知県 早川 遯行

今日元氣明日もそうとは限らない

何もせぬ一日だった碁盤の目

ふる里は昔の儘でいてくれず

パスの窓開けた音が懐かしい

食べ放題元のとれない齢になり

名古屋市 山本 三樹夫

在りし日の友はゴルフが上手かった

マスクなら悪口言ってもわかるまい

血圧を上げ下げさせる株指数

新サンマ値を聞くよりも食べたくて

青春の覇氣衰えず喜寿を越す

犬山市 金子 美千代

バックして髪染め明日へ寝つかれず

塔まつりへいざ「ひのとり」で馳せ参じ

老病死の話題にかわる同期会

ジェットコースターの気温差ハックション

箆笥よりはまし微微たる利率でも

犬山市 関本 かつ子

コスモスが何処か寂しい色で揺れ

幸せな暮し続くとふと不安

催しに目を通すのも皆近場

クラス会三年振りに丸印

広広な田に一本も無い案山子

可児市 板山 まみ子

今日夏日きのう秋冷ややこしい

冬物だけなら整理のつく箆笥

お隣は何を食べてる十三夜

お団子も薄もなくて居待月

合宿に酒盛りセット草テニス
京都市 清水 英 旺

三人と猫一匹の日々平和

気休めにビタミン三錠のんでおく

半端な夢道連れにして道迷う

残り火に毎日注油怠らず

口笛の吹けぬ男も明日をみる

京都市 藤井 文代

物価高マスクさえ買う気力萎え

体調良いからこそできる医者通い

人間の敵自然じゃなくにんげんだ

隣の国好き放題にすべもなく

ゴルビーが残したあの火消さないで

長岡京市 山田 葉子

咲く準備している枝に励まされ

起き抜けの頭ちよつぴり冴えている

立つ座る掛け声に助けてもらう

平静を装い立ち位置を変える

秋なのに献立なにも浮かばない

大阪府 米澤 倅子

自由きままな時間遣してくれた亡夫

言い訳のような笑顔を返される

クローゼットに人待ち顔の赤い服

政治にもピリリ円楽さんが逝く

渡瀬はるかに似た看護師の整形外科
大阪市 東 敏 郎

低金利うなぎ上りの物価高

禁煙の誓いが揺れる三ヶ日

天国へ行くから墓はいりません

税金を納め続けて家族葬

二日酔とは知らずに血吸う蚊咬

大阪市 石田 孝純

ウォーキング秋の三三七拍子
深酒をチビチビ悪いのは夜長
秋うららマスクの下の無精髭
悪戯をちよいしたくなる神無月
ふる里の新聞届く秋包み

大阪市 磯島 福貴子

星空の下ブランコ揺らし心解く
ジム通い三年経るが成果なし
月下美人眠い目こすり待つ今宵
秋夜長 清張読破 寝不足に
コロナ減そろそろマスクはずそうか

大阪市 井丸 昌紀

砂糖より塩が甘さを知っていた
一の裏六と決まっついて平和
黄信号見ると駆け出す都市砂漠
考える人の頭の中覗く
自由吟は苦手課題吟はなお

大阪市 岩崎 公誠

介護2の車椅子押し背を撫でる
古写真過ぎた時間を閉じ込める
ダイエット秋の実りに競り負けた
予定表積み残しふえ年の暮れ
廃線か地方鉄道大ピンチ

大阪市 岩崎 玲子

体操と散歩サブリにして元気
ぎりぎりまで自然派通し髪染めず
老いふたり人生ゲームどの迎り
だんだんと赤糸淡くなりけり
親切を受けた返しはポランテア

大阪市 内田 志津子

父母が笑っていますお仏壇
お仏飯盛って今日の日動きだす
天の句に驕らず全没にくさらず
後期高齢肉も魚も糖もとる
ワインがボン記念日に君と語る

大阪市 宇都 満知子

満面の笑み握手もハグも遠慮して
コオロギが空き家の庭で鳴いていた
朝方の夢に元気なお亡母さん
再びを忘れた鰯 鯖 秋刀魚
約束を守る小指のあったかい

大阪市 江島谷 勝弘

二十年私の茶碗欠けもせず
イヤヤなあひそひそ話イヤヤなあ
幼子が石切さんで百度踏む
三時二十分朝刊が届く
背が低い分体重で勝っている

大阪市 大川 桃花

登り調子を母は決して油断せぬ
ノートとテレビ老眼鏡が忙しい
時間なくとも眉はしつかり描く女
眠る姿勢ととのえすぎて眠れない
ケアマネに買い被られて黙り込む

大阪市 大沢 のり子

電波時計くるわなから嫌いです
くつ下は履かせてあげるおかささま
おはようの声がした雨やんでいた
サユリストの夫はわたしを妻にした
おまつりは済んだ 大根煮ています

大阪市 奥村 五月

北鮮は飢餓の子救う金海へ
受信する塔をあの世に立てる夢
暮じまい終り過疎にもさようなら
この値上げ食べ放題もやめなはれ
影と歳断りなしについて来る

大阪市 小野 雅美

ユーミンよりもみゆきに寄せるシンパシー
吹きを壁に聞かせている夜更け
自分への褒美と減ってゆくお金
洗濯物干せば暗めな色ばかり
困った時だけ友へ電話をかけている

大阪市 笠嶋 恵美

ベランダから見える大木眼の保養
老いの不調アートの様に見つめてる
区役所で親切にされうまくゆく
困った時は電話下さい いい言葉
はちばちと終りの準備する積り

大阪市 川端 一步

戦争のシヨックで世界中狂う
不発弾また見つかったホン近く
ママごともお野菜高いねえと言ひ
秋ですね読書しますか食べますか
いい句会いつもお酒がついている

大阪市 古今堂 蕉子

てこね寿司伊勢路の旅は雨の中
五千歩のノルマが果たす血のめぐり
耳鳴りの今日はかわいい鈴の音
辛辣な言葉なるほどと思う
信用を無くさぬように生きている

大阪市 近藤 正

長男を秘書官にする脳天気
Jアラート危機感煽りほくそ笑む
ズブズブのカルトと自民蟻地獄
デジタルに慣れて時計の読めない子
長生きし年金目減り取り戻す

大阪市 坂 裕之

大阪市 津 村 志華子

大声で話す仲間は気持ち良い
人柄が滲み出るのは食事会
自治体も国もお金を使つてと

しつこいと言われるぐらい丁寧

反対の意見あるのは当たり前

大阪市 高 杉 力

秋風が瘦せた詩人を連れて来る
飲み頃の果実酒漬けた人はなく
包帯の訳を話せば長くなる

ピンチにはいつも直球ど真ん中

難関の数独秋の夜は長い

大阪市 高 杉 千 歩

殺伐なニュース見ながら朝ご飯
もらい風呂昔よかった隣組

しサイズ縁がないのもちと淋し

プロよりもアマが受けてるのど自慢

何時だって言い出しつべはあの人だ

大阪市 田 中 廣 子

さっぱりした気性に惚れて六十余年
車かえ皆とドライブ最高だ

孫テストお出かけプラン先のぼし

プーチンの一方的な報復だ

高齢者に逆走されてまきぞえに

秋深しひとりの膳の煮ころがし

あの世この世冥想してる星月夜

進化進化手も足も出ず甲羅干し

錠剤をふん反りながら飲んでます

無事生かされた一年でした手を合わす

大阪市 寺 井 弘 子

若い気のリズムで軽いフライパン

余生でしよだから明るくナス カボチャ

迷わない自分の道をただ進む

茎も葉もひんやり冬の入口に

百歳の愛につつまれ生かされる

大阪市 寺 本 実

耳寄りな話の時は省かれる

逆らわず妻のリズムで行く平和

ありがたいお話の時よく眠る

悪人の歴史にプーチン名を刻む

思い出を紡いでたどる裏通り

大阪市 中 井 萌

傍目には味も素っ気もない夫婦
ござっぱり年金暮らし板に付く

ダイエツトなんて無理です秋だもん

ナス茗荷大人になって分かる味

一個しか要らない物が二個セット

大阪市 原田 すみ子

待つ勇氣持つてた君は強かった
胸の君セピア色にはならなくて
夫婦にも目に見えぬ線踏み込まぬ
細切れの睡眠思考も細切れ
運動会コロナで行けぬじじとばば

大阪市 降幡 弘美

爆睡しソーンしたようなマッサージ
ネットだとどんどん増えるついで買い
今日は雨ゆつくりしなということか
断捨離し売って買ってで元どおり
余る時間売買できりゃいいのにな

大阪市 山本 加お里

趣味に生き今が最高いい余生
長く生き先祖を守る私です
黄から緑警戒解除あー怖い
友達の声きくだけでファイトする
寄り添って車の下で野良猫が

大阪市 横山 山里子

どこの児もただ可愛くて七五三
スルメ噛む差し歯の具合試しつつ
残り物雑炊にして初炬燵
返納と足の不便のせめぎ合い
温暖化川のほとりに買った家

堺市 今井 万紗子

無理は承知もいちど好きな生き方で
楽しみは笑顔をつれてやって来た
点線を辿れば亡父も亡母も居る
無表情マスクの中は生き難い
無駄な話も老いの要と聞き分ける

堺市 柿花 和夫

程のよいところで茶漬け勧められ
よかったなあ お国訛りの先生で
昨晚のクイズが解けたトイレット
御猪口から湯飲み垣根が取れたらし
文明の汚点ヒト科に武器持たす

堺市 源田 八千代

秋桜咲き菊香る秋が大好き
敬老と誕生祝皆揃う
三年振りだんじり祭此処彼処
国葬とは如何なるものかTV見る
お手伝い世代交替してくれる

堺市 齋藤 さくら

十月の雨は切なく人恋し
あほらしいことにも頭突つ込んだ
どっちみちやがて私も火の中に
いい笑顔きつと幸せなんだろう
以外にもあつさりしてる人だった

堺市坂上淳司

動員令を機に若者が声を上げ
勇氣出し声出す若者に拍手
プーチンと同じ道行く北のドン
子や孫に灯火管制などさせぬ
戦争は嫌だと言える子に育て

堺市澤井敏治

パリトンがまだ耳の底セミしぐれ
いよいよか魚介の消える日本海
千日で仕舞いにしよよコロナくん
こんばんはと兩戸たたきに來る野分
句や詩の座標軸にはおかげさま

堺市内藤憲彦

ライバルはかつ井僕はカツカレー
大和路の歴史が映える青い空
なんでやねんの殺人事件増えてきた
核ボタン片手に平和説く不思議
ヒマワリは踏まれてもまた空へ咲く

池田市太田省三

ワルツからマーチに変わる不幸な日
母校百年三年だけの薄い縁
べらべらの松茸香る土瓶蒸し
つつましく生きて輪ゴムの溜まる家
事故の後出るわ出るわの安全策

貝塚市石田ひろ子

単線の小さな秋に逢いに行く
物忘れ正常ですと笑う医者
ひよいと辻曲れば月と鉢合せ
まだ余熱あつて泣いたり笑つたり
早早と孫來ると言う冬休み

河内長野市大島ともこ

守られていたと知った日遅過ぎた
不器用に生きた証の縦結び
まっとうに生きりや日も射す風も吹く
オンオフの切り替え実に苦手です
夢でいいぜひ聡太くんお手合わせ

河内長野市梶原弘光

友とふたりささやかに美酒オリックス
スマホから時時距離を置いてみる
叱るより褒める分かつちやいるのだが
人生の復路ゆつたり鈍行で
微笑んでくれる人にはつい甘え

河内長野市木見谷孝代

今日も無事に済んで感謝の箸を置く
音楽会三十人の輪の中に
指揮棒へ一つにとけてハーモニ
久しぶりの緊張感の塔まつり
どう転ぼうが一人の旅を楽しまん

河内長野市 黒岩靖博

今の俺アンチ親父と嫌がられ
年下の妻が免許証先返す

しっかりと食欲出だした秋間近

反省はしてると妻にラインする

翔平がルースを抜いた二刀流

河内長野市 中島一彌

ウルマンの詩を老体に言い聞かす

靴下のゴム跡残る歳になる

街路樹の根が見せつけるチカラコブ

宇宙へと夢躍らせるフルムーン

ヒト科エゴきつちりしつべ返し食う

河内長野市 藤塚克三

長生きで預金残高減っていく

調子よく事が運ぶが金が無い

口喧嘩妻と互角と甘い読み

駆け込んだトイレ只今清掃中

つれづれに昭和の日記読み返す

河内長野市 村上直樹

あかんたれ今でもママのチチンプイ

搗き立てのお餅曾孫の頬っぺにチュッ

平成よりでかい昭和の肝つ玉

九条の稔りいくさも知らず喜寿

校庭の青い果実に湧く希望

河内長野市 森田旅人

会者定難いま立っている交差点

ピリオドの発火 今生まだ続く

褒めことば全細胞が口あける

未完成わたくし色の虹の味

やあ・おう・で長い拘りとけた夜

岸和田市 雪本珠子

遠く見てこころの視力取り戻す

雑草は生きる痛みを知っている

輪の中の噂話は聞きながす

言い訳はよそう心が減入るだけ

作句して脳の老化を予防する

高槻市 片山かずお

派手に泣く末っ子アピールが上手い

腰はここですとアピールするベルト

コロナ籠もりがベルトひと穴緩くする

煽て上手のスゴイスゴイに乗ってやる

過疎の里発電パネルよく目立つ

高槻市 島田千鶴子

水槽のメダカの夢は春の川

黄昏て君への想い遠くする

不漁かなやせた秋刀魚が並びおり

持ち味に進化を重ね新記録

愚痴小言言わぬが花の老いの知恵

高槻市 初代 正彦

泣きどころ誰もがあつて面白い

収束へ今こそ老いの自衛策

黒電話ソフトな声につい長話

彼の地にも咲いているのか曼珠沙華

金木犀の誘いに惑うスニーカー

高槻市 富田 保子

安倍さんの様な首相はもう出ない

そう言えばどこにしまった安倍マスク

お散歩は新コロナ居ない田んぼ道

あと五年大事に使うこのラジオ

深夜二時ガバッと起きて句集読む

高槻市 松岡 篤

コロナ禍で自慢話のチャンス減り

散歩道でもマスクする怖い癖

プーチンも赤子の寝息してた筈

苦しいが客の笑顔で値上げせず

コロナ禍で使い道無い金残り

豊中市 上出 修

反論をマスクの中で言っている

老いる脳オレオレ詐欺が狙っている

まだ青春ギネスに載った堀江さん

一芝居打ってピンチを切り抜ける

文春砲弱いところを狙い撃ち

豊中市 きとう こみつ

歳とってもなんぼでもある学ぶこと

午後は晴れ傘はもて余されている

プーチンの欲は底なし泥の沼

ベント乗った和尚さんから聞く講話

女王と安倍国葬のレベルの違い

豊中市 藤井 則彦

的を射た苦言はいつか糧となる

来し方が滲む夫婦の長い影

西郷どんを真似ても犬は付いて来ず

グータッチで溶けた親子のわだかまり

やれやれと静かにほくそ笑む遺影

豊中市 松尾 美智代

一人で出来た事を二人でしてる今

いろいろあつて今は穏やか共白髪

手がかかるけどやはり夫と暮らしたい

母に似た節くれた指娘にも似て

もう一度生き直しても同じ道

豊中市 松田 蟻日路

若くない霜降り肉に胸が焼け

乾杯の挨拶がちと長いなあ

適当にとほけた後に出る証拠

退職後上達中の皿洗い

お顔洗えたね明日もがんばろね

豊中市 水野 黒 兎

糖衣錠めいて笑顔が苦を包む
幸せな迷いワインの白か赤
ままごとに早やパパよりも強いママ
虹は吉雨のち晴れの置き土産
人も物も珍重されるうちが華

富田林市 中村 恵

風からの便り元気でいるそうなの
きれいごとと言える介護はまだ序章
息継ぎが上手にできてまた歌う
マツチの匂いに昭和が蘇る
冥土へと君を探しに旅立ちぬ

富田林市 山野 寿之

侵攻に脅え戦く無辜の民
颯爽とタンブ運転茶髪の娘
験かつぎ財布に眠る五円玉
半年の汗を称えて千枚田
人間の十人十色見る生活

寝屋川市 川本 信子

脳にびっくり水たまに煤払い
来年の七つ道具の手帳買う
腰痛が神経痛を連れてくる
三日坊主続いているのは五七五
シャーロックホームズ一冊で秋夜長

寝屋川市 伊達 郁夫

残照が過去を虚像にしてしまふ
本棚に少年になる森がある
四コマ目夢を点滅して生きる
知恵の輪が解けて迷路に迷い込む
コスモスに惚れた男の旅靴

寝屋川市 富山 ルイ子

水戸黄門まだ印籠が役に立つ
悪人をこらしめている時代劇
相棒二人頭脳明晰目を見張る
六ヶ月ウクライナまだ忘れな
早く冬が来たあわてて冬服を

寝屋川市 平松 かすみ

女王のように私も眠りたい
国葬へデモ隊日本摩訶不思議
スナップの整理一冊やつとこさ
手も足もグッパグッパする日課
朝食は三個で足りる丹波栗

寝屋川市 廣田 和織

本棚にまだ並んでるブリタニカ
大根が美味いと言える歳になる
包帯を巻いて安心してしまふ
百歳になれば年寄りらしくする
2倍速で落ちる余生の砂時計

羽曳野市 磯本洋一

メダカ飼う飲み屋にデキシラランド・ジャズ
ストライクも言えなかつた戦時中
人生に卒業式はありません
勝者の傲慢と敗者の憎悪と
ベッドだけ作つて看護師いない国

羽曳野市 三好専平

甘酒に焼酎注ぐ妻レシビ
収穫の前夜で鳥のフルーツに
助っ人の名前覚えて姿消え
祖父母との会話の終りそうだよ
散歩道往復いつも笑顔して

羽曳野市 宇都宮ちづる

終末時計あと百秒を切る命
下手くそな手品に拍手温かい
旬という言葉知らない果実たち
乱世が好きな男の天の邪鬼
何とかなつたどうにかなつたと動じない

羽曳野市 吉村久仁雄

あと十年生きればひ孫に会えるかも
肉じゃがも母に問うよりスマホ味
ため口で婿がお酒の相手する
電光板近くで見ると点だらけ
全没で肺から空気抜けたよう

羽曳野市 徳山みつこ

たった一つの自慢耐乏には強い
よいしょどっこいしょ一段ずつ降りる
通天閣もうまつ赤にはならないで
愛のがんじがらめなら切望する
ブーチンの命は天が裁くだら

羽曳野市 藤原大子

日日合掌みなが平和であるように
三年ぶり心に響く太鼓の音
ありがたい半世紀過ぎまだ一緒
お互いに先に逝くなど同い年
ああ言えばこう言う互いまだ元氣

東大阪市 佐々木満作

コロナ禍の臆病神が離れない
目も耳も心も動く散歩道
無視されて反論ひとつ言えずいる
やんわりと厚かましさを言つてのけ
お互いに片目つぶつて長続き

秋休みなんてないのと孫が聞く
羊雲明日は秋雨の前触れか
空っ風手品のごとく銀杏散る
ベテランの引退遣り切つた笑顔
昭和の顔次々と逝くああ無常

東大阪市 西村 哲夫

茶道する娘が足で戸を開ける
昔々炬燵の恋があつたとき
謹賀新年少欲知足かくれんば
春よ来い歌い終わると夏が来る
有り難き平和も不安抱いたまま

枚方市 谷 英也

痛風というわが予報士はよく当たる
星空に一人たたずむ無人駅
あなた様返つてこない流れ星
締切日どんどん迫るにくらしさ
毒舌を開ける間はボケもせず

枚方市 藤田 武人

白杖の先は全てをお見通す
AIが審判リクエスト出来ぬ
流木を叩けば源流の響き
交差点真ん中へんで迷い出す
柵を棄てぬと憎しみに変わる

藤井寺市 太田 扶美代

花も虫も鳥も秋を慈しむ
話しかけると花も野菜もいい返事
肩貸して下さい坂がきつくなる
八人兄妹を覚えていた故郷
八十の坂は楽しく歩むべし

藤井寺市 鈴木 いさお

蛹のころを懐かしんでる揚羽蝶
厄介な人だがなぜか憎めない
泣いたって詮ないけれど泣くのです
誰の血を引いたかボクだけが薄い
大谷だつて投げミスもある空振りも

藤井寺市 吉田 喜代子

朝歩きマスクも無しに深呼吸
カレンダー病院行きの赤い○
円葉さん貴男の帰り待つて居た
一人鍋今年春菊良く育ち
令和四年喪中ハガキが増えている

箕面市 大浦 初音

残すものお金にしてと娘に言われ
反抗期いつも斜めに向い合う
いつ孵化か十年すぎた作句道
趣味多くどれもが中途半端なり
0120の電話取らずに無視をする

箕面市 酒井 紀華

「80歳の壁」友にもすすめ元気だす
おんな独り雨戸しつかり閉めてねる
初物は先に味わうダンナ様
わたくしを骨抜きにした遠い人
一点で止まるわたしの万華鏡

箕面市 出口 セツ子

子が元氣ならば幸福日々感謝
主人似か独りが好きな子供達
生きている実感多忙な日々が好き
内緒話聞こえぬふりをして平和
クイズ解き点検して老いの脳

箕面市 中山 春代

新聞を楯に二人の朝ごはん
水屋の笑い止まらぬ長い夏
指先が匂いに染まるカニ尽くし
赤ペンで埋める楽しみ山の地図
ダイエツト成功してもLサイズ

箕面市 広島 巴子

パレードに三年分の賑わいを
焼き栗はちよつとはじけた男の子
囲碁大会優勝銚子付け
若田氏の宇宙五度目に希望湧く
お茶ランチ秋の味覚の誘い増え

八尾市 寺川 はじむ

押すな触れるなひたすら折る核ボタン
陸続きじゃないニッポンの平和ボケ
本気だと念を押すから信じない
血の引いていく冗談を聞き流す
極暑に耐えた身体を癒す生ビール

八尾市 村上 ミツ子

急に冷えこみ秋行方不明です
行方不明の秋を探しています
クーラーからホームこたつへバトンタッチ
ことは盛り過ぎ句が肥満体になる
上がってほしい子の成績も給料も

神戸市 上田 和宏

良きものだ天動説で見る日の出
爺と婆自適自在の夫婦独楽
良きことはみんな飛ばして妻の愚痴
元氣な人真似てまだまだ生きねばと
咳一つするタイミング年の功

神戸市 奥澤 洋次郎

何事もなかったように耐えている
見送りをロボットにされ靴を履く
戦中に育まれ断捨離進まない
生きてゆくのがそんなに苦しかったのか
0点を二人で生きてそれでいい

神戸市 輿水 弘

水底の枯れ葉一枚キラリ浮く
ああく七字あいつこいつももういない
太い指不器用生きて節丸く
満面笑みふつと横顔憂い濃く
職転転人生の余白に詩の山

神戸市 近藤 正

いやな世だ善が苦しみ悪笑う
幼子の無垢な瞳に募金する

難聴もいいな小言が聞こえない

君付けはきつとなくなるジェンダーレス

ノーマスク過疎の里によく似合う

神戸市 斎藤 隆浩

また飲む近いうちにでもう五年

海外旅行時間できたら新コロナ

ポイントを貯める私に使う妻

感想文文字数を稼ぐ句読点

アロハシャツ模様次第で別人に

神戸市 櫻井 崇史

小走りの孫とハグする新神戸

満腹感いつもの眠け連れて来る

たわいない笑いがほぐす緊張感

ダイエットここはまだまだ通過駅

いつまでも現金払い止めれない

神戸市 敏森 廣光

足腰に僕の予定を決められる

女子会を横目に見つつ独り酒

テレビ相手に色色語るお爺ちゃん

監視カメラあると思わず睨みつけ

飲んで騒いで妙に淋しい夜の月

神戸市 富永 恭子

ナナカマドの赤い実 元気がれました
朝露の中で写した黄金波

珍しく喋り過ぎたかよく眠る

笑いのツボおんなじそれが嬉しくて

人の世や多勢に流れ着く危険

神戸市 能勢 利子

お隣が監視カメラを設置する

照らされるとにこっと笑いVサイン

百二歳の母は外ではいいお顔

手を繋ぐと杖は持たずに歩けます

ケアハウスではお手伝いするらしい

神戸市 松倉 正美

一皿に秋の味覚を天こ盛り

秋の七草すらすら言えて脳達者

一匹の秋刀魚を妻と半分こ

三年ぶりに采配を振る秋祭

秋の夜長柳誌を繰って遣り過ごす

神戸市 山口 光久

大勢になるとマナーが乱れだす

木漏れ日の中をゆっくり杖ついて

先達の体験談が道しるべ

人生を楽しく生きるマイペース

ごめんねの一言風は凧いできた

神戸市 山崎 武彦

逢うたびに何かひとつを褒める君

塩パツバ焦げおにぎりは祖母の味

老いの恋とろとろ煮込む粥の味

紅を引く少女に潮が満ちてくる

六〇点あれば上出来僕の子だ

明石市 糀谷 和郎

いつの世も裸の王は居るのです

理不尽を澄んだ子の目が突いてくる

脱走も自傷も辞さぬロシア兵

マイナーチェンジ黒子をひとつ取りました

選り好みしませんオファーあればこそ

芦屋市 新阜 義明

旨さには重さが足らぬブラジヨッキ

マタニティを着る人見ずも子は生まれ

三役に昇格神戸空港祝

表示のみ警察官の立寄所

値上げ攻め持ちこたえるか100均が

尼崎市 近兼 敦子

もめ事の一つはボクのいびきです

聞き上手のプライベートが気にかかる

聞きたいのはごめんねよりもありがとう

セルフレジそばで店員つきつきり

キャッシュレス自信なさそにだすスマホ

尼崎市 永田 紀恵

添削をされて私が居なくなる

枯葉舞うモンタンと居る散歩道

なにごととも過去形にして語る人

旅の友杖と薬と携帯と

苦笑いハローワークで出合う友

尼崎市 羽奈 和子

最後まで取っとくパフェのサクランボ

バルサミコ酢一度使ってから二年

色の点集まれば絵になる不思議

令和の子缶蹴りしてみおもしろいで

蹴られるためだけにあるサッカーボール

尼崎市 藤田 雪菜

愛足りず上手貼れない湿布薬

音読で小説読んでウツ晴らす

くたびれた笹に短冊願いごと

同じ味好きな人とは縁続く

老いるとは体隅ずみ痛くなる

尼崎市 山田 厚江

しゃっくりを新米パパがじつと見る

新米ママ授乳時間だ三時間

運動会年に一度のヒーローさ

ロシアの戦車地雷を残し逃げていく

戦争がしたいのならばおまえ行け

加西市 山端 なつみ

老夫婦湿布貼りあい行く田圃

人も機械も老体に鞭農繁期

農繁休暇の手も借りたその昔

値上げの秋米を食べてよ日本人

資材値上り来年の米作れるか

川西市 山口 不動

エリザベス世界のクイーンたりしかな

括りたしザンバラ髪の花

川原の朱の句読点彼岸花

着ける人少なくなりし赤い羽根

ロシアからみんな逃げ出しましたとサ

三田市 足立 つな子

音もなくおいこしていくスニーカー

夕暮れの大きくはむ児らの声

はやばやとおせち早割きぜわしい

丹波産黒枝豆の届くころ

ほれられて慢心するも心して

三田市 稲角 優子

ひ孫出来余後の幸せ掌の中に

命への賛歌キラキラ陽がのぼる

手をつなぎ奇跡の星を守りたい

ふらここを押してよ私ここに

冬木立抱けばあなたは燃えていた

三田市 上田 ひとみ

今日だけは素直になつて泣きなさい

夜空には愛しい星がまたひとつ

初恋のひとと逢わずにおきましょう

あの角で振り返つてはいけません

知らないでいたあの日ただピユアだった

三田市 大西 重男

平均寿命突破しましたあと付録

爺五人揃い定例飲み会だ

腰伸ばしつぎに一言もう歳だ

食べて寝てベルトの穴は増えつづけ

夜なべして草履を編んだ亡母思う

三田市 尾崎 一子

秋空に五穀豊穡神楽舞う

戦禍をのがれ避難民とはあわれ

命あるたつたひとつの星ですよ

しあわせを病が邪魔をして困る

美しいものやさしい人に歌がある

三田市 九村 義徳

手を伸ばし届く所に置く望み

卓袱台にコイン一枚妻の留守

夫婦して生命線を見つめ合う

健康で長生きしますあしからず

セルフレジ何故か係がやって来た

栗むきの難儀な手間も味の内

紙対応言葉忘れた議長殿

案山子祭り時世をうつす面白さ

国葬に巨費を投じてご満悦

川の日が無いと河川が大あばれ

三田市 住吉美和子

検査する前日だけは休肝日

寒暖を決めるラニーニャ・エルニーニョ

予報士には「所により」が救いの手

余所の庭通れば近い田舎道

丹波路に俄に出来る露天商

三田市 多田雅尚

冷蔵庫忘れた野菜花盛り

天気予報大事な日だけ雨マーク

リハビリに先ずは気合で出す一歩

三連休留守使えぬ孫の声

助手席でナビのナビする夫婦旅

三田市 中山昭美

激痛走る後遺症大腿骨の手術あと

旨い酒うまい肴に美女の酌

命を捜す探査機が飛ぶ銀河系

若作りして亡夫に会いに墓まいり

アナログの気まぐれ下車に風が吹く

三年振り少し意気込む秋祭り

金木犀香に誘われて行く散歩

久し振りピアホールでの同期会

コロナ禍で音信不通増えました

記念にとアベノマスクを本箱へ

三田市 堀正和

神様の気ままに泣いた楢円球

嘔吐くと筈はしない山の神

よく振れば愚痴も溶けてる濁り酒

北のドン毎日上げる大火花

父母と会える彼岸は酔ったまま

三田市 村田博

米寿来て三十路で逝った母想う

あしたへの鋭気を貰う茜雲

鍋物を恋しくさせる雪便り

恰好より気楽が嬉し馴れた靴

底冷えの街で笑顔を返される

高砂市 松尾柳右子

百億個誰が数えた乳酸菌

電話来た同期の数がまた減った

ゆっくりでええねんもう年やから

背が縮むズボンが長くなってくる

寝つかれぬ下五の言葉まとまらぬ

宝塚市 丸山孔一

丹波篠山市 北澤 稠 民

来年も元氣なつもり農に生き
目をつむり詮ない先のこと思う
幸せは自分で作るいい聞かせ
米袋三十キロが重くなる
人生も山脈あつて深み出る

丹波篠山市 藤 井 美智子

日の入りへ飛行機雲も茜色
今日の無事一番星へありがとう
六十年いいおつき合い亡友送る
丹精のキュウリ抜群うちの味
コスモスが揺れて今年も秋に居る

西宮市 緒 方 美津子

予報士も無口になった晴れ続き
何いわれても歩くのみ蝸牛
Uターンうれい過疎の鬼瓦
知恵絞れコロナにいわれたくはない
翌朝の月下美人を見ましたか

西宮市 亀 岡 哲 子

風ばかり吹いて九月が飛んでゆく
かさこそと秋の音して人想う
大丈夫今日はたまたま鬱の日だ
ほんまもんの秋がロマンを連れてきた
うれしさを誰かに伝えたい秋よ

西宮市 西 口 いわゑ

阪神が負けそうなので切るテレビ
美しいと決められているバラの哀
忘却も楽しく生きていく一手
どのページ今日は捲ろういわし雲
生きられる皆が愛してくれるから

西宮市 福 島 弘 子

ずんだ餅ずんだたつぷり娘の土産
黄信号渡るな子等に言われてる
揚げ物は飽きた飽きない老母の味
訳も無くチビた鉛筆取つてある
きつちりはしんどくなつてケセラセラ

南あわじ市 萩 原 狸 月

予報無視傘を忘れた悔いが駆け
横綱のない番付に現実味
着想の妙に感心して句集
クッキーの一つ気にする血糖値
免許更新へつびり腰でする米寿

奈良県 安 福 和 夫

ラフカディオハーンの生涯面白い
日本の文化に陶酔半端なし
元記者を文豪にした妻の功
妻語る神話民話に嵌りこむ
日本を応援叱咤した八雲

奈良県 谷川 憲

奈良県 渡辺 富子

三代の愛大思う散歩道

Jアラートミサイルだけは来んといて

子供の詩にはつとわが身をふり返る

若者のギャグが分からず笑うふり

もの忘れ書いたメモまでどこへやら

奈良県 中原 比呂志

奈良市 東 定生

一番に地球汚しているいくさ

怪しいぞ宮殿別邸官邸も

暗雲の悲しき一年変えられず

太陽も月も見ぬふりして自転

百度石願掛け人の見ぬ村社

奈良県 中 堀 優

奈良市 宇賀 史郎

淀んでも落ち着いたなら流れ出す

真つ直ぐに生きてりゃ出会う宝島

父ちゃんが一個言ったら五個返す

甘い酸い知ってるはずの爺なのに

人生の最終章の大芝居

奈良県 長谷川 崇 明

奈良市 加藤 江里子

「ごめんやで忘れとった」で済む歳に

虫取りの子の傍で父スマホ

忘れたと言わず記憶にないという

忘れたいことは意外に忘れぬ

人間が神の力を借る祭

ウォーキングいろいろ少し消えました

デパ地下で里のなまりとすれ違う

自転車と余命を競う秋日和

仏壇の奥にしまったままの修羅

あの世へと続く銀河が見えませぬ

奈良市 東 定生

虫食いのキャベツが売れる直売所

修正テープ大安売りの永田町

帰国子女も理解できないカタカナ語

廃寺に寄り添うように萩の花

外出はスマホがあれば事足りる

奈良市 宇賀 史郎

副業が本業筆の日本一

海軍の原点に見る薩摩武士

古民家に本瓦葺き残る街

毒ガスを兎の島に変えた友

山陽をしのんで巡る安芸備後

奈良市 加藤 江里子

繰り返す歴史の中にある愚か

大丈夫青い地球がある限り

ペダル漕ぐ昨日の自分より前へ

恩返し気力体力あるうちに

「また来よし」母のふる里訪ねれば

奈良市 高橋敬子

戦場に今も晶子が詠ってる
歌や笑い敬老会の心入れ
朝顔のしだい小ぶりに咲く朝
往復を歩けた道が行きだけに
山坂のないツアーないかとパンフ選る

奈良市 辻内 げんえい

スーパ―で妻を待つ間の一句二句
百歳の伯母との電話10分も
静かな街も日暮れと共に秋の虫
声出すもリハビリと知り経あげる
秋祭りコロナなんか邪魔させぬ

奈良市 山本昌代

能天気健康法の一つです
ゆっくりと噛んでゆっくり飲みこんで
まだ元氣家事一通りこなせます
減らず口たたくも感謝しています
秋の味不漁続いているサンマ

奈良市 米田恭昌

郷愁は缶入りピースあの香り
宮仕え何度飲んだか苦い酒
蟬りがとけて昔の俺お前
来たの暴挙遺憾ですますお人好し
虎はもう巨人の上であれば良い

生駒市 飛永ふりこ

朗らかなコスモス達が呼ぶ宴
篆刻の根気を偲ぶありがたさ
神無月どこか空虚を漂わせ
はんなりの紅葉そつと励まされ
寄せたら肩の凝りまで消滅す

香芝市 大内朝子

久々に心踊った塔まつり
同い年頑張ってはるがんばろう
再婚もせず女の幕下りる
戦争のニュース耳鳴りひどくなる
人間を生き切る笑顔忘れない

和歌山市 上田紀子

神様の名前も知らず神頼み
天変地異日ごろの備え怠らず
美しい錯覚でした枯れ葉舞う
この星の吐息でしょうかゲリラ雨
末っ子は雷さまの落とし子か

和歌山市 柏原夕胡

愛情の深さいそいそ飯を炊く
母さんの味を越えてはいけません
ハイハイと娘の説教を聴いている
金は無いけど家族と暮らす幸がある
大変だ娘もオバサンになってきた

和歌山市 松原寿子

ラインから刺激もらって元氣出る
しばらくは土鍋の出番楽しもう
ボジティブに生きる女のひとり旅
あるがまま生きる覚悟へ夢を足す
頂いた便りは永久に温める

海南市 小谷小雪

小走りの秋じつくりとおすわりよ
兄のため献杯します星月夜
私のすべてが親のプレゼント
鉛筆を削ると風も軽くなる
のんびりとアンソロジーを編んでゆく

橋本市 石田隆彦

乱暴な処置しか取れぬ汚染水
ずぼらして二度寝している朝八時
手取り足取りでは大成しない
人の道再教育の要る議員
一言が胸に凭れて苦しめる

(前月分) 鳥取市 池澤大鯨

穴だらけ人柄どうと言われても
穴があったら入りたいその図体で
節穴を模様に見たてイラスト描く
節穴が目玉に見えるのぞかれています
天然のふりあるがままを受け入れる

(前月分) 岸和田市 岩佐ダン吉

招待と言われて心重くなる
百日紅咲いた彬よ無念の死
それだけの村です星が降るだけの
大勢に流され石を蹴っている
ラッキーはやっぱりあの日だけやった

(前月分) 米子市 後藤宏之

かつお節削って今日の劇終る
礼状のかわりに湯気の出る電話
火あぶりの刑に処せられ目が醒める
劇中歌外れていても主役僕
さあくろぞ雷鳴った降り出した

(前月分) 松山市 古手川光

故郷へ蟬のシャワーを浴びに行く
おいほれた入道雲が活入れる
台風まで沖繩苦しめる無情
国葬へあの赤木さん苦笑い
永田町に蔓延記憶喪失症

(前月分) 熊本市 杉野羅天

夏終るもう郭公の啼かぬ阿蘇
蝉時雨夏の露天も乙なもの
晩節の一步を覚悟して歩む
汚染水溜まるタンクの悪夢かな
長老が長老として住める世に

(前月分) 大阪市 寺井弘子
まだ生きる遅咲きだから枯れるまで
叱られる一步手前に大泣きで

雨上り忘れた傘に言い訳を
遠い人胡瓜ポリポリ思ひ出す

赤飯の湯気いい知らせ待っている

(前月分) 八尾市 寺川はじむ
ワクチンで鎧つけたと人の波
薬にも毒にもならん温い友

票集め言葉に乗った日の迂闊
褒めそやされてついつい背伸びしたくなる

売れない皿が気落ちしたよに巡り来る

(前月分) 和歌山市 松原寿子
ひとり居に慣れたか我慢強くなる
限らない優しさ受けて立ち上がる

ひと区切り心も軽く荷を降ろす
それだけの夢の欠片で笑み戻る

お互いの気持便りで響き合う

(前月分) 神戸市 山口美穂
長電話愚痴励ましが言える友
背は縮み腰屈んでも爪のびる

デジタル化ああ生き辛い米寿です
姨捨山の国にかわってゆく日本

長生きに杭 医療費を高うする

(前月分) 奈良市 米田恭昌
在位七〇年惜しまれ微笑の女王逝く
非常時に国葬故人安倍何思う

名月に亡父の下駄履き出る散歩
ダイケア武骨な指が鶴を折る

グツと堪えた拳ポツケに折り畳む

「川雑」語録 ⑨

川柳は詩界のパツクである

坪内逍遙

歌舞伎が劇の化け物である如く、川柳は詩の化け物である。あんな簡単な形式で、音の数がたった十七だけで、あれほど、自在に通俗に、おまけに皮肉なをかしみまでも持たせて、複雑な人生の、時としては含蓄の深い機微を詠じ得た詩が又と外国のどこの文学にあつたらういや単に詠じたといふよりは、叙して批判し描いて諷刺した斯んな詩が又と現在のどこにあるか？ 又と過去のどこにあつたか？

(「川柳雑誌」大正14年1月)

英語 de Senryu ⑬②

麻生葎乃 『福寿草』 (1955)

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

しみじみと心培う部屋もなし

I have no room

*to cultivate mental charms
for myself deeply*

一生に自分の部屋というのが欲し

I just want a room

*all to myself
forever*

room 部屋 *cultivate mental charms* 知的な魅力を培う *for myself* 自分自身用の
deeply 深く *want* 欲しい *all to myself* すべて私自身用の *forever* 永遠に

～リバーウィローのため息～ ⑬② 詩人、永山柰郎先生と平光善久氏との出会い、そして私

2021年4月号、5月号で紹介した永山柰郎先生より、私家版による『翻訳と自作 III』が送られてきた。すでに永山先生の詩歌活動は紹介させていただいているが、今回の翻訳に岐阜市出身の平光善久氏の作品が収録されている。私が岐阜で暮らし始めて10年ほどたった頃、市内の中日文化センターで「英会話」のクラスを受け持っていた。平光先生の「詩のクラス」が隣室であり、出会いの不思議さであろうか、私は初めて詩のクラスの受講生になった。つまり私の詩の先生が平光善久先生であった。先生は鉄道兵として大陸に従軍中、脚に砲撃を受け片足を失くされた。戦争体験をつづった処女作「案山子の歌」(1949)でデビュー。失くした片足が時折痛むとおっしゃっていた。「期待」(EXPECTATION)と題する平光先生の詩と永山先生の英訳を紹介しましょう。

地球が崩れる日

僕だけが生き残るかもしれない

両腋に松葉杖をつく

地球との接点が三つ

この安定感をそっとしておこう

When the earth should crumble, / I would be the only man able to survive. /

When I lean on crutches under my arms, / I'll get three points of contact with the earth. / This sense of balance / I'll keep in secret.

川柳句集『肉眼』

橘 高 薫 風

霧の奥 熱が出そうな林檎の実
火口湖から わが眼鏡から 霧生まる
お隣りと壁一枚の夜が長し
初冬の恋 鶴の面着て立ち向かう
十年経て女の言葉あわれなり
スケートの余裕は枯葦を啣え
汝が祈りふかからしむと雪を給う
天使と同じ羽根でクリスマスカードが着く
今日も最後に見た壁のマリヤさんの目
お元日 わが家の波夷羅大将も
元日の冬濤を率て逢いにくる
初夢も汚れるばかり 中年は
青年の歌なまぬるきお元日
お年玉 不兌換紙幣ばかりなり
立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

白毫寺境内 華美な乳母車

一枚めぐり一枚めぐり 波と恋

安西峰代さん結婚

およめさん金平糖を食べ 愛に満ち満ちてありぬ
石くれも三つ積んだら思惟の塔
攻める扉逃げる扉を持つあいっ
別れの日 真珠一粒嚙みこんで
友来たる 古きレコード回すべし
山男 山を下りてはみすばらし
白い孤独に耐えた烏賊の目の黒
牡蠣殻におのずからなる波の縞
中年の私語 枯葦の金の前
南天の朱実と隣り合わせた死
冬の雷 石仏七千俯瞰の中
人生の果ての祇王子桜 真冬
乳母車 いのち育てしものなつかし
土の中 土の埴輪が埋められ
墓があり 急に土あたたかくなる

自選集

小島蘭幸

雨が降る池田勇人の像に降る
オオタニの自打球世界一痛い
コスモス街道自転車と揺れている
父母の墓芒が原を抜けて来た
大人びた孫のコメント朝刊に

仁部四郎

師走の「師」その人どこに住んでいる
師走には十大ニュースに追加あり
出るカネふえるすなわち師走です
さて師走年金目減りまだ慣れず
来年の歳を数える大晦日

平田実男

快食に快便恙無い卒寿
足し算も引き算もある人生譜
黙ってる父が母より恐かった
満足が弾まぬ毬にしてしまひ
酷評が僕を成長させていく

福士慕情

面会は五分間でガラス越し
僕のこと覚えているか忘れたか
ガラス越し妻はキョトンと見てるだけ
身振り手振りパントマイムの五分間
施設から写真が届くいい笑顔

藤村亜成

僕の寿命とどちらが永い歯の寿命
カラフルな会話に活性化してる今
好きな曲波長に体が乗っている
コスモスの可憐を見入る秋の午后
遠吠えがいつそう寂しい夜の枕

松本文子

いつも押すスイッチ私を裏切らぬ
流れ星約束したのに来ぬ返事
二十四時間もつと長いと思う日々
台風が過ぎて落葉を掃いている
筆筒の中ひっくり返している寒さ

三浦強一

国葬は不協和音の中を行く
モンタンの楽譜か電線のスズメ
ヒト科皆神のタクトに踊らされ
協役の一生でした人間座
まだ余熱あり五七五 五七五

三宅保州

階段を三段跳びする嬉しい日
身びいきになるとメガネが狂います
メガネ拭く仕種で敵をじらします
客が来ること口実に客帰す
国会のことか今日も今日とて茶番劇

村上玄也

猛暑あと台風が来てかき回す
猛暑の夏に厳寒の冬を危惧
春秋が短くなつていずれ二季
猛暑に円安物価高に拍車
後味の悪さ残した国葬儀

森山盛桜

フレイルをハツと戻した赤い花
又ひとつ死語になりそう僕の語彙
誘う人あつて金木犀匂う
若者の歌息継ぎは何処でする
時効とは言えど数Ⅱは負の遺産

八木千代

二の丸
八枚の畳に並んで洋間
仏壇はメイン安政からのもの
本丸を明け渡したは五年前
二の丸と渡り廊下で往き来する
願いごとこの二の丸で別れたい

山本希久子

秋夜長スマホアブリへ迷いこむ
スマホも教えぬ老老介護の明日
八十路のカーブ締め直す靴の紐
しのび寄る寒気へ労わる肩膝腰
年齢の坂ころころと命

板尾岳人

敗けいくさポストの裏で病んでいる
じゃがいの怒り八月十五日
幸福はイロハニホトチリヌルヲ
あの日から紅生姜が好きになり
あの日からあぐらをかいているキャベツ

居谷真理子

空っぽでいよう朝焼け消えるまで
乗り越してしまつた海をただ見てる
両の手で顔に塗り込む罪数多
傷心にむごいばかりの青い空
まあ飲めと酒でふやかすべっちゃんこ

川上大輪

ちちんぷいぷいぐらいが丁度良い薬
振り向いた過去から届く忘れ物
ながあーいお付き合いです不整脈
生きているうちは火も吹く水も吹く
どちらにも転べないから知らんぷり

北野 哲男

スーツ着た慰安旅行もセピア色
生真面目で無季定型の父だった
満月に芒と妻に紅残る

拭く汗へ頓服ですと泡を注ぐ
言いたくは無いがと小言長々と

木本 朱夏

食卓の椅子の一つが壊れて 秋
また一つ帽子が増えた秋の天

松茸なら子どもに食べ飽きた
紀の国に生まれ蜜柑はもうもの

水槽の金魚そろそろ冬支度

新家 完司

喉飴が溶ける苛立ち鎮めつつ
ラーメンの汁も入った皮下脂肪

珈琲が匂ってきたらオフタイム
靴下の穴など平気慣れている

ナマケムシ叩き潰して再起動

高瀬 霜石

妻ひとり子ひとりでしたピアノ葬
ご飯の湯気で眼鏡が曇る 泣いた

押し入れに昭和の箱が積んである
読経中失礼ばくは熟睡中

永代供養そんな約束していいの

竹治 ちかし

気が付けばレトロになっていた昭和
悪いのは相手ですよという戦
動物の仕種に貰う思いやり

引き続き注意をせよと言うお上
生かされて生きて七十六の秋

津守 柳伸

ATMずらり無言で用を足す
国産の栗丹念に剥いている

パースデイまさかまさかののし袋
彼岸花映えて稲穂とコラボする

バス旅は満席ばかり柿熟れる

西出 楓楽

夫逝き二十五年はもう夢に
黙食せよと南座の幕の内

赤い舌マスクの中で出しておく
昔話するとだんだん愚痴になる

八十路自分を騙すこと増える

小島蘭幸川柳句集

『再 会Ⅱ』

領価 千円(送料共)

ご希望の方は川柳塔事務局まで

TEL 06-6779-3490



森の集句

『普天句集』

戸倉普天

留守にして小鳥さえずる駐在所
 雷にあとずさりする雨宿り
 老夫婦酔へば借金した話
 貸も借もない師走なり花を活け
 手袋のままの握手のたよりなし
 記念撮影両脇の人偉く見え
 一番バスを待つ橋詰の霧と霜
 父の書いた火の用心の札煤け
 親しめば土にはちつとも嘘がなし
 石臼があつて何でも粉にする
 交叉点ビルから見れば面白し
 歟先の小石一つを見逃さず
 秋彼岸孫連れ出して稲を見る
 灰皿へ小さくまるめた飴の紙
 宴会の帰りに商店街をぬけ

(昭和52年6月26日発行、川柳塔社)

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

いくさせぬ国にも軍事評論家
 ハイテクの火遊びやめよ砂嵐
 苦労した話はしないシンデレラ
 走つてるうちは倒れぬ小企業
 近道はせぬ父さんのちびた靴
 淀川の水ぬるみたり月斗の忌
 なつかしや少年倶楽部 紅緑忌
 びいどろの金魚が紅し沖繩忌
 美しきものとこしえにモンロー忌
 あやかつてみても蛙の子は蛙
 大輪が咲く大輪の花の種
 エメラルドすくすく育つ孫二人
 古希の希は稀にはあらず希望の希
 旗の色もう変えられぬ古希の坂
 ホステスは三歳の孫 古希の宴

ひめゆりレクイエム(二句)

春霖や ひめゆりの塔ひそと立つ



木本朱夏選

たつの市 江尻房子

戦争と平和が風が揺れている
鏡からこんな年まで生きた顔

つぎの世は逃げてみせますあなたから
橋できて近くて遠い里の秋

ぼちぼちか重い腰上げあの世まで
無音のまま行く救急車秋の雨

寝屋川市 長尾千賀

姑という絶滅危種文化の日

妻の客テンション高い菊日和

新酒注ぎそれからの事聞くつもり

アンチエイジング恋はごちそう前頭葉

マドンナも今年傘寿の秋の蝶

指切りの魔法にはもうかからない

佐賀県 真島久美子

ペン先の迷いを月と分かち合う

なにもかも許したはずの唐辛子

吐き捨てた言葉は風に分岐点

折り返し地点に風が吹き溜まる
鎧ならもうワタクシの一部です
保護シール全身に貼る空に貼る

岐阜県 喜多村 正儀

憎む日もあつた真意は知らぬまま

話したくなるまで待った黒電話

遠距離の愛の電波が越える海

正直な汗はチャンスを見逃さぬ

選ばれた一語が見せる底力

口げんか出来て嬉しい病みあがり

大洲市 花岡 順子

言いなりにはなれず和平は難しい

私にはないロボットの記憶力

充電をしないと坂を登れない

習慣になってしまった赤い羽根

手軽です三行ほどの日記帳

五線譜をくるくる遊ぶ音符たち

尾崎市 清水久美子

羽根のあるギョーザは邪道だと思ふ

ワクチンもせずに出好きが会いに来る

ライバルは文武両道声美人

塵払う序で大正琴を弾く

級友とペアで被っている鬘

宿題が出来るマクドの隅が好き

河内長野市 坂野澄子

砂時計返すと今日が改まる

背広脱ぎそれから名刺軽くなる

長生きのコツは口喧嘩の刺激

解熱剤恋には効かぬ但し書き

字の乱れ別れの予感よぎる胸

満月のあかりが誘うプチ家出

尾道市 小畑宣之

泣き笑いこれまでも又これからも

笑顔より阿修羅の如き顔が増え

溜息の代りに川柳吐き出そう

目に余る歩きスマホの交差点

四季のある日本の良さを思う秋

今日は雨読み書きテレビ日が暮れる

山口市 中前幸子

銀杏の絨毯晩秋の童話描く

鉤括弧はずせば空が高くなる

トランポリン覗いてみたい空の底

等身大の鏡は嘘を見逃さぬ

夕焼けの枯れ野で亡母の声を聞く

カタカナの街を出られぬ律義者

ひとり呑む晩酌二合道しるべ

律儀者無言正座で月見酒

蛸で呑む話し相手のいない夜

とろとろに煮込む棒鱈母の味

折り折りに花咲く国のありがたさ

暇なので深爪ばかりしています

母やはり不死鳥明日は退院日

実家の香タイムマシンに乗せられる

天の下マグマの上に凍と立つ

マイハート君のあれこれ保管場所

ラッピング電車に遇えば今日は吉

観て聴いて栄養補給ここにも

雉鳩は郷愁誘う声で啼く

男坂息切れ切れで登り切る

一絡げ捨値で並ぶ規格外

アンパンのお臍が主張する道理

終電車明日を見る人見ない人

百均の皿で不服な神戸牛

和歌山市 西川千鶴

東大阪市 青木隆一

神戸市 城戸誓子

— 45 —

神戸市 米田 利恵子

マンシヨンの何処にいるのか虫の声
退屈病に負けぬとクロスワード買う

紅葉一ひら庭掃除の褒美だろう

ま夜中に毛布一枚足す初冬

我が家でもとうとうおでん鍋を出す

独裁者容易に壊す青い空

尼崎市 山本 百合

向かい風子を抱き締める交差点

添いとける誓いを破りひとり逝く

故郷へ青つきぬけて鳥渡る

惚けても記憶の底のわらべ唄

保護犬も戦禍の子等の目をしてる

耳うちのひそひそ声がきな臭い

尼崎市 宗 和夫

ステイホーム派手なアロハで過ごす夏

重力に負けそうになる秋の朝

過去帳をめくり始まる老いの朝

仏壇の世話が日課になつてゐる

終活は遺影を決めるところから

ダイエット棺を担ぐ子等のため

鳥取市 大前 安子

親としてネジ一本は持っている

揉めごとは一抜け茶菓子待っている

バラの花トゲがなければ薔薇じゃない

下山する足裏地球確と踏み

つぶやけば少し楽かもあかさたな

母の服似合うウフフフいいじゃない

松江市 中筋 弘充

マドンナの家の周りを見て帰る

赤字でも走ってくれるJ R

血圧計に大きい息をしてあげる

体重を量られるとき息を吐く

身長を測られるとき背伸びする

口先の衰えみせぬ傘寿越え

神戸市 山根 弘華

戦争は一瞬で和の文字を消す

数え歌友と遊んだ野の小道

やさしいが心の中が読めぬ友

天寿まで一花さかす詩の道

石橋を叩きすぎたかまだ一人

自己暗示自分にかけてチチンブイ

芦屋市 荒牧 孝子

栗名月今日はミサイル飛ばぬよう

マスクに札幌邪をひかないこの二年

久し振り赤いリップでいい気分

吉運の黄色いシャツに望みかけ

後の祭り話しにのったホイホイと

ヒナ守るカラスも同じ母性愛

東京都 宮田 栄子

ローカル線スマホ頼りの一人旅
越後へと鉄印の旅夢列車

十日町腹拵えはへぎ蕎麦で

火焰土器縄文人はアーティスト

酌み交わす呑み鉄の旅月さやか

夢二酔う千曲の宿に女人あり

富士見市 中島 通則

コンピニが散歩コースにある便利

五百羅漢妻と僕とが並んでる

BSの刑事ドラマは皆若い

仏壇に蠟燭 ケーキにキャンドル

朝寝坊しても支障のない暮らし

年寄りに意味の解らぬコマージュ

大阪市 今村 和男

空を飛ぶ鳥に隠れる場所はない

陽だまりに黙って集い皺伸ばす

男には爪先立ちが似合わない

引越しの俺より古い物はなし

雪まちか中也の悲しみ洗いおり

延々と続いた夢が終わるころ

泉大津市 助川 和美

老いの手に暇はくれない庭の草

憩いの場風呂屋は三時暖簾出す

作り置き冷凍保存して家出

長老は役にも立つが邪魔もする
聞き流すこれも一つの処方箋
人脈の太さを知った通夜の席

三田市 野口 龍

朝夕に野良にエサやる勝手口

楽しみは新米届く今日か明日

大好きなピザのチーズで火傷した

会いたくないなのによく会う恋がたき

食べる事が精一杯だった若い頃

賽銭は五円ふたつと決めている

米子市 川本 美津子

定年後話し相手は家の猫

深入りはしないと決めたお付き合い

抜け道が分かり気分が軽くなる

年なのか空を見上げる事が増え

秋風に声かけられて散歩する

誕生日コスモスを背に写真とる

白河市 鈴木 たけし

我が色を迷うことなく咲くダリア

百五では足りぬ年齢早見表

旧道を見つめたままの石地藏

受付でいつも聞かれる誕生日

変化球のように振ってる老いた足

台風一過布団を叩くここかしこ

松江市 相見 柳歩

困難な道を選んで歩きます

青春の祭りが今も続いている

名前負けしないようにと本屋行く

ふざけるないつも相手になつてくれ

祝杯だ一步前進できた夜

松江市 山根 邦代

値上りが寒さと共にやって来た

味覚の秋野菜果物むかごまで

柿好きを知つてて届く美味しさよ

米寿だと言われ元気のありがたさ

私より白寿の叔母におめでとう

安来市 原 徳利

急激な気温低下に爛をする

汐風のフェロモン炙るエイのひれ

指ハート作り秋波に応えてる

キスをする形口笛吹く形

長生きの秘訣語らぬ鶴と亀

津山市 高橋 由紀女

コーヒーを濃い目に気合い注ぎ込む

衝動買いの魔の手が伸びる無駄遣い

人見知りしない口ポ君絶好調

猛暑超え早目に作るつるし柿

嫁した子へ梅漬け送る里の味

美作市 岡本 余光

古い殻脱ぐ決断をする八十路

秋夜長本を読まずに何を

仏滅と思う川柳できぬとき

渡り鳥侵攻知らぬまま飛来

階段でこけて無事とは運がある

広島市 田桑 恵子

揚げ物のおかずにつられ缶ビール

息子の帰省お節介が燥ぎ出す

もうとまだせめぎ合つてる歳となり

どっこいしょ身体の縮む音がする

朝のルーチン化粧をするとシャンとする

広島市 松尾 信彦

居酒屋に底辺の声オピニオン

風評で知つた名物ことのほか

吊革に読書家さがる安堵感

空気とてただにはならぬ近未来

老妻へメモになかつたモンブラン

尾道市 小川 道子

日本晴れ綺麗な○が描けました

奥ゆきの深さしみじん人間味

ペンノート持つと気分はアーチスト

タイミング外してからの肩の凝り

万が一のときの写真笑つてる

尾道市 村上和子

紅葉の一葉一葉の自己主張
独り身の気楽結婚止めました
遠くから見れば仲良し夫婦です
曼珠沙華むねを焦した過去の恋
秋深く詩人のこころ花芒

竹原市 土井輝恵

生きていく業の深さよ胸疼く
視るだけの松茸の味忘れそう
自転車をお巡りさんに注意され
私より運氣廻りがよい夫
豊作茄子行き場がなくて萎びてる

山口市 兼崎徳子

薄情な人は白い歯で笑う
お守りの葛根湯に救われる
性別も姓も自由になつてゆく
妻を抱き銃を構える戦士達
さみしさが愛のかたちを模索する

府中市 岸田武

秋空にふわり老軀を浮かばせる
溶けるように土に還つた曼珠沙華
胃壁で踊つた一杯目のビール
おやつには熟柿を三個もいである
米一粒を拾わずに居られない

松山市 郷田みや

たとえばの話はしない罽雲
金木犀を待たずに行つた秋まつり
あの人を想い今年も栗を剥く
また暑くなるかもねえと衣替え
大根の白さに恥じている私

今治市 安野かか志

軽やかにメタボはいないアキアカネ
居座つた入道雲が秋を呑む
寒村の秋へローカル線のうめき
後任に譲る安堵の酒を酌む
勇ましい自慢話が酔い潰れ

福岡県 本田さくら

彼岸花一列並び秋を咲く
負うた子に近頃いつも負わてる
雨風に負けず配達ごころうさん
今日はどれ着ていこうかと迷う朝
白鳥一羽刈つた田んぼで何想う

沖縄県 あらさくら

平和です僕の宝はおまえだけ
いつの日か笑笑笑となるでしょう
寄せ植えにも反発する花がある
遠い日に抱かれた母の乳房恋う
距離保ち仲よしこよし続く友

沖繩県 禱 モモト

初対面何歳ですか聞かれても

妻は指大事に夫家事仕事

私なり平和の祈り子や孫の

ただこねて行きも帰りもおんぶされ

年重ね喋りは達者聞き下手に

宮崎県 恵 利 菊 江

足音が過ぎ寂しがる萩の花

秋風が本のページを捲り過ぐ

しなやかに覚悟を決めてアプローチ

珈琲の冷めて決断迫られる

虫の音に聴き耳尖る一人膳

弘前市 小山内 真由美

最終章どうにも出来ぬこともある

ココとナナ家族になった金魚さん

早くおしゃべり出来たらいいね金魚さん

自由自由そんな齢のはずなのに

色なき風は淋しさまでも連れてくる

石川県 堀 本 のりひろ

無明世界三途の川までこのまんま

ハイハイから今や三つ足八十路越え

大人世界のがれられない蟻地獄

南無阿弥陀仏ここに居ますよお釈迦様

人生の階段極め認知症

横浜市 加藤 佳子

80歳の壁は超えたと言うものの

コロナ過の句会にやっと戻る顔

リモートの句会にトライする時世

座の文芸リアル句会が魅力増す

奪還へ結束固いウクライナ

小田原市 虎澤 昭久

ため息の意味はさておき秋の風

つまり踏んばりぐせが身についた

今日もまた老後の趣味の独り言

蜘蛛の巣の一夜城あり玄関に

雨戸打つうるさい風のオノマトペ

名古屋 富田 末男

打開するための自負なら強く持つ

良い答出せる嵐の中に居る

今になってまた振り出しに戻らされ

数多あるドラマ観てきたのは眼鏡

自信持つ答え不動にしてくれる

八幡市 武田 悦寛

吊り橋の真ん中命惜しくなる

立ち話一人は欲しい聞き上手

忙しそう助詞を省いてしゃべる孫

覚悟決め助走をつけて言う本音

青空に取り残された雲ひとつ

大阪市 大浦 福子

とれとれの野菜に今朝も湧くパワー
心込めかけた手塩は嘘つかぬ
渋皮煮手間ひまかけて秋を煮る
丸くあれダンゴ虫から生きる術
駆けぬける秋は秘やか小紫

大阪府 奥野 建一郎

双方の引くに引かれぬ水掛け論
勝てないね瀬上の鮭の生きざまに
口論の火をつけたのは言葉尻
やいやいと急かして若い芽をつぶす
感傷にふける過去など振り向かぬ

大阪市 岡田 恵子

本当は悲しいのです夏薊
マリオネット身動きとれぬ連れ糸
雨しとど今日も飛べない鶴を折る
あんたならできるとエール亡母の声
わたしだけが知る花野への非常口

大阪市 近藤 風羅

拾う神あって私の今がある
風流もやっぱり悪は許さない
ノンアルに慣れて毎日休肝日
適当に作ったあてを妻ほめる
老兵は去りゆくのみもまた楽し

大阪市 阪本 秀子

氣の流れあつさり変えるストレッツチ
選択肢あつて幸せだと思ふ
本降りで一氣に秋が加速する
マスクせず大阪博にでかけたい
バラ持って愛しい人はやつてくる

大阪市 白谷 よしみ

絵手紙の松茸に聞くどちら産
友と行く一泊旅行ケアハウス
パブリカは赤いエナメルプリンセス
風吹けば大風呂敷で飛んでみよ
爺の列年金波止場竿ならぶ

大阪市 滝井 えみこ

前触れもなしにストする冷蔵庫
さみしさと同じ濃度のココア飲む
影うすれやと自分が戻るか
車椅子秋の夕陽を引ききつて
栗羊羹こころのイガもほろり取れ

大阪市 田原 康雄

河川敷ボール投げると吠えるポチ
たくあんも煎餅もまだバリバリよ
蛇口から溢れる清水日本好き
ワクチンを四度打ったがまだ不安
高級魚夫婦で一尾サンマ食う

大阪市 中村峰子

二度寝する今日の予定は何もない
あれこれとしくじりばかり猫に愚痴
昼間寝て夜中に騒ぐうちの猫
いつみても寝ている猫が妬ましい
妄想で眠れないまま夜が明けた

大阪市 松田 聰

人見知りしない孫の目澄んでいる
下校時に道草する子弾んでる
事故に遭いスマホカメラに囲まれる
物価高買いだめしても追いつかぬ
ウクライナに核使われぬよう祈る

大阪市 宮本千恵子

ペタペタと義母の糠床返事する
猫草も時々食べてミケ元氣
玄関先のマリーゴールド女王様
舌だけは夏バテ知らず元氣です
コロナの妊婦命をかけて赤子産む

大阪市 森 廣子

永びくコロナ地方の価値が変わりだす
五輪に隠す黒い尻尾が見えて来た
国税庁の名前でも来る詐欺メール
コオロギも未来の食で頼もしい
空は穏やか十五夜の月祈る月

大阪市 吉積栄次

ワテンボいつも遅れて妻返事
命日に貴方の好きなモカの味
おみくじに良縁ありと我八十路
人並みにコロナの数に仲間入り
人並みの幸せ願いなぜ悪い

池田市 倉本一弥

低音に酔っているよな車掌さん
古稀過ぎて妻とぐにやぐにや話す
XS老いて縮んでこのサイズ
ローラー付きの椅子は楽だが落ち着かぬ
おはようと今朝も元氣と妻と笑む

泉佐野市 檜葉良子

すっぴんの自分の顔に鏡伏せ
待ち焦がれた暇がこんなに辛いとは
譲るのも譲られるのも氣をつかう
叱つてた子に今日もまた叱られた
結局は夫に頼る助け船

貝塚市 吉道あかね

やさしい人だ小さな秋を見つけてる
弟のいのちローソク継ぎ足そう
迷ったら歩く歩いてよく眠る
不真面目も生真面目過ぎるのも嫌い
手術後は消費期限を書き替える

柏原市 神崎 江

重陽の節句願うはピンコロリ
ビールから熱燗にする月見酒
秋色で秋を知らせるワレモコウ
止まらない十七音のラブレター
ひらめきを待ち続けている未完の句

交野市 山野 双葉

金はないが筋肉貯金励んでる
身の丈に合って私の小さき幸
演じきる他の誰でもない私
もういいよみんな出てきて踊ろうよ
何度でも信じてやろう私の子

門真市 坂本 星雨

明日はどうあれ菊の薫りに満たされる
住所不定の一步手前で生きのびる
独りを啜う豪華おせちのコマーシャル
糞虫になつて世間の風を聴く
微酔いのいのち見守る秋の月

河内長野市 穂口 正子

目に見えんギブス付けられ生きる老い
ああバナナ毎朝食べて飽きてきた
おばちゃんと呼ばれ振り向くおばあちゃん
「これも縁」呪文のように唱えてる
「元氣やで」嘘ばっかりの電話口

吹田市 西沢 司郎

国葬よりも関心穀倉ウクライナ
SEE YOUと言ってはみたが次はいつ
翔平の話題になると目が潤む
日に一句それが私のノルマです
物忘れ辞書引き回し空騒ぎ

摂津市 野々村 レイ子

ポケットに入れておきたい恋ひとつ
燕の巣優しい人の軒先に
父母在りて家族だったと想う日々
母ゆえに許す心を幾つ持つ
感性を磨かなくては句は出来ぬ

高槻市 鳥居 宏

猛暑耐え悠然としてさるすべり
日差だけ夏を残して秋の空
台風が日本好きよと寄ってくる
このところ受話器の友の声掠れ
中国の驕りはまるで元日本

高槻市 三谷 白黒

日曜日カレーの日ですパパの味
暑過ぎて蚊も来なかつた夏でした
不器用を笑われている卵むき
家内には威張って当たる悪い癖
孫達に我が人生を重ねてる

豊中市 貝塚 正子

徘徊をしようか今は朝三時
ヤバイよですべて通じる若者語
ドラマ見てふと涙ぐむ歳となり
短命な弟だったシヤボン玉
出航のドラの音ドラマ作り出す

豊中市 齋藤 奈津子

隣から秋刀魚の煙深呼吸
長雨に三日は続く独り鍋
自粛続き楽しみになる通院日
見栄捨てて夫をなだめて車椅子
秋の夕暮れくしゃみで終る立ち話

羽曳野市 黒木 ひとみ

秋分の時を忘れぬ彼岸花
刈り後の田に藁の香が広がりにて
稲刈られ主の迎え待つ案山子
歩こう会道祖神に見送られ
老いも子も戦争で知るウクライナ

東大阪市 青木 ゆきみ

通学路マスク越しでも会話増え
テストアラム一齐に鳴る百貨店
黄緑に惹きつけられるアマガエル
トラブルが仕事の種になる因果
風呂敷を自在に包む所作美人

八尾市 田邊 浩三

コツコツと時計が刻む我が寿命
死ぬよりもボケが恐くて怯えてる
補聴器のせいで知人が減ってゆく
投票で自分の国を決める人
わが空も核ミサイルが飛ぶ時代

神戸市 田本 古鈴

公園に友のごとくのイチョウの木
悩みなどいつか散り散りそんなもの
年を取る話も相手も事欠いて
寂しさは秋の罪ではありません
カレンダー秋のページが少なくて

神戸市 横田 次郎

自分には嘘はほどほど楽に生き
涙声勝負があつた口喧嘩
足して引きゼロで御の字喜寿祝い
嘘泣きをしてる途中に腹が鳴る
窓閉めるやさしい空気逃げぬよう

神戸市 みぎわ はな

影だけが独り歩きをして困る
日毎夜毎わたしの影に諭される
夜の音しんしんひたひたと誰か
夜の底天地よろずの声を聴く
孤独ひとがりではないあめつちに抱かれてる

神戸市 村松久江

老眼が値札のゼロを見落として

耳障りな言葉微笑みで返す

ミスなどと思つてないわこれくらい

気が付けば老人枠に組み込まれ

夢ならば二つ三つは持つてます

明石市 瀬島流れ星

念押せば押すほど不安軽い口

下町に嫁いでホホホからハハハ

逆走にハッと免許を返す気に

柳歴をやたらに訊いてくる無礼

新札に折り目微妙な罪意識

三田市 木村マユミ

バラ色の終着駅を目ざしてる

明日こそはくり返してる明日こそは

逢わずしてラインが繋ぐラブコール

救われる命もあったトリアージュ

ワクチンと自己防衛で今は無事

尼崎市 八木幸彦

胃液吐くほどに飲ませた深い傷

水割りのグラスの果てに見えた虹

日本酒と食べる刺身が好きという

熱燗でくつろぐ一人慰労会

禁煙はできても禁酒できぬ日々

伊丹市 延寿庵野鶴

命との吃水線にある野心

今という刹那の狭間泳ぎ生き

才覚の冴えを楽しむ太郎展

青春ヘリセットしたい骨密度

ロックしたところを開く座禅堂

伊丹市 岡村風琴

アンニュイへしつかりと読む歎異抄

好奇心6Bで描く一行詩

月下美人弁明もせずさつと散り

そのことに触れず秋風背を抜ける

喝采を浴びることなく紅葉散り

三田市 幸田厚子

情熱的太郎もゴッホ爆発だ

徒食でも口は達者で乗せられた

アイドル風案山子も令和茶髪です

母削るおかかの鉋手垢染み

弁当代妻に支払うワンコイン

三田市 松下英秋

少子化だ野生本能もつと出せ

晴れの日もありますからと慰める

罰ゲーム負けたらあなた肩たたき

ワッショイワッショイ担ぐ人無し秋祭り

スミマセンと言えばいいのに遺憾と言う

三田市 森 玲子

読みかけの新聞猫に邪魔される
時々ぼーと猫と夫は同い歳
洗うたび私の髪が逃げて行く
機械化で時代の波に追いつけず
好きだけど夫は夢に出てこない

宝塚市 岸 田 万 彩

よっころしよ膝も掛け声聞いている
ボケてると言われる友の吐く名句
値上がりをしたと気づかぬ財布持つ
音程もテンポも合つて下手な歌
どことなくSDGs 嘘っぽい

丹波篠山市 河 南 すみえ

一番星天の声するから祈る
あまたの星よいつもキラキラありがとう
待つ人が居なくても行く故郷へ
隙間からスーッと秋風入ってきた
久し振り鰻丼食べる家族の和

丹波篠山市 横 溝 安 子

日によって濃淡がある霧の海
留守番にビール枝豆用意して
アイロンで伸ばしたいよな顔のしわ
帰るなり手洗いせよとせかされる
遠き日の祖母の想い出箱まくら

西宮市 高 瀬 照 枝

わたしにも人の目気にして歩けた日
見るだけのビール磨いて過去想う
バラは散りわたしこわれる音をきく
リハビリはほどよく進み身も軽い
生きること歩いて用が出来ること

西宮市 高 橋 千 賀 子

値上げくる真綿で首を締めるよに
ウイルスと戦いながら老いてゆく
マスクしておみこし担ぐ秋祭
焼芋が美味しい秋はまた肥える
食欲の秋が過ぎたらダイエツト

西宮市 藤 原 みよし

老いの身にムチなど打たずなでなでと
おとつと側にはいつも妻がいる
弁当が絆深くし五十年
富士の山頂上白いこれぞ富士
めだか飼ひ百匹はいる幸くるね

奈良県 室 田 行 久

春祈願豊稔感謝秋祭り
山車神輿平穩無事を祈る民
決めたのに要らんこと言い振り出しに
手術医の安請け合いに増す不安
岐路に立ちいつも無難を選ぶ僕

生駒市 饗庭風鈴

大鍋にぐつぐつ煮こむ蟬り

解けぬ謎あるうちはまだここに住む

ありふれた日々にもあつた新しさ

五時起床カラスの挨拶真に受ける

正論は氷柱となつて人を刺す

生駒市 永田美美子

ご先祖へ新米炊いて大盛りに

嫁ぐ娘とほのほの語る旅の宿

孫来る日笑顔たつぷり野良着脱ぐ

運動会マーチに乗つて腕まくる

愛しい歯覚悟促す歯科の椅子

和歌山県 三枝眞智子

想定外の雨が日本を狭くする

お盆過ぎご先祖さまとハイタツチ

熱中症クーラーつけて関節痛

おこしやす先ずは一ぱい氷水

十五夜の月に心を見すかされ

和歌山市 北原昭枝

コスモスが揺れて少女の淡い恋

胸に手を当てれば懺悔多かりき

黄昏のベンチで見てる流れ雲

過ぎた日は戻つて来ない秋の風

人生の午後は楽しく語り合う

和歌山市 倉橋悦子

街歩き百円バスを乗り継いで

絵手紙の向こうはきつと花ばたけ

勝敗はビデオ画面に頼つてる

処分する未練からめて文庫本

わたくしを虫干しにする衣更え

和歌山市 定松宏枝

背筋ピンまだ大丈夫立ち姿

年齢を重ね従う子の意見

平凡な今日も幸せ鯛雲

別々のポスト廻つて応募する

赤い羽根数本付けた母帰宅

和歌山市 佐藤まき

草取りの後一日は休息日

保険証に臓器提供意思の問い

九十年休まず臓器老いました

物忘れにパイオの力借りてみる

爆発だ！ 残したものは偉大なる

和歌山市 鍋嶋澄子

草叢で姿みせず秋の声

さつまいも掘りたて貰い粥を炊く

雲の峰海は藍色私も青に

窓開けて秋風迎えニラの花

名月を浴びて魅せられ清々し

和歌山市 まつもと もとこ

本屋のおばちゃん本好きの天職

いつまでもコロナが流行るわけがない

涼しげなマスクは夏の見切品

新古品マスクの埃あゝ鼻炎

シンプルに解決「ニアー」と「にゃあ」と「ニャ」

海南市 山中 閑

コーヒートの苦みに朝が動き出す

焙煎の香りところがほぐれゆく

断ち切れぬ未練くすぶる彼岸花

名残惜しい東雲草に彼岸きて

川明かりそぞろ歩きにははのこと

鳥取県 田中 重忠

蝸牛が画いております銀の地図

黄金の稲穂がまねく散歩道

悲しくても嬉しくても泣く老い独り

呼んでもお金は天から降ってこぬ

正直な鏡がうつす団子鼻

鳥取市 上山 一平

トンネルが何処まで続く値上げ秋

欠かせない自粛中にもストレッツチ

嵐吠え耐えてゆつくり秋を見る

肥えた土真赤にトマト微笑んで

目や舌の肥えて嬉しい秋がくる

鳥取市 狭武 紫陽

熱量に負けてイエスの旗をふる

悪しからず今日の涙は見せられぬ

遅咲きの花にやさしい風が吹く

スパイスを一振り夜は明けてゆく

昨日より少し背のびのハイヒール

鳥取市 山野 すみれ

プーチンよ目が覚めぬなら目を閉じよ

実るのを待っているのは猪も

閉じたグー開いたパーを見てるチョキ

落語家の上手に蕎麦をすすする音

世界中花を咲かせてみたらどう

倉吉市 宮田 風露

いつまでも老い苦しめる寒暖差

横文字が日本語隅に追いやる日

詐欺巧妙その知恵善に使つたら

コロナ禍で送れなかつた友の葬

紙と鉛筆準備したのに浮かばぬ句

倉吉市 若松 由紀子

毎日が限界の日々老いた今

今日も無事何にもないと書く日記

生きてこそよかつた今日の嬉しい日

朝目覚め今日のドラマの幕があく

目標は日に八千歩医者いらす

京都府 北野クニオ

空元氣出して通てる赤のれん
萩の花ひっそり咲いて夏は去る
彼岸入り律義に咲いた曼珠沙華
古稀過ぎて傘寿を目指し頑張るぞ

大阪府 高木道子

ご近所に医者に坊さん青い瞳が
同じ年さりげ無く見る首の皺
家族葬増えて香典宙に浮く
同窓会そろそろどうやと葉書くる

大阪市 前川善之

亡き母は太陽のような笑顔です
亡き父はえびす様より怒らない
趣味持てば老人なれど長生きに
人助けブーメランのように返りくる

泉大津市 葛城隆雄

恥ずかしい犬でも躡守ってる
他所事がいずれ我が身に振りかかる
馬鹿みたいコンニャク談義裏表
きつぱりと言えないツケがここに来て

大阪府 尾崎文子

うれしいねゴムのスカート流行ってる
趣味の虫断捨離しないまだ増える
結果など誰もわからん今日は寝る
八十はまだこれからと励まして

堺市 古川光雄

子や孫に逢えば散財したくなる
新病名もらってあの世近くなる
八十路入りえらそにするかいじけるか
朝散歩ついでに神社でたのみごと

神戸市 青木公輔

馴染めない人が時々寄ってくる
ストーカーの手前でふっと立ち止まる
天下茶屋辺りの恋の物語
その理由をゆつくり聞いてあげますよ

神戸市 石川克美

当節は夏が終れば冬が来る
すつくりと咲き揃ってるヒガンバナ
この歳でときめくことがあるなんて
やるせない身近な人との別れの儀

三田市 生田えい子

しつけ糸解かず掛けた母の葬
踏切を一行並ぶ千鳥足
介護中薄れた愛に気合かけ
墓参り団扇パタパタ蚊の退治

三田市 辻開子

冬仕度みかんはあるが炬燵まだ
夕ぐれが早くて食も早くする
とれたての菜園胡瓜飽きませず
高血糖食のセーブもだいぶ慣れ

丹波篠山市 澤 良子

外出着袖通さずに巡る四季

この庭の百花繚乱癒される

先は闇若いと思うこの気持ち

万歩計犬のおかげで一万歩

和歌山市 福島 一雄

待ちましたくしゃみひとつでわかる秋

どっこいしょ数え切れない独り言

歳とって地震の震度良く当てる

頭の良さ額の広さ無関係

鳥取県 橋谷 静江

思い込み数数あつて困ってる

細やかな幸せ娘来てくれた

マスク顔だけで誰だか分からない

一人寝の秋の夜長に夢の数

倉吉市 伊藤 嘉昭

年聞かれさば読み「七十」若いじゃん

野球狂つける薬があつたはず

ピンクのダイヤ「娘にやるよ」夢を見た

テレビ止め五十一巻読んだ秋

三次市 伊藤 寿子

開店より閉店苦い味と知る

傘寿すぎても商いからは逃げられぬ

ああ神さままだ川柳をして良いですか

元に戻るわけには行かぬ生きること

高知市 三谷 松太郎

名月や白色人も愛でたのか

もう一人別の私も頑張るな

立て板に水の乾きの速いこと

二度寝して損したわけじゃなさそう

沖縄県 宮 すみれ

赤トンボ散水よけて羽伸ばす

落ちそうで落ちないセミの殻の足

食そそるグルメ画面に物価高

食の秋体重計に何度乗る

横浜市 巖田 かず枝

体育の日かけっこ苦手思い出す

赤もんべ足の痛みを和らげて

歩行器の助けを借りて送る日々

古い二人手足の痛み自慢して

東京都 高岡 弥生

陽性で解熱後喉にガラスあり

変わりたい変わるためには自分から

子育ての歪んだ愛情誰のため

子の渡米既読スルーで心配に

豊橋市 小松 くみ子

病院がコロナの巣になるハナシ

ソーメンよりうどん恋しい秋の風

巖かさ消し賑わう茶店七五三

伸びた芽へジャガイモメニユー続く日日

(前月分) 大阪市 森 廣子

痛いし腫れる腕の上がらぬ四回目

贈与収賄五輪の尻尾隠せない

国税庁の名前でも来る詐欺メール

祭り復活夜空を焦がす大花火

空は穏やか十五夜の月祈る月

(前月分) 神戸市 青木公輔

キラキラネームが嫌で花子と付けました

我が家にも二刀流が二人居る

恋は貸切り只溜息が残るだけ

仙人が内緒で僕を呼ぶのです

副作用の無い薬です召しあがれ

(前月分) 鳥取市 吾郷天遊

ひとり旅自分のために買う土産

番号で呼ばれて僕に顔がない

ふる里の土産自慢をするリング

拳より説得力のある涙

納得がいかなのままに箸を割る

(前月分) 青森県 月波与生

いただいた夢のあとがきだけ読んで

らいおんはTikTokで換毛期

預言者のドアノブだけが壊れてる

絵に描いた夕立そしてアンダンテ

アルマイル海には海の雨が降り

(前月分) 寝屋川市 坂本ミヨノ

友の電話笑顔のまま顔ゆるむ

晴れた野に大空曇る雷雨なる

お目出度う傘寿祝いにひまご見て

腰足曲げ歩く姿の自分イヤ

(前月分) 藤井寺市 松井正義

まだ残暑秋の虫たち大合唱

そよ風にしばし憩いの朝の五時

病い癒え見る満月は格別よ

雲よどけ今日は十五夜お月見よ

(前月分) 神戸市 みぎわはな

気紛れな秋空布団干そうか干すまいか

鬼ごっこもカクレンボもしない子ら

井戸端無くて会議出来ない女たち

ベントの娘に迎えられ昼奢らされ

(前月分) 松江市 山根邦代

稲刈りが今年は早い里の声

テレビから掛け声もらい足踏く

電話から人の気持ちの分らぬ声

嬉しさは彼女出来たと孫の声

川柳塔柳箋

3冊 送料共 1000円

事務所あてお申し込み下さい。

誹風柳多留一二篇研究 28

伊吹和男・高野範雄

山田昭夫・小栗清吾

細井龍夫

清 博美

220 一日も添はず千日であらしてしに

伊吹 千日寺は、その昔に千日念仏回向が行われたための名であり、大阪市南区難波新地にある浄土宗の法善寺のこと。みや三勝と西屋半七が、法善寺の近くで心中したことを一日と千日の結びで詠んでいる。この心中事件は、安永元年初演の『艶容女舞衣』などに脚色されている。

千日寺に百日紅咲て居る

傍三三

―千と百の掛詞。

高野 松が岡句にもとれるが、「史伝」は松が岡の項にあげている。

山田 礎賛。三面子先生は、三年〓千日ととられたようですが、無理でしょう。

小栗 賛。「千日であら」と表記されている以上、三面子説には東慶寺が「千日寺」と呼ばれていた証拠が必要（千日に寺にいて死んだ）とは読めないから）だが、捜すことが出来なかった。

「千日寺」という呼称は、その由来の性質上、他にもいくつがあるようだが、礎稿お示しの寺が最も有名で「三勝・半七」の句としてよろしいかと思う。

ただ江戸歌舞伎の「助六」の原話である浄瑠璃「大坂千日寺心中」（元禄十三年）の存在が気にはなるのだが。

清 賛。「死に」だから東慶寺は無理。東慶寺で駆け込み女が死んだ類句は見当たらない。

221 かたみ金今はあたなれかけま買ふ

伊吹 「古今和歌集」（巻第十四・恋歌四）「伊勢物語」（第百十九段）や謡曲「松風」などの、

形見こそ今はあたなれこれなくは
忘る、時もあらましものを

よみ人しらず

の文句取り。亭主が形見の金を残して亡くなったため、後家はその金で陰間を買うようになった、と詠んでいる。

清 今はおたなれ芳町で遣ひ捨
賛。

傍三三

222 おいらが子だとこじきだと姫の評

伊吹 雨が降りそうで降らない、はつきりしない天気という諺に、「乞食の嫁入り」というのがある。これは振袖振らない、の洒落である。意味は違うが、この諺の表現そのまま借りているのではないか。たくさんの嫁入り道具を持ってきた他家の嫁を評して、我子だったら乞食の嫁入りほどの仕度しかできないと。その他家の嫁が、必ずしも持参嫁だと限定できないように思う。

気がるな花嫁式度めと評が付き

傍二二七

高野 賛ですが、持參嫁も捨てがたいと思います。

山田 礎賛。嫁入道具を見ての評でしょう。

小栗 そのようなことか。

清 同じく、そのようなことか。もう少し文脈のスッキリした句を作ってもらいたいものだ。

223 おいしい事袖を通さぬのが十九

伊吹 厄年で亡くなった娘の残した着物。袖に手も通さなかった新品のままのが、十九枚あると。女性の厄年の十九歳を利かせているのは、言うまでもない。

清 賛。おしい事手を通ぬが十九品 六九9

224 むまい事むすめのしやくの相手也

伊吹 美人の娘が、酌の相手をしてくれれば、こんな美味しい酒はない。「しやく」は癪も考えられるが、癪の場合は相手でなく、介抱であろう。

山田 酌に出た娘でふしをあわす也 六四23
山田 酌とばかり思っていました、なるほど賛。

小栗 なるほど「癪」説も捨てがたい。「酌」では何のからくりもなく、「そうですな」という外ない句だが、それだけの句ということにしておくか。

清 それだけの句でしょう。

225 太刀をぐわりりとなげ捨てかしわ餅

伊吹 端午の節句の武者人形の太刀を子どもが投げ捨てて、柏餅を食べている様子を軍談調に表現している。

両刀投出し柏餅をくんな 一三九34
—腕白小僧の配り餅。

小栗 これは菖蒲太刀でしょう。

清 小栗説、菖蒲太刀に賛。子供が差していた菖蒲太刀をがらりと投げ捨てて。

226 やきものをふところにしてよふるよろ

高野 「焼物」は、焼魚のこと（川柳大辞典）。

冠婚葬祭等の宴会で手を付けなかった料理は、お土産として持ち帰る。娯楽の少なかつた江戸時代、持ち帰ったお土産を囲んで家族の団欒が行われる。宴会の規模・出席者の棚卸し等に花が咲くのである。

主題句の場合は、しこたま酒を飲み、無造作に焼魚を懐に、よろよろとした足取りで帰って行く。

やきものと小僧を壺人ことづかり

明元鶴2

やきものをと、けた人をといつめる

明三義4

—亭主が帰って来ない

小栗 賛。焼魚を懐に入れるとは、臭そうだが、そういうことなんでしようね。

伊吹 酔っぱらっている故。

清 賛。

227 目かい八見へねど千両役者なり

高野 「目界の見えぬ」は、目の見えない、目のきかない。（日本国語大辞典）。

盲人が一時に検校の位を得るには金千両を要した。華やかに舞台で見得をきる千両役者をふまえて、悪辣な手段で千両もの金をかき集め検校の位を買った盲人もまた千両役者だというのである。

かへさぬに成ると千両役者来る 安六宮3
千両で染めても目に八見へぬなり

清 賛。

明五義1

愛染帖

新家 完司選

(投句254名)

抱いてゆく雨降りの日に出す便り
西予市 黒田 茂代

(評)濡れないように宛名が滲まないように、胸に抱いてポストまで。そのような優しい心遣いによって人は繋がっているのだろう。

懐んだら大仏様に会いに行く
池田市 倉本 一弥

(評)難事におち当たって頭を抱えるたびに昔馴染みの大仏様に会いに行く。優しい御温顔を見上げているだけで心が和んでくる。

通り返りにもうティッシュもやせてきた
明石市 梶谷 和郎

(評)ロシアのウクライナ侵略から物価が暴騰。価格が同じでも減量されている。無料配布のティッシュが消えるのも時間の問題か。

ピロシキは好きプーチンは大嫌い
尼崎市 清水久美子

(評)ロシアを代表する総菜パン「ピロシキ」は健康的で大好物。だが、同じロシア産でもプーチンは顔を見るだけでも吐き気がする。

体温計二人で覗くこれが古い
高槻市 富田 保子

(評)平熱かな? 不安な顔で覗き見る体温計。老いを感じることも多々ある中でも、お互いの体調を思い遣るときに強く感じる。

孫のブラジャー心配の種また増える
堺市 内藤 憲彦

(評)つい先日まで無邪気に走り回っていた孫娘だが、ブラジャー着用とは青天の霹靂! 悪いヤツに引つかからないように切に願う。

悩んだら大仏様に会いに行く
奈良市 加藤江里子

(評)難事におち当たって頭を抱えるたびに昔馴染みの大仏様に会いに行く。優しい御温顔を見上げているだけで心が和んでくる。

通り返りにもうティッシュもやせてきた
明石市 梶谷 和郎

(評)ロシアのウクライナ侵略から物価が暴騰。価格が同じでも減量されている。無料配布のティッシュが消えるのも時間の問題か。

ピロシキは好きプーチンは大嫌い
尼崎市 清水久美子

(評)ロシアを代表する総菜パン「ピロシキ」は健康的で大好物。だが、同じロシア産でもプーチンは顔を見るだけでも吐き気がする。

川柳塔紳士淑女の社交場
神戸市 斎藤 隆浩

(評)「川柳塔まつり」の印象だろうか。広々

とした美しい会場に上品? な語らい。だが、「作品持参」が難儀なハードルである。

吹田市 太田 昭
五歩先で妻の一步を待ってやる
大阪市 折田あきこ

染まりません貴方色した女には
桜井市 安土 理恵

オギヤアからわたしは私ほつといて
大阪市 中島 幸徳
言いつけの格安買えず叱られる
弘前市 稲見 則彦

母ちゃんにゴメン・アリガト言えずいる
三田市 上田ひとみ

会う人に太ったねしか言われな
倉吉市 大羽 雄大

ご近所は大事朝夕ご挨拶
大阪市 原 幸子

落ち込むと天使が肩に手をのせる
黒石市 石澤はる子

人情と義理天秤を困らせる
唐津市 仁部 四郎

守るもの我が身一つを持て余す
大阪市 高杉 千歩
先に逝くいい人ばかりは残る人
土佐清水市 辻内 次根

他人事ではないが他人事である
大阪市 谷口 義

寝屋川市 長尾 千賀
嘘ついた帰路三日月がついて来る

松江市 石橋 芳山
誰が食うA5ランクの肉なんて

東大阪市 青木ゆきみ
病院も人気商売カフェもある

神戸市 奥澤洋次郎
屑芋しか買えないままで妻は逝き

尾道市 小川 道子
丑年でA型うお座さびしんほ

三田市 野口 龍
下駄箱の真ん中にある古女房

広島市 羽城 裕子
花柄の服を着た僕変ですか

橋本市 石田 隆彦
メロンパンはマル満月は二重丸

岡山県 田中 恵
のんびりと生きるが老いは急ピッチ

寝屋川市 伊達 郁夫
地味な役重ねて渋さ身に纏う

寝屋川市 伊達 郁夫
佗しさを亡母の声で目が醒める

大阪市 古今堂蕉子
悲しくて日記白紙のまま眠る

大阪市 古今堂蕉子
生きてますまだ元気でです米を研ぐ

大阪市 古今堂蕉子
花に水 顔にたつぷり化粧水

池田市 奥園 敏昭
難問の数独解けず寝付けない

宮崎県 惠利 菊枝
人間に会うために咲く彼岸花

奈良県 中堀 優
初恋のあの娘は何処酔芙蓉

大阪市 平井美智子
百均もコンビニさえもセルフレジ

三田市 大西 重男
悠々とスマホ決済お婆ちゃん

堺市 村上 玄也
解説書の中の言葉が分からない

美作市 岡本 余光
パソコンも老化動きが鈍くなる

樺原市 居谷真理子
正直に言う人いない金のこと

弘前市 福士 慕情
大安は吉日というのは嘘だ

弘前市 福士 慕情
いつまでも私の山脈は青い

米子市 妹能令位子
土を捨て空が欲しくてタワマンへ

米子市 妹能令位子
異常気象 母なる川も牙を剥く

米子市 妹能令位子
もう傘寿いやまだ傘寿四股を踏む

弘前市 清
私にも九回裏があるはずよ

藤井寺市 太田扶美代
私になかなか懐かないスマホ

奈良市 大久保真澄
いじめだと思いうスマホもパソコンも

豊中市 水野 黒兎
グルメルボ珍珠ですねは不味い意味

鳥取県 門村 幸子
よい目覚め大事なことは朝済ます

豊中市 松田蟻日路
ツアラトウストラ3ページ目で眠くなる

黒石市 北山まみどり
お利口をやめて脱皮の下準備

三原市 鴨田 昭紀
傷ついた翼にトミー・ジョン手術

佐賀県 真島久美子
縁あって待ち合わせる競馬場

弘前市 高瀬 霜石
美人に会うとなぜかくしゃみをしてしまう

東京都 川本真理子
言い切つて語尾はやや上げ気味になる

神戸市 敏森 廣光
初孫に婆ちゃんキリリ蘇える

鳥取県 斉尾くにこ
目は閉じる心も閉じるけれど耳

境港市 藤原 久直
紙おむつ世話にならぬと四股を踏む

豊中市 きとうこみつ
行楽の秋アツシー君を募集中

奈良県 渡辺 富子
遅れまいとルーベで本を読んでいる

箕面市 広島 巴子
再挑戦分厚い本がまだ読めた

高槻市 初代 正彦
棒読みのスピーチ嘆く句読点

松山市 大内せつ子
舞えるだけ舞ってごらんよ修飾語

米子市 池田 美穂
川柳もジムもいっぱい高齢者

大阪市 平賀 国和
賢治に学び没にも負けず句を作る

石川県 堀本のりひろ
四苦八苦出てくる詠はパンラバラ

神戸市 山根 弘華
焦つたら浮かんだ一句雲隠れ

鳥取県 竹信 照彦
句会出席マイカーで行けるうち

神戸市 みぎわはな
老人会入りわたしの若さ識る

横浜市 川島 良子
年齢はどうあれ私今が句

明石市 瀬島流れ星
大感謝今年も無事に八十路坂

尼崎市 山田 耕治
八十をいくつ過ぎたと尋ねあい

東大阪市 北村 賢子
ありがたい傘寿なつてもフラダンス

鳥取市 谷口回春子
生きてますやつと並んだ親の歳

吹田市 西沢 司郎
八十路坂半ばに來ても猶無縁

大阪府 高木 道子
同年さり気なく見る首の皺

宇部市 平田 実男
髪染めたけれどどうにもならぬ皺

鳥取市 狭武 紫陽
歳とること酷い事だと知る写真

大阪府 坂 裕之
朝食後一日分の薬分け

西宮市 高瀬 照枝
見るだけになってしまったヒール拭く

神戸市 山崎 武彦
数えるのは止そうと思ふ余命表

大阪市 石田 孝純
ふわり浮きゆらり生きると赤とんぼ

摂津市 野々村レイ子
キウンキウンの生気がないよ古稀の日々

鳥取市 福西 茶子
一万歩あるくと夜に足が變る

寝屋川市 富山ルイ子
一人では上手く歩けぬ卒寿すぎ

大阪市 吉積 栄次
ヒョウ柄のシャツを脱ぎ捨て貼る湿布

箕面市 出口セツ子
邪魔せぬよう隅で呼吸をしてる老い

貝塚市 吉道あかね
穏やかな老後はきつと退屈だ

鳥取市 山下 凱柳
誉め言葉老いた夫婦の潤滑油

大洲市 花岡 順子
病院もスーバーもない過疎に住む

八幡市 武田 悦寛
ドッジボールしてた仲間のクラス会

大阪市 東 敏郎
益荒男がもてた昭和に戻りたい

大阪市 岡田 恵子
悲しい日豚まんギョーザ二人前

三田市 堀 正和
お刺身の翌日やはり出る粗煮

岡山県 藤澤 照代
チリ産の鮭が石狩鍋に化け

鳥取市 山野すみれ
保存食チキンラーメン鱈缶

大阪市 高杉 力
箸紙を折りたたんでる長話

西宮市 緒方美津子
常連も顔では飲めぬコーヒースタ

高槻市 片山かずお
親はやきもき子は独身を謳歌中

香芝市 山下じゅん子
街よりも山が大好き膝小僧

熊本市 杉野 羅天
ズボン破れ尻の馬力の嬉しい日

堺市 今井万紗子

ブーチンも終になつたかテロリスト

香芝市 大内 朝子

ピカドンの酷さを思えブーチン氏

宝塚市 岸田 万彩

ブーチンを消せるのならばテロもよし

寝屋川市 平松かすみ

ブーチンに当たるミサイルないものか

富士見市 中島 通則

ブーチンの辞書に絶対無い「平和」

府中市 岸田 武

ブーチンがこけるまで生きねばならぬ

大阪市 大沢のり子

村おこし稲のアートはピカソ風

羽曳野市 黒木ひとみ

秋茄子の色に魅せられ絵筆とる

河内長野市 森田 旅人

今生を愉しみ来世が楽しみ

生駒市 饗庭 風鈴

花を摘みハミングしつつ旅に出る

生駒市 飛永ふりこ

冷蔵庫取り出す物がパツと出ぬ

今治市 永井 松栢

夏バテにはオクラ納豆モロヘイヤ

和歌山市 上田 紀子

大根の白さと遊ぶ手包丁

米子市 竹村紀の治

死んだ振りしているらしい善玉菌

真円に近い丸画く理想主義

東大阪市 青木 隆一

親切は大より小の方が好き

鳥取市 前田 楓花

摩擦熱くすぶりすぎるこの地球

京都市 藤井 文代

頬の寝癖にきょうはマスクがありがたい

大阪市 宇都満知子

運動会だけがだれだか皆マスク

松山市 郷田 みや

マスクして人は中身とよくわかり

川西市 大坪 一徳

お出かけ日マスクの下も薄化粧

津山市 高橋由紀女

マスクした顔も並ぶかモンタージュ

枚方市 藤田 武人

まだマスクはずせぬうちに冬が来る

豊橋市 小松くみ子

オデコ出すだけで三十六度五分

岡山市 丹下 凱夫

獅子舞の太鼓の音で秋がくる

藤井寺市 松井 正義

元氣よくコロナも弾く秋まつり

鳥取市 上山 一平

終息ムード放浪癖が目覚ます

堺市 澤井 敏治

「早々」に代えて「コロナ後飲みましょう」

太陽と乾杯をするハイボール

笠岡市 藤井 智史

おじさんが嬉しそうだね神谷パー

横浜市 加藤 佳子

一日の読点を打つワンカップ

札幌市 三浦 強一

敬老の日肝臓感謝の酒二合

奈良県 長谷川崇明

晩酌二合神のお召しのあるまでは

香南市 桑名 孝雄

秋刀魚買ひ明日に延ばす休肝日

尼崎市 永田 紀恵

居酒屋の提灯誘うよう真っ赤

大田市 小野 雅美

毒舌を吐く喉すぐ大ジョッキ

三田市 北野 哲男

小百合も喜寿私も真似てビール飲む

羽曳野市 宇都宮ちづる

雪見酒赤い顔した蟹が待つ

三田市 尾崎 一子

悪友はたいがい酒を連れてくる

三原市 笹重 耕三

語り合う酒ほど美味いものはない

神戸市 上田 和宏

飲兵衛の言い訳よくも思いつく

神戸市 山口 光久

酔い醒めてここはどこです僕は誰

大阪市 井丸 昌紀

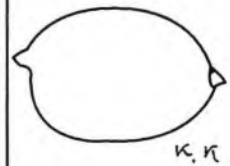
共選欄

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句321名)



「なつてり」 江島谷 勝 弘 選

切ないね母がカルトにこつてりと
丹波篠山市 酒井 健二
プーチンにおらんこつてり叱る人
河内長野市 梶原 弘光
山吹色に五輪こつてり塗り重ね
奈良市 高橋 敬子
こつてりと奈良県警は絞られる
松江市 中筋 弘充
物価高豚バラ主婦の味方です
西宮市 福島 弘子
こてこてのトラファンです七十年
三田市 堀 正和
公文書こつてり黒は喋らない
鳥取市 中村 金祥
年金の些少からこつてり租税
羽曳野市 藤原 大子
復興の苦勞実となる油汗
宮城県 太田 良喜
こつてりと話に蜜を塗る詐欺師
鳥取市 倉益 一瑤
違反者にこつてり注意切符切る
京都府 北野クニオ
胃を宥めたまに焼肉枯れぬよう
河内長野市 穂口 正子
二日目のカレーこつてりして美味い
鳥取市 加藤 茶人
こつてりのソースなにわが闊歩する
河内長野市 村上 直樹
焼肉はハラミとタレと白ご飯
東大阪市 青木ゆきみ

「なつてり」 永 見 心 咲 選

アイラブユーと胃もたれのする手紙
佐賀県 真島久美子
ポマードでやんちゃ固めるリーゼント
広島市 松尾 信彦
公文書こつてり黒は喋らない
鳥取市 中村 金祥
こてこてのトラファンです七十年
三田市 堀 正和
顔認証困らすほどの厚化粧
奈良市 東 定生
むせかえるコロンが横に立つラッッシュ
奈良市 大久保眞澄
答弁へ修正液を重ね塗り
横浜市 菊地 政勝
愛して悪いか古希のペアルック
枚方市 栃尾 奏子
こつてりの愛はボン酢で召し上がれ
横浜市 川島 良子
チーズフォンデュ二人が愛を語るとき
豊屋川市 川本 信子
ファンデーションこつてり塗って悪だくみ
大阪市 岡田 恵子
こてこての大阪弁で口説いたる
宝塚市 岸田 万彩
ヒョウ柄に鉛ちゃん持てば出来上がり
東大阪市 西村 哲夫
隠し事あります化粧しています
大阪市 大沢のり子
こつてりとハンダ付けする二度の縁
堺市 柿花 和夫

朝から串カツ胃腸は元気お陰様	豊中市	きとうこみつ
こつてりの味噌だれ串焼きが美味い	鳥取県	竹信 照彦
回転の寿司でこつてり見栄を張る	箕面市	酒井 紀華
こつてりのゴディバの冬がやってくる	山口市	兼崎 徳子
御節には黒豆こつてり味つける	丹波篠山市	河南すみえ
熱燗が好きだと知ってさば味噌煮	神戸市	富永 恭子
年金日はステーキ食べるおじいちゃん	神戸市	能勢 利子
たこ焼きの見えない程のマヨネーズ	米子市	竹村紀の治
子の帰省こつてり味にシフトする	箕面市	広島 巴子
ラーメンは醤油味よりとん骨だ	藤井寺市	鈴木いさお
油絵の迫力満点太郎の絵	大阪市	岩崎 玲子
ワックスをこつてり永ちゃんの気分	枚方市	藤田 武人
愛も食もこつてりだった寂聴さん	神戸市	敏森 廣光
徹子さんだんだん化粧濃くなって	大阪市	古今堂蕉子
田舎芝居厚化粧も芸のうち	唐津市	坂本 蜂朗
舞子さんこつてり化粧でみちがえる	大阪市	田中 廣子
染みひとつ塗ればぬるほど浮いてくる	松山市	柳田かおる
こつてり塗ったようだなシミが消えている	高槻市	片山かずお
厚塗りのファンデーションの満足感	黒石市	石澤はる子
厚塗りの自分の顔にギョツとする	河内長野市	大島ともこ
スーパへ行くのにちよつと塗りすぎ	大阪市	川端 一步
化粧こつてりしても若さに勝てません	桜井市	安土 理恵

こつてりと盛った美談を聞かされる	鳥取市	前田 楓花
同窓会極彩色のマダム達	神戸市	村松 久江
こつてりと絞られたのに嬉しそう	尼崎市	山本 百合
三人の息子育てた中華鍋	橿原市	居谷真理子
クレヨンの白こつてり塗つてうす笑う	松山市	大内せつ子
胃もたれがしますあなたのお説教	和歌山市	まつもとこ
こつてりと大阪しつとりと京都	松山市	柳田かおる
カツ丼の後はいつもの胃腸薬	大阪市	宇都満知子
こつてりが過ぎてふられたアマリリス	松江市	藤井 寿代
心配をしたとこつてり子が叱る	箕面市	出口セツ子
こつてりが染み込んでいる裏長屋	尼崎市	藤井 宏造
こつてりと話に蜜を塗る詐欺師	鳥取市	倉益 一瑤
こつてりのラーメン百まで食うつもり	丹波篠山市	酒井 健二
ワイルドな無精ひげだね魅力的	生駒市	饗庭 風鈴
たこ焼きの見えない程のマヨネーズ	米子市	竹村紀の治
こつてりの愛でどん底抜け出せる	生駒市	飛永ふりこ
こつてりと塗つて新地へご出勤	藤井寺市	鈴木いさお
盛りに盛りマドンナ似てるパンダの目	神戸市	横田 次郎
悲しい顔こつてり塗って隠しとく	長岡京市	山田 葉子
美辞麗句こつてり盛って披露宴	鳥取県	門村 幸子
こつてりの批評に期待込めている	神戸市	富永 恭子
徹子さんだんだん化粧濃くなって	大阪市	古今堂蕉子

ついでこつてりと叱つたらバワハラに	神戸市	斎藤	隆浩
先生はなかなか良しと言わへんで	三田市	上田	ひとみ
美辞麗句こつてり盛って披露宴	鳥取県	門村	幸子
こつてりの余談にやきもきの司会	高槻市	初代	正彦
換気扇汚れこつてり拭く難儀	奈良市	宇賀	史郎
朝市に飛び交うこての詛り	三原市	鴨田	昭紀
馬油塗る踵の余り顔に塗る	宮崎市	押川	胡坐
こつてりとデコで飾って来るメール	三田市	村田	博
CMに眉にこつてりツバつける	寝屋川市	伊達	郁夫
こつてりじゃないと冬眠できぬ熊	男鹿市	伊藤のおよし	
こつてりと絞った部下がいま上司	豊中市	水野	黒兎
ヒョウ柄に鉛ちゃん持てば出来上がり	東大阪市	西村	哲夫
口答えすれば百倍返す妻	宝塚市	岸田	万彩
こつてりといやみを言つてすつとした	大阪市	中村	峰子
負けたあと残るヤル気もしほられる	岐阜県	喜多村	正義
アイラブユーと胃もたれのする手紙	佐賀県	真島	久美子
脂身が大好き箸が止まらない	尼崎市	清水	久美子
病院食こつてり味の夢を見る	橋本市	石田	隆彦
夕陽背にまだしほられていた部活	奈良市	米田	恭昌
整髪に昔ポマード今ムース	三田市	多田	雅尚
ポマードで港のヨココ誘つてた	鳥取県	斉尾	くにこ
要するにと五回叱られ逆ギレる	堺市	内藤	憲彦

佐渡情話こつてりと聞く囲炉裏端	伊丹市	延寿庵	野鶴
こつてりの肉もいけます元氣です	神戸市	米田	利恵子
お願いが無駄と知つてもまだ粘る	藤井寺市	太田	扶美代
一駅でこつてりと塗り別人に	大阪市	井丸	昌紀
「地味かしら」こつてりメイクよく言うわ	和歌山市	定松	宏枝
こつてりのびん付け土俵から匂う	鳥取市	岸本	宏章
胃をなだめ中華料理のフルコース	豊中市	水野	黒兎
こつてりが好きでまだまだ譲れない	土佐清水市	辻内	次根
おばさんと呼んでこつてり絞られる	交野市	山野	双葉
こつてりと塗ったビエロの目が哀し	京都市	清水	英旺
見て食べて盛り沢山のバスツアー	河内長野市	藤塚	克三
こつてりの自慢が溜る衣裳部屋	高砂市	松尾	柳右子
馬油塗る踵の余り顔に塗る	宮崎市	押川	胡坐
こつてりと愛が詰まっている手紙	弘前市	福士	慕情
濃いキヤラに距離感保ち勝ちにゆく	米子市	中原	章子
こつてりと辛子が利いた頑固爺	鳥取市	谷口	回春子
アーケードくどい造花が媚を売る	岡山県	藤澤	照代
こつてりもいいがうなぎは白焼きで	熊本市	杉野	羅天
こつてりと我が田に水を選挙カー	唐津市	仁部	四郎
飼主も九官鳥も国訛り	池田市	太田	省三
こつてりを敬遠したら歳が出る	奈良県	谷川	憲
濃厚な味へ決別告げる歳	富山市	伴	よしお

高齡もこつてり飯で飛びはねる

可児市 板山まみ子

カツ井の後はいつもの胃腸薬

大坂市 宇都満知子

バター塗りジャムとアンコも塗りウフフ

トーストへバターこつてり揉める朝

飢餓知らぬ子がこつてりと塗るバター

カルビ堪能明日の肌はつやつやさ

こつてりは卒業茶漬けにたどりつく

こつてりの愛はボン酢で召し上がれ

むせ返るコロンが横に立つラツシユ

説教にレモンをかけていいですか

こつてりが染み込んでる裏長屋

こつてりの味に同居は諦める

こつてりと薬を盛って明日を待つ

三人の息子育てた中華鍋

心配をしたとこつてり子が叱る

本物もニセモノもない秋刀魚焼く

顔認証困らすほどの厚化粧

秀 句

一皿にフライとんかつハンバーグ

淋しさの分だけ濃くなる化粧

こつてりは苦手料理も男性も

加西市 山端なつみ
大坂市 平井美智子
貝塚市 吉道あかね

こつてりを期待して買う週刊誌
夕陽背にまだしぼられていた部活
禪寺で過ごした濃厚な襖
ひと言がこつてり纏いつく失語
ジェラシーが女の爪を紅くさせ
飢餓知らぬ子がこつてりと塗るバター
塗って塗ってまだ塗り足りぬゴッホの絵
こつてりの化粧は避けて歩きます
百歳がこれからですと粉を振る
こつてりと絞られまして起訴猶予
説教にレモンをかけていいですか
トランプがまだまだ懲りず吠えている
哀しみをひた隠すこつてりの化粧
こつてりの愛胡蝶蘭枯らす
取り敢えずコクだわねえと言うておく
子の帰省こつてり味にシフトする
こつてりの皮肉また言う寂しがり
こつてりと奈良県警は絞られる

寝屋川市 廣田 和織
奈良市 米田 恭昌
東大坂市 佐々木満作
三原市 笹重 耕三
寝屋川市 長尾 千賀
越谷市 久保田千代
松山市 栗田 忠士
松江市 相見 柳歩
神戸市 山崎 武彦
南あわじ市 萩原 狸月
大坂市 高杉 力
弘前市 高瀬 霜石
羽曳野市 徳山みつこ
大坂市 田中ゆみ子
岡山市 丹下 凱夫
箕面市 広島 巴子
大坂市 小野 雅美
松江市 中筋 弘充

秀 句

ポマードで港のヨーコ誘ってた

濃く生きて心残りはありません

ポケットに酸っぱいこつてりが溜まる

鳥取県 斉尾くに子
和歌山市 柏原 夕胡
松江市 石橋 芳山

「危ない」

(投句 223名)

堀 正和 選



ママチャリが子供三人乗せ走る
 初めてのお使いそつとあとつける
 天麩羅の鍋かけたまま長電話
 減量に芋栗柿の誘い水
 ポストからつぎつぎハチが出てきます
 絶壁のザイル友情信じてる
 危いが高所の仕事金になる
 何かある妻がにやりと笑ったぞ
 飲み放題年考えて飲まない
 さつきから俺は素面と言いだした
 現金の置き場所ここでもいいのかな
 通帳と判子束ねて持ち歩く
 この頭痛危険信号かも知れぬ
 エコー検査はたと止まった何かある
 呼ぶ人があればと医者がそつと言う
 白杖と付かず離れず半歩前
 プラットホームスマホ見ながら歩くなよ
 「落石注意」行っていいのかわいのか
 がらくたが積上げてある非常口
 黄信号アクセルふかし走り抜け

豊中市	きとうこみつ
弘前市	稲見 則彦
唐津市	山口 高明
神戸市	富永 恭子
米子市	池田 美穂
奈良県	渡辺 富子
大阪市	奥村 五月
神戸市	山崎 武彦
高槻市	松岡 篤
三田市	上田ひとみ
米子市	成田 雨奇
富田林市	中村 恵
西予市	黒田 茂代
堺市	今井万紗子
貝塚市	石田ひろ子
河内長野市	梶原 弘光
香芝市	大内 朝子
川西市	大坪 一徳
宝塚市	岸田 万彩
和歌山市	柏原 夕胡

スマホ見て信号見ないドライバー
 魔のカーブ今日も花束濡れている
 アクセルとブレーキを踏み間違える
 またハツともう潮時と返納す
 免許返納自転車に乗るおじいさん
 したたかに北のミサイル進化する
 ロシアと北危険極まる核ボタン
 九条がないと危ない国になる
 危ない人のとなりでいつも眠ってる
 少子化が国を窮地に追い詰める
 後世へふくらむニッポンの債務
 シグナルは真つ赤温暖化の地球

佳 句

日本は中立国になりましょう
 世界からレッドカードをブーチンへ
 円安で外資に土地をまた買われ
 ウィンカー右と左を間違える
 「あぶない」を連発しつつ孫の守
 人
 危ないな園にはママが送ります
 地
 吊り橋の真ん中へんに今日もいる
 天
 Jアラート鳴つても逃げるところが無い
 軸

貝塚市	吉道あかね
弘前市	福士 慕情
西宮市	高橋千賀子
神戸市	近藤 勝正
奈良市	大久保真澄
三田市	稲角 優子
東大阪市	佐々木満作
大阪市	平賀 国和
大阪市	高杉 力
橋本市	石田 隆彦
三原市	笹重 耕三
犬山市	金子美千代
大阪市	江島谷勝弘
三田市	北野 哲男
豊中市	水野 黒兎
奈良市	加藤江里子
寝屋川市	長尾 千賀
和歌山市	上田 紀子
弘前市	高瀬 霜石
明石市	梶谷 和郎

「きつちり」

(投句 222名)

中 村 恵 選



速達できつちり守る締切日
 きつちりと結ぶ夫婦の赤い糸
 煩惱をきつちり整理するへんろ
 すっぴんになるときつちり出る齢
 あら早いきつちり老いに捕まった
 脱ぎ捨てた孫の衣服を畳む祖母
 きつちりと書いた買った買物メモ忘れ
 一円で一円切手買いました
 最後まできつちり録った詐欺電話
 海の幸贈れば届く山の幸
 隙見せぬ君をどうして口説こうか
 別れたら届くデートの請求書
 二文字抹消 恋の証拠は残さない
 きつちりと打って未練を断つ句点
 筋書きのとおりきつちり幕下りる
 きつちりと椅子拭いて去る定年日
 きつちりが過ぎた上司の胃潰瘍
 定年まで確と無遅刻無欠勤
 就業時間ですお先に失礼
 定時運行世界に誇るJR

津山市 高橋由紀女
 鳥取市 山下 凱柳
 八幡市 武田 悦寛
 堺市 澤井 敏治
 河内長野市 穂口 正子
 神戸市 みぎわはな
 大阪市 高杉 力
 橿原市 居谷真理子
 鳥取市 福西 茶子
 横浜市 菊地 政勝
 大阪市 近藤 風羅
 大阪市 小野 雅美
 大阪市 平井美智子
 岐阜市 喜多村正儀
 西予市 黒田 茂代
 福井市 伊藤 良一
 豊中市 水野 黒兎
 寝屋川市 川本 信子
 奈良市 大久保真澄
 堺市 坂上 淳司

きつちりにバスが来たから乗り遅れ
 20分かけて毎晩歯を磨く
 ええ味やきつちり出しをとってはる
 胴元が儲かることになつてはる
 きつちりと眉描きあげて勝負服
 抗えば妻はきつちり意趣返し
 真面目過ぎ煙たがられる損な質
 きつちりと片付けられて無い居場所
 融通がきかぬ可愛げない女
 生真面目な父の日記に休みなし
 きつちりと片付くおもしろない喧嘩
 マニュアルを一步も出ない石頭

佳 句

台風は律儀必ず置土産
 イエスノーきつちり言えば角が立つ
 きつちりと目を見て話したいあなた
 きつちりと畳んだ膝にある覚悟
 きつちりと決めて次へと歩を進め

人

先輩の一言パズルできあがる

地

ここまでが私でここからがワタシ

天

きつちりと人生歩んできた顔だ

軸

今日の目を閉じるきつちりドア閉めて

鳥取市 岸本 宏章
 豊中市 きとうこみつ
 大阪市 古今堂蕉子
 弘前市 高瀬 霜石
 大阪市 岡田 恵子
 神戸市 松倉 正美
 犬山市 金子美千代
 神戸市 奥澤洋次郎
 大阪府 米澤 俣子
 奈良県 室田 行久
 三原市 鴨田 昭紀
 三田市 村田 博
 鳥取市 岸本 孝子
 奈良県 渡辺 富子
 尼崎市 近兼 敦子
 豊中市 松尾美智代
 大阪市 坂 裕之
 羽曳野市 徳山みつこ
 笠岡市 藤井 智史
 越谷市 久保田千代

初しぎ教室

題一鍋

平井 美智子

随分昔のことですが、師が亡くなるまで私も沢山の添削を受けてきました。中には「何度考えても、自身の原句のほうが好き」という句が何句かあります。はてさて・・。

原（原句）参（参考句）

次の2句ですが助詞を省いて上5音に収める方法と、上句が6音になっても助詞を足して解りやすくする方法があります。

正解はありません。

原 調理台奥で寝ている重い鍋 照 枝

参 調理台の奥で寝ている重い鍋

原 防災日米は土鍋で炊いてみる 弥 生

参 防災日の米は土鍋で炊いてみる

原 鍋二つ共に乗り越えルビー婚 誓 子

参 夫婦なら鍋二つでなく鍋と蓋では？

参 鍋と蓋共に乗り越えルビー婚

原 階下よりただよう臭いすきやきだ 龍

臭いの表記は主に嫌なにおいの場合です。

参 階下よりただよう匂いすきやきだ

原 ガキ大将カブト代わりに鉄の鍋のりひろ

懐かしい絵が浮かんできます。このまま

でも良いのですが韻文表記だと

参 ガキ大将カブト代わりの鉄の鍋

原 一人鍋昨日のことも温めて 風 露

時代を反映してか、一人鍋の句が沢山ありました。

参 一人鍋昨日の悔いも温めて

参 一人鍋淋しい夜を温めて

原 白菜と豆腐が入る一人鍋 栄 次

ほんの少し表現を変えることで句の中に

作者を詠み込むことが出来ます。

参 白菜と豆腐で済ます一人鍋

原 行平で絶品の粥炊きあげる 貴美江

美味しそうな匂いまで感じる佳句ですが、

もう一步ドラマを作ってみるのも一興。

参 行平で炊きあげ母によそう粥

原 大鍋の豚汁注ぐポランティア 静 恵

佳句なのですが、この場合は注ぐ（そそ

ぐ）よりも注ぐ（つぐ）の方が良いかも。

参 大鍋の豚汁を注ぐポランティア

原 蒸しあげて厨に香るははの味 閑

味が香るといふのは少し無理があるの

では？ 蒸しあげた物の具象があると

（例・栗ご飯）イメージが湧きやすいです。

参 蒸しあげて厨に香る栗ご飯

参 栗ご飯蒸せばあの日の母の味

原 コロナ禍の笑顔がもどる鍋料理 一 平

状況がわかりにくいので

参 コロナ禍のほっと一息鍋料理

原 気配なく鍋底景気長い夜 幸 子

気配なくなどの余分な言葉は省いて鍋底

を這う形で長期化する景気だけを詠みま

しょう。

参 鍋底の景気が染みる秋の夜

原 鍋囲み友と語りし愚痴も煮る 良 子

（語る）と（煮る）動詞が二つだと落ち

着きません。

参 ワイワイと愚痴も煮こんで囲む鍋

原 愚痴不満鍋を囲んで慰労会 行 久

鍋料理と愚痴は相性が良いようです（笑）

参 愚痴不満鍋に煮込んで慰労会

原 手料理の未熟さ鍋でカバーする 博 之

参 手料理の未熟さ隠す鍋料理

参 こだわりの味が無いので鍋にする

原 キッチンに苦楽を語る鍋一つ 玲奈
玲奈さんの思いがきちんと詠めています
がキッチンはいわなくてもわかります。

参 苦も楽も共にしてきた鍋ひとつ

原 ばれてないへそくりそつと鍋の中 五 六
(ばれてない)(そつと)は余分な気がし
ます。それよりも、普段使わない鍋とい
うことや金額でリアルさを出す方法も。

参 大鍋の中にへそくり五千円

原 ビカビカに磨きあげたい鍋やかん ひとみ
ひとみさんの句意と違ってますが、句
の中に作者の存在を意識してみました。

参 かたくなに磨き続ける鍋やかん

原 破れ鍋に綴蓋捜せばあるものだ 和 夫
破れ鍋に綴蓋という諺をそのまま使う
よりも少し変えてみました。送り仮名
にも注意しましょう。

参 破れ鍋に合う蓋だつてきつとある

原 錆掛屋で寡黙な父はフリーター さくら
寡黙で実直なお父さんの姿が浮かんでき
ます。おもしろい見つけですが、フリー
ターという言葉で題の鍋から少し外れて
しまった感も否めません。

参 鍋の向こうに錆掛屋だった父が立つ

原 蟹牡丹カキもつキムチきりたんぼ のぞみ
面白い表現ですがテクニクとしては、
全部に鍋物を並べるのでなく下五を跳ね
てみましょう。

参 蟹牡丹カキもつキムチ君が好き

添削不要の佳句

(○は佳句、◎は優秀句)

○鍋底を磨く背中が怒ってる 百合
腹が立っている分、鍋はビカビカ。怒っ
ていると下6音にするか、怒っているとい
抜きで五音にするか考えどころですね。

○妻の留守自立の一步一人鍋 次郎

○自立の一步が健気で微笑ましいです。
○娘が嫁ぎ鍋の重さが身に沁みる 開子
大鍋のおでんを食卓へ運んでくれるのは
娘の役目だったのに。鍋の重さという
表現に淋しさと心もとなさが伺えます。

○若嫁は圧力鍋を自慢する えい子

肉じゃがも黒豆も短時間でほっこり。ち
よつと悔しくちよつと誇らしい若嫁。
(新しい鍋の話を書いてやる)なんて表

原も面白いかもしれません。

○鍋釜も供出させて負け戦 通則

過去の事にしてはいけない社会吟です。

○万葉に思いを馳せて飛鳥鍋 双葉

○今年こそ家族そろって長寿鍋 風鈴

○紅白を見て今年をつつき合う 尚

鍋料理三句。奈良地方の郷土料理の飛鳥
鍋、具沢山の長寿鍋。今年をつつき合う
という表現が佳。身体も心もポカポカ。

○鍋奉行だったよなあと通夜の席 不二夫
仲間たちと友を偲ぶ温かさを感じます。

○故郷が明かされてゆくおでん鍋 えみこ
おでんは地域色が豊か。おでんをつつき
ながら、お互いのふるさと自慢、味自慢。

今回の題(鍋)は名詞ですのでイメー
ジが広がらず苦勞されたと思います。

皆さんの苦勞の跡を味合わせていただき
ましたが、題が名詞の場合、一人鍋・鍋
奉行・破れ鍋に綴蓋などの同想句から
一步抜け出すには少しだけ表現の工夫が
必要になるのかもしれない。
次回のご投句を楽しみにしています。

『麻生路郎読本』余滴 (73)

「雪」 ②

乘原道夫

「雪」2号は大正4年9月1日発行。通しの頁で、9〜20頁。次は表紙(9頁)の日車の巻頭言。

□青明の死

時計でさへ止る前には、二三點の變調を來すものである。嘘の詩をつくり、嘘の思想に満足してゐた青明は、ほんどのものを纏むだ一幕をも残さず、前夜遇つたを名残にしゆつと此世から消えて終つた。が眞實を纏む必要を認めなかつた青明は、ほんとに死んだのである。自分は悲しいとも、哀れとも思へない、たゞ人生の皮肉が稻妻のやうに、自分の心を掠めて行つた。(日車)

藤村青明は、明治22年2月25日生まれ。大正4年8月2日、須磨で海水浴中、心臟

麻痺で水死した。日車と路郎の弔吟を挙げておく。

青明の事ども 日車

野心

時代より先だつ煩みさすらひ子

東上を送る

疾く起きて汁一椀の別れなり

死の前夜

天才か攫徒か瞳の落ちつかず

死ぬのなら

思ふさま髪を握つて別れたし

訃音

一杯の冷水捧ぐものもなし

悼青明 麻生路郎

浴衣掛け一寸いで、くる旅なりし

絶息ときに落日は瞬けり

タンクステンの破裂か青明の死か

10、11頁に日車の作品が掲載されているが、「青明のことども」のみ挙げた。12、13頁の川上日車の「權威の窮屈」は、前回に紹介済み。14、15頁に、「このごろ」と題する日記が掲載されている。何箇所か挙げておく。

このごろ かたばみ生

□七月二十四日

暑い〜最中に「雪」が出来る事になった。今日初號の校正を終つたとは川上からの通知で判る、自分で思ひ立つて自分で川上を動かして出さした雑誌に何も書かぬなどは俺れにも心苦しい、然し拙い文章を併べるのは猶更心苦しい、次第だ。俺れは何度も川上に約束して置きながら何度も逃げた、卑怯な男である。

□七月二十八日

川上東京、午後七條大宮の方へたづねる。二階の廣い座敷へ通されたのだが依然として暑い、(以下略)

ここまで読むと、「かたばみ生」とは誰のことか分かる。京都在住で、川上日車に雑誌を出せと言える人物は、斎藤松窓しかない。松窓は、明治18年3月24日生まれ。六厘坊の「葉柳」に参加。「雪」の後、路郎が出した「土團子」にも協力した。昭和5年「川柳街」主幹。京都川柳界の大御所として、昭和20年11月2日死去。

□八月一日

「雪」の一號が出た、そして小島の書いた金剛山行き通牒をこの號に出した事を悔いた、俺は小島があんな事を書いて居ながら*1山登りをした翌日に發病したといふ事に忘れる事の出来ぬ興味を持つて出そうと言つたのだが、只アレだけを讀む人には却て六厘坊といふ男は思つた程の人物ではないと思ふて呉れるらしい。それが俺

には悔しい、死んだ友達が可愛そうぢや。その外に「雪」を見て思つた事はない、俺れが一寸も原稿を書かなかつた事なんかもう忘れてゐた、そして*2路郎君が俺れの代りをして呉れた事を感謝して居る。

*1「番傘」(昭和30年10月)の川上日車「大阪川柳小史(3)」に、(登山をした夜中に咯血をした)とある。

*2 日車に雑誌を出せと勧めた自分が「雪」發行人となるべきところを、路郎が發行人になつてくれたこと。

二日、三日の日記は省略。

□八月四日

青明君が二日の五時半に死んだ事を川上から知らせて来た、五時半と言へば川上と二人で堺筋の並木をくゞつて高麗橋邊を歩いて居た時だ。そして一日の句會に來て議論

も吐いて居た事を話しながら歩いて居た時だ。俺は青明君とは四年前も逢はぬから近頃の事は知らぬが、四年前の事は知つて居る、そして昔とよ子といふ女が詩を作つて居た事をも知つて居る。それが俄かに亡くなつたので不思議に思はれるが、死んだのは死んだに違ひあるまい。

昔とよ子は、青明が一時期生活を共にしていた女性。青明の「わだち」や東京の森井荷十の「矢車」に川柳を發表した。「一日の句會」については、次回の「余滴」で取り上げる。

16、17頁に、「華氏九十五度」と題して、日車が俳誌「層雲」「海紅」「土」について書いてゐる。「土」の一部を抜粋する。

〈董哉氏はタゴールに妥協を認めると言つた、この見識には敬服する。しかし東洋と西洋は其習慣性に於て全然一致出来ない分子が含まれて居る。印度に育つたタゴールに、西洋の哲人のやうな徹底を求めるのは少し無理かも知れない。「土」が妥協を受附けまいと言つたのは、期せずして董哉氏の漏らしたタゴール論で認められた。

「土」はさうあるべき苦ものである。

「土」に出てゐる句は悉く眞實から生れたものである事を疑はない。そこに尊い光を認める。鶴平氏の人格の閃が窺はれる。「土」の句に恰度水の流る、如く、奇もなければ變もなからう。しかし水の流る、は事實である、それに瀬を作つて湍を拵へぬ處に「土」の權威が出て居る。〉

董哉は、宮林董哉。鶴平は、塩谷鶴平。「雪」に4号から同人として参加した。

18、20頁にかけて、オスカー・ワイルドの短編「一夜」を路郎が翻訳している。最後に、ワイルドの次の警句を挙げてゐる。

〈自然であらうと思へば明白でなければならぬ。明白であらうと思へば技巧を捨てなくてはならぬ。ワイルド〉

20頁に、路郎は前掲の「悼青明」以外に、「祈禱」4句を發表している。

祈禱

感謝しつつ妻が洗濯を見てゐたり

打水に浴衣の白さほほえまる

祈禱すんで大きな月を吸ふて立ち

横臥になれば涙湧くなり風に搖るる蚊帳

(次回に続く)



(投句 189名)

有名なお祭りから地元の小さなお祭りまで、三年振りに行われたそれをテレビのニュースなんかで見ていると、神事というのを別にしても、やはりコミュニティとして大切なんだとよく分かりました。



過疎の村でもお祭りの時だけは、元住民だとか親類などが集まって来て、儀式が若者たちに受け継がれるのを見ると、関係ないはずなのに、私の中の何かが動くのを感じた次第です。
では、ナビを。

堺市 澤井 敏治
さあ逃げよ戦争なんて真つ平よ

(評) 本当に真つ平ですけど、もし戦争になれば権力は決して民を逃してくれません。そんな世になりませんように。

河内長野市 森田 旅人
縄電車そのやわらかい腕の中

(評) 縄電車を(やわらかい腕の中)と

詠まれたことに感服致しました。何だかオトナの童話のようです。

鳥取市 山下 凱柳
艱難辛苦履物だけが知っている

(評) 艱難辛苦というコトバ、久しぶりに見ました。今時こんな苦労を受け入れる人があれば、いえ、あるかも。

尼崎市 藤田 雪菜
早足で近づいてくる誕生日

(評) 子供の頃は待ち遠しかったはずの誕生日なのに、今では出来る事ならあっちへ行行ってちょうだい、の心境。

和歌山市 柏原 夕胡
どの靴を履いてもボクは歩きます

(評) 自分が前を向いて歩くためなら、靴の選り好みなんてしませんが、そんな確固たる意思表示が見事です。

尾道市 小川 道子
気付いたら味方が敵の席に座す

(評) あの人味方だったはず、なんて思っていたらホントは始めから敵だった。これもよくある話、油断なりません。

香芝市 大内 朝子
この時節はだしのげんをふとと思う

(評) 八月は鎮魂の月、戦争、とりわけ広島と長崎の原爆で亡くなられた人々を思い、忘れてはなりません。

河内長野市 梶原 弘光
吊り橋を揺すつちやいかんその親

(評) 参観日でも最近はお親の方がじつと

していられないらしいです。子供を教育する前にまず親から、とは寂しい限り。

東京都 川本真理子
右派左派に分かれて遊ぶ縄電車

(評) 縄電車にまでイデオロギーが入ってくるとは。そう言えば左派の句にも(右派と左派)がありましたね。

鳥取県 門村 幸子
一日の計に足裏マツサージ

(評) このお方、すごく健康的な生活をなさっているようです。足裏には様々なツボがあるから元氣間違いなし。

和歌山市 上田 紀子
昭和にはもう戻れない笛太鼓

酒癖の悪いお方を連行中
松江市 石橋 芳山
仲間内にされて不満と安心と
札幌市 三浦 強一

佐賀県 真島久美子
リサイクルシヨップに過去形が並ぶ
三田市 村田 博

神戸からやって来ました履き倒れ
米子市 八木 千代

旅立ちの靴を今から履きながら
西宮市 緒方美津子

捨てないで捨てたら海が汚れます
可見市 板山まみ子

帳尻が合えば人生悪くない
神戸市 みぎわはな

お安くしときます不揃いの一把

弘前市 高瀬 霜石

ひと嫌い同士肩組む縄のれん

藤井寺市 鴨谷瑠美子

寄り添えばこんな楽しい核家族

松山市 郷田 みや

三年振りやっぱいいいな御興かく

大坂市 岡田 恵子

よそ行きの声で繕う寂しい日

尼崎市 近兼 敦子

Z世代育てた母はバブル期で

朝霞市 前田 洋子

有事にはご近所さんとえつさつさ

池田市 太田 省三

鉄筋の城と知りつつ太閤はん

大坂市 田中ゆみ子

どこまでも女ルージユにハイヒール

弘前市 福士 慕情

履物を選んで黄泉の旅支度

松山市 柳田かおる

みんな違ってみんな仲間でさびしがり

大坂市 平井美智子

しょうもない男に惚れたことがある

笑面市 出口セツ子

役立たぬ議員束にし叩き売り

防府市 坂本 加代

不揃いの意見まとめて歩き出す

奈良市 山本 昌代

走り来て優しく包む介護の手

唐津市 仁部 四郎

定員だ俺が乗ったら満員だ

檜原市 居谷真理子

この靴が外反母趾に選ばれる

大坂市 田原 康雄

秋の風首相の耳はアリの耳

寝屋川市 平松かすみ

地球から落ちないように摺り足で

三原市 笹重 耕三

貧乏人はみんなひと括りにされる

松山市 大内せつ子

時代錯誤 いいかげんになさいます

高槻市 初代 正彦

テレワーク過疎の地方を見直そう

羽曳野市 黒木ひとみ

気温より果物で知る旨い秋

河内長野市 木見谷孝代

闇鍋で得体の知れぬモノつかむ

米子市 伊塚美枝子

ミサイルを打ち上げるのも民の税

大坂市 東 敏郎

ゴム長は殿の供して今日も留守

藤井寺市 太田扶美代

ムカデ競争じいちゃんやる気みたいやで

大坂市 今村 和男

どの靴も足に合わないシンデレラ

東大坂市 佐々木満作

飼い犬が集めた片方のぞうり

神戸市 富永 恭子

目的は一つ個性を認め合う

三田市 堀 正和

足元を固めておこう勝負の日

奈良県 長谷川崇明

履いていけ地獄の道は針の山

豊中市 水野 黒鬼

湯を巡りチグハグの下駄カタコトと

鳥取市 福西 茶子

爺さんに後妻候補が三人も

三田市 多田 雅尚

ロシア軍不満の兵士寄せ集め

貝塚市 石田ひろ子

いじめにもルールがあった昭和の子

弘前市 稲見 則彦

宇宙船乗組員の輪はひとつ

鳥取市 谷口回春子

準備完了後はお客が来るだけだ

松山市 宮尾みのり

しがらみを抜けると広い広い視野

大坂市 滝井えみこ

コオロギの読経に眠る父の墓

南あわじ市 萩原 狸月

拒否権が無駄な時間にした会議

大坂府 大浦 福子

自惚れと気付いて帰る重い靴

2月号発表 (12月15日締切)



(平本 霧石人 画) 柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 石橋芳山

—11月号から

現実を忘れて浮いてくる腫

小野雅美

よほど嬉しいこと、そして驚きがあったのだろう。はっと現実に戻れば腫が浮いていた。観察眼の鋭い人のようだ。

趣味のない男にもこだわりはある

谷口義

趣味の有無とこだわりの相関性は良くは分らないが、なんとなく説得力があるのはなぜだろう。男も女もこだわりの強い人は、嫌われやすい気がする。

旅行好き自己責任で行きなさい

山本加お里

はい、そう思います。初めての場所なら当然、観光地、交通機関など調べて行くのも楽しみの一つ。特に自然相手に遊ぶ場合は、自己責任は当たり前。天候、自分の体力、目的地の状況。最近、高齢者の山岳事故が多い。何か欠落している気がする。

メール来て手取り早い電話する

宇都宮ちづる

よく分かります、私もそうですから。文字を打ち込むより確かに電話の方が早いです、相手の感情も感じ取れる。

まだ医者は要らぬおしまいまで拒絶

黒田茂代

意気込みは理解できる。誰しものがそうありたいと思っているのだが、そううまくいかないのも現実ではないか。定期健診ぐらいはした方がいいですよ。問題がなければそれでいい。

告げ口の好きな金魚が浮きあがる

小畑定弘

我が家では、メダカを飼っている。餌をやりに水槽を覗けば、メダカは水槽内を泳ぎまわって掲句のように、元氣よく浮き上がってくる。話がしたくて水面に顔をだしに来るのですか。そうですか。

欠点を丸ごと晒してから無敵

石澤はる子

欠点を晒す勇気が私にはない。私が欠点が多くて、うすっぱらな人間だと思っているからかも知れない。勇気ある行動ができるのが羨ましいです。

免許返納行けなくなった店 銀行

中村伸子

そこなのですよ、田舎だとマイカーがないと生活が出来なくなり、死活問題です。メディアは、都会の交通手段を視野に、一般論を論ずるから腹が立つ。

好奇心チヨツピリならば持っている

米澤俣子

好奇心を持ち続けないと、生きていく活力がなくなる。好奇心を追いかけながら傷つきながら、毎日を楽しんでくたさい。歳を重ねると好奇心が無くなってくるのが怖いです。

今日もうたた寝ふた駅も引き返す

大沢のり子

たまに都会にでると、電車で寝ている人を良く見る、疲れての事だと思ひ「お疲れさん」と呟いてやる。やはり乗り過ごす人もいるのか、それでもふた駅ならまだ安心できる。

コンニャクを食べて議論に参加する

藤田武人

思わず笑ってしまった。どうやら参加する議論は、コンニャクのような歯ごたえのない議論が続いて、結論が出ないで終わってしまうようなものらしい。先にコンニャクを食べて、結論の出ない議論の忍耐でもしようとの決意か。

お供えは自分の好きな物ばかり

足立つな子

そうそう我が家でもそうです。お供えの賞味期限が来たら私がいただく。その時のために、好物のお供えです。ゴミとして廃棄するのには違和感がある。

どうするの麻酔が怖い目の手術

大西重男

目の手術の麻酔で、まさか目に注射ってことはないでしょう。想像しただけでも拷問のような怖さを連想しました。手術頑張ってください。

スイッチはオンより忘れやすいオフ

緒方美津子

掲句はごもつともな指摘です。当たり前のことなのだが、気が付かないものです。これが川柳眼なのでしょう。

もつと怒ってもいいのに日本人

大久保眞澄

思っていることを、正直に顔に出さないで、その場を丸く収める。それが日本人で美德とされている感がある。外交面でもそれを感じてイライラする。ハッキリ言うべきではないのか。

ずるいこと考えている筆の先

小谷小雪

大方の人は自分が気が付かないうちに自分を優位に、利口に、見せようとしている筈で、それを腹の中に隠している。それを書き留めることができる人は、正直な人なのだろう。

知恵を出せそう言う奴が何もせず

棚田大

いるいる、こんな口先だけの嫌な奴。もしかりにこんな奴が、上司にいたならば、部下は不幸のどん底。

ノアの方舟にプーチンは乗せない

池田美穂

川柳だなと感じた。私には嫌いな人が数人いるけど、その人たちは私のノアの方舟には乗せない。作者はもつと心の広い器の大きな人だろうけど。

お隣を知らず世界のニュース知る

中原章子

うーん物凄く納得しています。お隣とはここ数年顔を合わしていません。2軒先方に至っては顔も苗字も知らない。ですが国内外のニュースには、敏感に反応している。反省させられた。

草取り二時間点滴一時間

高岡茂子

二時間の草取りで熱中症のために、一時間の点滴を、受けたとのことだと分かる。川柳的に上手いなと感じられる。点滴だけで済んだからよかったけど、これからは注意してください。

政治家の口にリトマス紙が欲しい

岸本清

上手い事言うはと思う。政治家の金への汚さ、国民が嘘と知っていて、とことん隠して平気な答弁を重ねる。掲句のようなりトマス紙が欲しい所だ。

肩書がひとり飲み屋で浮いている

鴨田昭紀

酒飲むと、偉ぶる奴がいる。そんな奴とは飲みたくない、当然ひとり飲みこたになる。嫌われ者なのだ。

水煙抄鑑賞

— 11月号から

富永恭子

世渡りの奥義ソーシャルテイスタンス

八木幸彦

コロナ禍で度々聞いたこの言葉を、人間関係に当てはめた一句、納得でした。自然な距離の取り方ができればと。

持ち札を一枚減らし今日たたむ

坂野澄子

昨年より仕事のスピードが落ちたと感じることはありません。それでも出来た事を良しとして明日へ。ほっとする一句。

賛成の拳手の高さがバラバラで

今村和男

よくある光景を句にされた観察力に拍手。解釈不要の句にニヤリです。

本当にやりたいことは後回し

中村峰子

後回しにする訳はいくつか浮かびました。秋の夜長、時間かけて存分に。

わあかぼちや下げてくる友ありがたい

河南 すみえ

「わあ」に作者の喜びと感謝が込められ、情景が浮かびます。優しい句に、読み手も幸せを頂きました。

恵みの雨昨日の事は忘れよう

狭武紫陽

昨日の忘れたい出来事と、今日の雨が恵みであったと思う事、読み手は想像を膨らめます。雨が一呼吸をくれましたね。

心配は山程あるがよく眠る

若松 由紀子

由紀子さんはきつとよく働く方だと想像しました。疲れる程働いてボタンキュー。眠ってしまえば心配はどこへやら。

コスモスの海に一日の憂さ晴らし

高橋 由紀女

一面のコスモスが風に揺れる様は本当に美しい。憂さを晴らして元気をもらおう。明日もいい日でありますように。

役目終え過去のレットルゴミに出す

武田悦寛

肩書きにふさわしく勤めてこられた作者が、荷を下ろしこれからは本当の姿で生きると詠まれた句と捉えました。

太鼓判押して出した句ままならず

葛城 隆雄

ホント!! 自分の事には冷静になれないようです。天位の心配までした句は大抵入選もませんが懲りず続けています。

菓子目当てまずは仏壇拜む孫

助川 和美

今昔変わらない光景が嬉しいです。自身の幼い日を思い出します。ご先祖様にごほうびのお菓子を戴くのですね。

独り言月に返事を待っている

藤原 みよし

月はみよしさんの笑顔が見たいはず。どこに居てもいつも月は静かに見守り、聞き届けてくれていることでしょう。

思ひ出を美化する老いの独り言

倉橋 悦子

嫌だった仕事も、旅先でもめたことも月日と共に美化され笑い話になっていくんですね。老いる事も悪くないと思う。

ばあちゃん物知りだねと言う五歳

禰 モモト

何を聞いても答えてくれるばあちゃん。不思議な存在。だからもっと聞きたい。見上げる五歳の子の姿が浮かびます。



鍋の季節

晩秋から初冬にかけて、冷たい風が身に沁み、手袋やマフラーを出してくるようになると「鍋」が恋しくなってきました。大勢でワイワイやるもよし、ひとりしみじみつつくのもよし。鍋もまた文化遺産「和食」の冬の定番です。

真冬になる前に土鍋を掃除する

吉川ひとし

献立に迷うと妻は鍋にする

堀 正和

鍋なべなべ呪文で帰る寒い夜

永見 心咲

あれこれと作れないから今日も鍋

中井 アキ

また鍋が言われてもいい冬はナベ

古今堂蕉子

我が家では年中鍋の季節です

梶原 弘光

鍋料理には土鍋がベストですが、オール電化では使えないのが欠点です。しかし、対応できる直火両用の土鍋も売っています。また、カセットコンロを使用する手もあります。

鍋物の長所は、料理が苦手という男性でも多忙な奥様でも簡単に段取りができるということ。その割には豪華な感じがして食べ応えがあり酒の肴にもなるでしょう。

ネットを検索すると、「夏の鍋、人気レシピ」が出てきます。夏野菜をたっぷり摂れて「年中鍋」もナルホドです。

むき出しの個性を鍋にほつり込む

北山まみどり

湯気の立つ鍋からほっこりを掬う

中村 恵

束の間の幸に浸ろう鍋が煮え

吉村久仁雄

早食いと鍋を囲むと忙しい

後藤美恵子

意気地ない男が鍋にこびりつく
鍋の日もやはり無口な老い二人

平井美智子
宇都宮ちづる

誰しも食べているときは幸せなものですが、ほかほかと湯気の立つ鍋に向かっているときは特に「ほっこり」です。また、やたらに鍋に箸を突っ込む「早食い」、そして、背を丸めて皿を抱える男、何を語り合うでもなく黙々と食べている老夫婦等々、鍋に向かうとそれぞれの個性が際立つようです。

古椅子がキイギイと泣くキムチ鍋

上山 一平

聞き役になるも幸せフグの鍋

長谷川崇明

煮崩れもなく横たわる鍋の鍋

菊地 政勝

わが耳朶の薄くて牡蠣鍋旨し旨し

柴原 道夫

ああ今日は楽しかったと鍋のしめ

藤井 智史

おとこの芋が出てくるお雑炊

居谷真理子

疎開地の辛雑炊ほど旨くない

北野 哲男

鍋料理もいろいろ、「キムチ鍋」「フグ鍋」「鯛鍋」「牡蠣鍋」等々、そして、その出汁を活かしたシメの雑炊は格別に美味しく、「ああ食った食った」「満足満足！」となります。

高齢化社会を迎えるにつれて一人暮らしが増えてきましたが、一人でも簡単に楽しめるのが鍋の良い所。あれこれ買わなくても「鍋セット」で「ほっこり」ひとり鍋です。

佛さんに匂い供えてひとり鍋

高杉 千歩

敵は皆死んでしまったひとり鍋

伊藤 聖子

材料はセットで買ってひとり鍋

本田 智彦

アレクサを話し相手のひとり鍋

斉尾くにこ

ひとり鍋ほっこり曇る窓ガラス

楠見 章子

考えていたより妙味ひとり鍋

おかの莖子

『おおきに』

鈴木 いさお 著

江島谷 勝 弘

いさおさんは、現在「川柳藤井寺」の會長プラス「あかつき川柳会」の幹事長も兼ねておられ、かなりの多忙の中でも「川柳塔本社句会」「はびきの市民川柳会」「川柳塔さかい」「川柳塔すみよし」にも毎回出席し、数か所の句会にも投句を欠かさない川柳人です。

『おおきに』には、いさおさんの柳歴20年、人の目に触れたのは3万句。その中から9ヶ月かけて自選した438句と「あとがき」に述べられています。単純に計算すると一年間に1500句も入選していることにびっくりしました。

『おおきに』を一気に読む中で、なるほどすべて秀吟だと納得しました。その内から35句を紹介します。

第一章 おふくろさん

マザコンと言われようとも母が好き
まだ暗いうちに始まる母の朝
隠し味母さんだけのサシスセソ
繰返し息子の齢を訊く卒寿
三丁目の夕陽は母のレクイエム

第二章 妻を娶らば

チヨコレートパフエで口説いた妻である
妻もまた河内の女茶粥炊く
子等の前で面目たててくれた妻
ほっといた妻にこの頃放つとかれ
よく従いてきてくれました五十年

第三章 酒よ

付き合ひの一番長い友は酒
もしも下戸だったら家が二軒建つ
朝はパン昼はうどんで夜は酒
お湯割の濃さにこだわり持っている
句会後は飲もう食べよう歌おうぜ

第四章 笑ってこらえて

天国はええところらしいしらんけど
ひと目でわかるコニシキのシルエツト
空いてますかと隣へマツコテラックス
耳が遠くなりトイレが近くなる
夫不在何の支障もありません

第五章 長崎の鐘

今の時代だから彬を語り継ぐ
ヒロシマの八月に時効などはない
オキナワの痛みは知らぬ星条旗
合法的な暴力だろう多数決
あの日から福島はフクシマになった
人間のエゴがもたらすエルニーニョ
地球儀に飽食の国飢餓の国
ワクチンを待つ恋人を待つように
虐待児子どもは親を選べない

第六章 人生いろいろ

まだ傘寿も少し娑婆で粘ろうか
余生とは例えばおまけ付きグリコ
イントロで「神田川」だとすぐわかる
広辞苑より明鏡が肌に合う
これでよしいつお迎えが来てもよし

句集は、いさおさんを生んでくれた母、50年支えてくれた妻、一番の友は酒、と心憎い配置。時の人・流行り言葉を上手くとらえたユーモア句は抜群です。世の中をしっかりとらえている句にも感心。最終章は、いさおさんが傘寿に到達した気持ち詠って締め括っています。感動を与えてくれた『おおきに』に、ありがとさん。

『残日句録』

水野黒兔 著

中山春代

ほたる川柳同好会会長の水野黒兔さんが、初めての句集「残日句録」を出版されました。好きな句ばかりで、252句全部を紹介したかったのですが……

最初に、持ち味のファンタジーを4句。

ドーナツの穴は天使の食べた跡

大根の白は大地の染め忘れ

五線譜を飛び出し蝶になる音符

魂を込めて粘土が人になる

(魂をの句は令和3年、一路賞を受賞)

ドーナツの穴は天使の食べた跡。黒兔さんの句には不思議な説得力があるんですよ。ユニークな雅号の由来について、著者略歴のなかでふれられておられるので、さわりの部分を紹介します。

「昭和14年、卯年生まれであり、兔の文字を入れた号にしようと思いついたのが白兔です。しかし川柳の盛んな山陰地方には、白兔の号の先輩がおられるであろうと思ひ、白がだめなら黒、そうだ黒兔にしようと思ひ、薫風先生にお伺ひしたところ、まあよからうとのこと言葉をいたただいて、黒兔に決まった次第です。」

私のふる里に縁のある黒兔さんの雅号は、ほたる川柳同好会を見学したその日に覚えました。

句集は、第一章 古希まで、第二章 それから七年、第三章 さらに五年、の年代を追つての三部構成になっていますが、今は句の内容でまとめてみました。

続いてのグループは、長命のご両親と、ご夫婦の日常を詠んだ句です。

苦を楽を煮詰めた顔の父は百寿

大正の母生き生きと鯨尺

毎日が本場所妻の台所

また妻と猫語で話す冬ごもり

ふる里讃歌の句もいっぱいあります。

里を発つ腰につららの太刀帯びて

草笛を吹いてふる里引き寄せる
よもぎ餅ふる里の野が香り立つ
蜂の子のつくだ煮里は美濃の奥
ふる里の山彦ほくの旧い友
低いけど校歌に山は聳え立つ
もちろん、私たちの原点である昭和を詠んだ句も随所にてきます。

膝小僧に昭和が匂う赤チンキ

捨てられぬ昭和の錆びた肥後守

古書店の主人昭和の丸眼鏡

駄菓子屋に昭和を詰めるガラス瓶

ひとかけら昭和が甘い生姜飴

黒兔さんの素顔がのぞく、こんな句もあります。

ります。

暑いねは誘いの呪文ピヤホール

誤つてソースかけたが食べ終える

影法師お前もやはり太り気味

つまずいた段差は内緒一センチ

最後に私の目指す4句を。

梅干をかじると顔も梅になる

すこいなあ誰が名付けたのか蛇口

またビール飲む気になつて風邪治る

扇風機ぐるぐる夏が回りだす

勲章の光景

仁部 四郎

勲章には、いろんな光景がある。

「功八級・陸軍伍長・〇〇〇〇」という墓碑の「功」は、金鷄勲章のことで、手柄をたてた軍人に与えられたもので、年金が付いていた。

金鷄勲章は、現在はないが、年金が付いている勲章はあり、文化勲章がそれである。永井荷風が受けて、大江健三郎は辞退し、そのことが話題になったこともあった。ノーベル賞を文化勲章が追いかけたというふうな話もあった。

「勲章の欲しい七才七十才」は、平成七年に出た『古稀薫風』に入っている。『古稀薫風』には、「勲一等黒き旭日大綬章」も入っているが、この句は、昭和六一年の『愛染』にも入っている。

『古稀薫風』の「勲一等……」の次には、「エリート」の狐が落ちた獄の顔」が出ていて、

二つの句に間柄とでもいうべきものがあるのだろうかとも思う。「大勲位」という渾名らしきものがついた政治家がいたし、兇弾に仆れた元首相にも授与されるらしい。

令和二年十二月の県紙に、高齢者叙勲の記事が出た。住所まで出ている。十一月に米寿になった仁部四郎の名前もある。公立小学校の校長であった人の名もあるが等級が、公立高校校長であった者より低い。理由は訊ねたものだろうか。

同じ等級でも、米寿より若くて、春と秋の叙勲で受けるのはちがうし、死亡叙勲ともちがうが、官報に出るから、その筋の業者から、記念品の型録が数社から送られてきた。

「勲章の欲しい七才七十才」は、私がおもなお、大きな謎をはらんでいると思う句である。

川柳の肝心は、「うがち」だという主旨の話で、薫風先生から聞いたと私は思っているが、まさにこの句がその代表的なものだとずっと考えている。そのことを確かめたいが、薫風の句のなかで、どう

位置づけられるのかが謎である。

平成十三年に、橘高薫風叙勲記念大会が開催され、四百八十一名の参加者があったが私も参加した。その時も、この句を思い出したし、このたびの私の叙勲でも思い浮かべた。

勲章をめぐる光景は、妖しい光を伴っているとは私は思う。非難すべき、否定すべき光景と決め付ける必要はないが、大きな罫をはらんでいるものではあろう。

官尊民卑がそのまま戦後も生きていること、何かと人に格差をつけて、人心を操作せんとするもの、が一方にはあり、一方には名譽として人に認められたい心がある。その交点の相は実に多種多様で妖しい光が発生するのではあるまいか。

志願で海軍に入って特務大尉から少佐になっていた父の勲章の記憶が、妖しい光の光源の一つなのだが、そのことは長くなるし、短歌らしきものができたのでそれを出しておく。

高齢者叙勲の記事にわが名あり
猫まで声が聞こえたような

「川柳塔の人々」より

出で口ぐち雨あめ町まち

町二と杏三

最近私は町二君の句がいつそう好きになつてきた。極めておとなしい表現のやうであつて実は何か大きな強いものを掴んでゐる。彼の句に出てゐる生活そのまゝの心境の前に私は静かに襟を正す。

病人の耳を見てゐてをかしくなれり

元日も鶏は稼いでくれました

あとの句からは路郎先生の「その日ぐらしも軒に雀がこぼる、よ」に似た、さ、やかな生活の歡喜がうかゞはれる。一千万円持つてゐても井上蔵相は決して幸福ではない。大きいものに縋らうとはせないで、小さな生活をそのまゝ、エンジヨイしてゆく所に彼町二君の尊さがある。正しく生きようとすれば、しひたげられる。これは私の体験から得た公理であるが、少くとも資本主義社会に於ては真理だと思ふ。そしてかういふしひたげら

れた境地を最もうまく句の上に活かしてゆく人に杏三君がある。

逆とんぼうつて社長を出迎へる

馬妾月給取と溝鼠

「氣どらない」「自己をあざむかない」実にこれが町二、杏三の句をして二説三説させるのではなからうか。

乱耽と愚陀

伝統川柳の技巧が一つのマンネリズムに墮してゐるのに反して、乱耽君は逐一新しい技巧を創造してゆく。彼がかつての論文中に述べてゐる如く「恋愛ビジネス、アルコール、電流の交錯等々……」の中に、スピーディそのもの、如き近代都市の中に、彼の炯眼は恒に光る。

ネビーカツトの鐘に潜んでゐた彼女

ガソリンの業火に街のあをざめて

煙突の下に眼ばかりうごめくよ

又一方我々若人を魅了せずにはをかね感覚の手法は実に愚陀君独特の舞台である。

別れともない袂の赤さよ

脚のまじゆつに酔ひ痴れて出る

こうして乱耽、愚陀両君に共通してゐるものは「若さ」であり「モダンズム」である。而してや、前者はリアリストとして、後

者はロマンティストとして、より多くの傾向を示してゐると私は思ふ。

鮎美と石竹

こゝに都会の雑音やイズムの洪水をよそに静かに自己を内省してゆく作家として鮎美君を挙げることが出来る。

落椿からだもろくになりたれば

さまぐの姿の中につむけり

片恋が知らんと空を眺めぬる

これらの句は彼の主観であると共に、又淋しい人生の縮図でもある。こうして機械文明の眼まぐるしい回転には無関心に、こつ／＼とその独自の作品を展開してゆくところは石竹君とも非常によく似てゐる。ことに石竹君は素朴な田園詩を多くものする。そして、そこでは大抵、客観的でなく主観的でもなく、自然に同化しきつてゐる。

蟻がおじぎしたエツサク／＼続く

この句に見る技巧の妙は石竹君において他に求めることは出来ない。人としての彼、詩人としての彼に、時代から超然とした素朴さ、偉大さを我々はいつもうかゞひ得る。

本社 十一月句会

◇十一月七日(月)午後一時
アウイーナ大 阪

秋らしくなった、と思つたら、もう立冬の7日、本社句会は、91名(うち投句者10名)の参加で開催された。

今月のお話は平井美智子さん。題はコロナで何度も延期になつた「1と2と3と4」。お茶もトイレもご自由に、で始まつた小嘶(ご本人の弁)は、一生に一句、自他ともに許せる句を(木本朱夏相談役)、句の中に作者が見えている句を(美智子さん)という言葉がよくわかる、楽しく説得力のあるお話だった。

彼を待つあべのハルカス街は雨

ハルカス川柳より

寝たきりのゆうこにも毎月生理

神野きつこ

ロボットを養子に完璧な老後

鈴木 節子

おじいさんと呼んでくれるなおばあさん

鈴木いさお

徘徊と噂をされて散歩やめ

シルバー川柳より

さて、お話や句の紹介で、皆さんの脳の燃費もきつとよくなつたことでしょう。

(眞澄)

月間賞は柿花和夫さん(堺市)

(司会―真理子・武人)(協取―勝弘・こみつ)

(受付―寿之・昌代)(懸垂幕墨書―耕治)

(清記―憲彦・勝弘・国和)

席題「裏」 坂 裕之 選

朝はやく地球の裏の野球みる
初回から九回裏までゼロの虎
ここからが勝負九回裏2アウト
夫への伝言チラシの裏に書く
裏でカルトがでんと控える水田町
何かある妻が突然丁寧語
路地裏の赤提灯が灯り出す
裏話聞かせ仲間引き入れる
裏方の仕事があつて主役映え
五輪トップ裏を返せば金まみれ
裏方に徹した父の潔さ
裏町の酒場へ不満捨てに行く
裏道には強いが裏金には弱い
花形の華を支える舞台裏
札束が裏の扉をノックする

山田 耕治
八木 幸彦
吉村久仁雄
矢倉 五月
澤井 敏治
山崎 武彦
木嶋 盛隆
吉村久仁雄
川端 一步
永田 紀恵
松岡 篤
内藤 憲彦
山野 寿之
藤井 宏造

裏ガネが東京五輪台無しに
不覚にも酔つて見られた裏の顔
負けたつて裏切りはせぬトラファン
里帰り土を味わう足の裏
お話も居酒屋も裏が大好き
約束はないが裏口開けてある
彼からの電話に声が裏返る
裏側の議員が癒着するカルト
涙腺の裏は乾いている女優
路地裏に妻に内緒の秘密基地
立ち飲み屋があるのが駅の裏らしい
よく聞けば裏には裏のある話
足の裏くろろうさんと風呂で揉む
十分生きた裏も見せます何なりと
裏事情で稼ぎまくつて週刊誌
「ごもっとも」うなずく人の裏の顔
裏方に徹する人の頼もしく
裏側に気付かなかつた夫の顔
裏山にマツタケ生えた里豊か
九回の裏大逆転のドラマ
裏道を選んだ訳じや無いけれど
立ち呑みがこれたま旨い裏通り
秋深む裏木戸叩く冬の使者
裏生地におしゃれのセンス光らせる
裏のない人だけど気のきかぬ人
路地裏に今年はずサンマ匂いなし

柿花 和夫
伊達 郁夫
澤井 敏治
柿花 和夫
江島谷勝弘
中村 恵
藤井 宏造
山野 寿之
宇都満知子
鈴木いさお
山田 耕治
木本 朱夏
原田すみ子
今井万紗子
矢倉 五月
折田あきこ
森松まつお
折田あきこ
水野 黒兎
藤田 武人
みぎわはな
片岡 加代
油谷 克己
宇都満知子
鴨谷瑠美子
川端 一步

佳

裏方で生きて役立つ誇らしさ
裏側をひぬくれ者は気にしてる
その家の素顔がわかる勝手口
裏の裏止めて正攻法でいく
裏口で入学したが首席です

青木ゆきみ
近兼 敦子
栃尾 奏子
川端 六点
青木ゆきみ

表裏なくつき合う友は有り難い

平賀 国和

論吉さんいれば裏口すつと開く

長谷川 崇明

裏方に徹して光るいぶし銀

山崎 武彦

裏技を使つてまでも勝ちにいく

軸

兼題「わざと」

敏森

廣光 選

なよりの武器にしているわざと泣き
子のミスも見て見ぬ振りで育ててた
捨て石の校歌勝機を引き寄せ
何やかやわざと意地悪ちっちゃな恋
機嫌取りわざとお世辞を言つてくる
お世辞とはわかっているも痺れさす
難題を言つて本気度確かめる
家族へのあてつけわざとボケたふり
秘密だとわざと小声で念を押す
ことさらに隣の嫁を褒めちぎる

奥澤洋次郎
新阜 義明
瀬島流れ星
清水 英旺
惠利 菊江
伏見 雅明
出口セツ子
西出 楓楽
水野 黒兎
みざわはな

あつそうなん知つたかぶりを喜ばせ
わざとかと言われるほどの物忘れ
午前様わざと笑顔で待ち受ける
はらはらと涙流して芸達者
母さんも泣きたい時に笑つてた
スナツプをほかせば妻のお気に入り
コンコンわざと咳する電話口
欲しいものわざと寝言で言つてみる
あとけなく笑うさめざめと泣ける
涙目でなんでもないと言つてみた
観覧車にふたり嫌いと言つてみた
詐欺電話わざとボケてるおばあちゃん
わざとらしい大阪弁で値切られる
遅刻して神の度量を確かめる
本心の真逆を言つて様子見る
優先席の前でふらつくおばあちゃん
野球拳わざとに負ける呑めるから
エコバッグわざとマツタケ上に置く
酔うた振りしなだれかかる終電車
できないと言つて便利に使ってます
ハローウィンびびらせられたノーマイク
わざとじやないの殺人りの卵焼き
煮つまれば本音さらして笑い合う
少なめに盛る「おかわり」がききたくて
惚れたから速く離れた席につく
ジーンズの穴から若さ覗かせる

森 菊江
森田 旅人
今井万紗子
平賀 国和
島田 明美
初代 正彦
山本 昌代
青木 隆一
中岡千代美
上田ひとみ
小島 蘭幸
斎藤 隆浩
長谷川 崇明
石田 孝純
吉村久仁雄
矢倉 五月
村田 博

あんた誰わざと夫に言うてみた
弱点をわざとさらして愛される
こけるのは美人ナースの前にする
笑わせるためにはピエロにもなろう
みえみえの嘘を真顔で聞いてやる
わざと無口 目立たぬように目立つよに
仲裁の出る幕わざと開けてある
地 柿花 和夫
天 ライバルに花を持たせているゆとり
木本 朱夏
強くなりたくて強気の振りをする
内藤 憲彦
怒つてる今日のカレーは超辛口
軸

兼題「インテリア」

村田

博 選

祖母の祖母から受け継いだ雛飾り
モネの絵を並べトイレのインテリア
仏壇が一番高いインテリア
百均の壺に活けるバラ一輪
家裁出て女壁紙張り替える
川柳塔誌並べてボクのインテリア
インテリアきっちり決めて彼女呼ぶ
ゲルニカの複写が威張るウサギ小屋
内装に金かけてますワンルーム

伊達 郁夫
澤井 敏治
富永 恭子
谷口 東風
近兼 敦子
吉村久仁雄
栃尾 奏子
伊達 郁夫
中村 惠

澤井 敏治
折田あきこ
藤田 武人
片山かずお
伊達 郁夫
川端 一歩
坂 裕之
澤井 敏治
川端 六点

置き物のようにピアノと老いた猫

インテリア和風揃える親日家

カーテンを替えてお部屋に花が咲く

応接間の魚拓の前で待たされる

電書が鎮座昭和のアンティーク

インテリア私のセンス試される

なよりのインテリアかも表彰状

時々のはたきをかけるブリタニカ

壁紙に孫の写真と五七五

インテリアの趣味が異なる子の世代

インテリア整い住む人がいない

インテリアで値踏みされてるお人柄

思い出が並ぶキーホルダー○○○個

北欧の家具に仏壇囲まれる

三代目明治の家具と暮らしてる

我が家ではインテリアです座敷大

地酒の瓶飾り旅情をお裾分け

インテリアにとけこんでいる招き猫

がらくたでも夫にとつてはインテリア

クリスマス使い回しの飾り物

節電に氷河写真と風鈴と

実篤の額ひっそりと古い壁

和紙使い行灯を置く日本の美

老母独り花一輪を欠かさない

シャンデリア地震考え止めておく

木本 朱夏

瀬島流れ星

西上 遊二

山田 耕治

安福 和夫

宇都満知子

永田 紀恵

大久保真澄

内田志津子

水野 黒鬼

中村 恵

柿花 和夫

内藤 憲彦

高杉 力

坂 裕之

木嶋 盛隆

松岡 篤

片岡 加代

今井万紗子

東 定生

上田 和宏

川端 一步

惠利 菊江

吉村久仁雄

谷口 東風

本棚に母の形見のオルゴール

リモートでやれば気になるインテリア

究極は空間というインテリア

住

玄関に魔除けシーサー睨ませる

インテリアかける金より今日の米

お金持ちの家にたいいてある暖炉

インテリア剥製だけのご勘弁

ブラインド上げて日課の深呼吸

人

また失恋したなカーテン色変わる

アスリート部屋いっぱいの楯カップ

天

ローソクの光でロゼを酌み交わす

軸

座布団を枕代りに酔い醒まし

兼題「敬う」

澤井 敏治 選

使い慣れぬ敬語使って舌もつれ

お互いに尊敬しあえば戦なし

先輩の知識敬う顔ばかり

有無言わず師を敬ったその昔

年上を立てる風潮もはや過去

墓洗う敬う心杖にして

佐々木満作

長谷川崇明

島田 明美

新家 完司

出口セツ子

きとうこみつ

青木ゆきみ

初代 正彦

桃谷 和郎

内田志津子

坂上 淳司

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

内田志津子

日本に四季の花ありありがたい

手紙のね 末尾かならず敬具だよ

尊敬の念わたしのピタミン剤

敬老の日孫が肩揉みしてくれる

先輩の影も踏めないツカガール

お顔見ると拝んでしまう論吉さん

糟糠の妻に小さな花を買う

書家の筆たましいとなり踊りだす

敬いたい一隅照らす人たちを

両親を敬う家訓うまく行く

お彼岸に先祖敬う花手桶

尊敬の視線をくれるうちのポチ

富士山を仰ぐと僕は手を合わす

敬えば低い物腰なお謙虚

父の樹をゆすり教えをううている

敬える先輩達は黄泉の句座

栢榴はせる母はやっぱりえらかった

ものない時代を生きた母の知恵

敬ってしまふ恩師の白い眉

畏敬する師の足跡を見失う

家事育事母は毎日フル回転

教祖様敬いお金消えまじした

お互いに敬い合える好敵手

路地裏に住む博識のお爺さん

シワシワの祖母の両手に宿る神

内藤 憲彦

江島谷勝弘

山本 昌代

佐々木満作

坂上 淳司

敏森 廣光

平井美智子

饗庭 風鈴

平賀 国和

榎本 舞夢

山野 寿之

島田 明美

村田 博

山野 寿之

津守 柳伸

油谷 克己

片岡 加代

山本加お里

鴨谷瑠美子

安福 和夫

斎藤 隆浩

山田 耕治

八木 幸彦

みぎわはな

島田 明美

師の教え今も心に日々暮らす
旨い酒杜氏敬い腑に落とす

坂 裕之
青木 隆一

ハロウィーンなんかなると参加した
濃厚接触者 5日間の鬱

長谷川崇明
内藤 憲彦

カオスの世に確かな希望呱呱の声
二万歩へ空と大地の中を行く

糀谷 和郎
原田すみ子

ありがたい良き師と出会ひ友もでき
師の背中遥かかなたと知る未熟
子を持つて親を敬う心知る
太陽と水と空気に今敬意

山本加お里
村田 博
今井万紗子
柴本ばつは

コロナ対策撃退か共存か
混沌の調和に酔ったジャズライブ
仮想通貨混沌として理解せず
議論沸騰次回の日時決めただけ
円安のうえにミサイル飛んでくる

大久保眞澄
居谷真理子
水野 黒兎
川端 六点

混沌の世相カラスが多くなる
AIもてこずるにわとりとたまご
混沌の海泳ぎぬけ孫たちよ
もう一度卵に帰る予定です
コロナ対策と妻の機嫌は読み辛い
耳に経書いて世間に出て行こう

石田 孝純
山下じゅん子
上田ひとみ
伊達 郁夫

住

一世紀生きた命にあるオーラ
被災地が涙で拜むボランティア
お手本にしたいお方が一人いる
師の影を敬う重き荷を負うて
尊敬の最先端にいるスマホ

木本 朱夏
長谷川崇明
富永 恭子
津守 柳伸
川端 六点

防衛省盾から矛へと混沌と
実力伯仲勝負の女神気まぐれで
群青の秋の海です怖くなる
二人して呆け混沌と目を過ごす
ほほえみを残して消えていく天寿
朝刊を開けばこぼれでる叫び
ごっこではすまなくなった銃の音

中岡千代美
片山かずお
油谷 克己
柴本ばつは
榎本 舞夢
荻野 浩子
平井美智子

混沌の地球の隅で飼う金魚
混沌のヒト科いつかは消えてゆく
混沌に神の飾をさがして
一輪車すいーつと混沌を抜けた
居酒屋のカオス引きずる二日酔い

吉村久仁雄
平井美智子
西出 楓楽
奥水 弘
小島 蘭幸
新家 完司

人

敬えば路傍の石も神さまに

荻野 浩子

夢だいて宇宙飛んでる謎のまま
混沌の欠片も持たぬ二刀流

片岡 加代
山本加お里

混沌の浮世を泳ぐ二枚舌
このカオス抜ければ終わる更年期

山野 寿之

地

ばあちゃん魔法使いに違いない上田ひとみ

カオスの中に浮き足で立っている
混沌と妥協は遠い三すくみ

山野 寿之
宇都満知子

諸説紛々邪馬台国は何処ですか
黙示録の最終章は尚カオス

折尾 奏子

天

師を思うそして六大家を想う

小島 蘭幸

シラカンス混沌の世に耐えている
へべれけの混沌しばし宇宙人

澤井 敏治
澤井 敏治

安福 和夫

軸

仰ぎ見る師がにっこりと微笑んだ

小島 蘭幸

ジェンダーはオトコおんなの枠越えて
元女性元男性がするコンパ

新家 完司
中村 恵

安福 和夫

兼題「混沌」

木本 朱夏 選

春はいつ来る混沌のウクライナ
女王逝き混沌とした国になる

鈴木いさお
八木 幸彦

時代錯誤「わが闘争」がよみがえる
文学してはいます混沌の机

青木 隆一
江島谷勝弘

句読点もうない余生突っ走る

瀬島流れ星

子供らの先はどうなる格差の世

奥野洋次郎

山田 耕治

山田 耕治

新家 完司 選

瀬島流れ星

秋日和なのミサイル乱れ打ち
鍋ひとつ磨いて秋はつるべ落とし
耕した汗に応えて実る秋
点滴の落ちる速さで日が暮れる
周五郎再読秋の夜は長い
食欲がわいて来ましたお月さま
焼鳥の缶詰もある非常食
色気と食い気競い合ってる元氣よき
ホームレスの猫に炊き出しせがまれる
蛇口の水飲める世界で日本だけ
風呂敷の便利賄路も夜逃げにも
音痴でも今大声で反戦歌
歌ならば愛していると言えるのに
幼児事故胸が張り裂けそうになる
捨てられたマスク路上でくしゃみする
鼻低いけどマスク一応止まってる
会うたびに背くらべしよう孫がいう
ふて寝するボクに毛布を掛ける妻
嫁娘率いてランチわたしボス
アールグレイ淹れて心も冬支度
爺ちゃんもハンドクリームぬってる
Jアラートびつくりさせたただですか
群青の海に国境など描けぬ
誤入力教えてくれぬキーボード
時代劇二本観ている文化の日
マイブーム黄門さんと金四郎

森松まつお 木本 朱夏 内藤 憲彦 川端 六六 森松まつお 津守 柳伸 山田 耕治 川端 一步 大久保真澄 みぎわはな 栃尾 奏子 吉村久仁雄 近兼 敦子 八木 幸彦 水野 黒兎 森 菊江 山下じゅん子 斎藤 隆浩 山下じゅん子 山野 双葉 宇都満知子 古今堂蕉子 伊達 郁夫 初代 正彦 川端 一步 西出 楓楽

夜中には咳込み朝は大きくしゃみ
存在を今はクシヤミが示すだけ
もう嘘はつけないこんな青空に
かくれんぼする子も交じる家具売場
エレベーター降りて止めてた息を吐く
お役に立ちたい鍵盤の端っこ
ガス値上げ風呂はなるべくやめておく
暇な音立てて空き缶つぶしてる
何時だって母は元氣な振りしてた
なんとなくくさい私の着てた服
拾われた栗と蹴つ飛ばされた栗
末席から正論が出て座が縮まる
お隣りは幸せそうなゴミ袋
ゴミ箱に太る理由が詰めてある
エンディングノートへのへのへじ書く
うなづいて不安を消してくれた母
もの忘れふつと出てくる時が好き原田すみ子
地 山ほどの履けない靴をまたしまう 大久保真澄
天 梅干しにも朝昼晩の味がある 柿花 和夫
軸 タフガイに見えるでしょうがデリケート

第16回「ふるさと」川柳募集案内

課題 「縁」(一口2句提出・12人共選・複数応募可・清記選)

選者 浪越 靖政・高瀬 霜石・尾藤 川柳・阪本 高士・小島 蘭幸・浅利猪一郎 他

締切 2023年 1月31日(消印有効)

投句料 1000円(切手不可・郵便小為替)(誌上大会用紙他・便箋・原稿用紙等)

最優秀賞 1点(樺細工色紙掛・仙北市産品)

発表 柳誌「湖」(2023年4月号予定)

投句先・問合せ先 〒014-0602 秋田県仙北市ひのきない字長戸呂85 浅利猪一郎 宛

第16回「ふるさと」川柳事務局宛 電話 0187-48-2236

主催 川柳「湖」(つみ)

第二十四回全日本川柳誌上大会

(令和柳多留)入選作品

(参加者1,398名)

令和柳多留賞

ゆつくりでいい遅咲きの子と歩く

広島県 川上 咲良

川柳大賞

蔓が巻く鉄条網を抱きしめて

大阪府 森井 克子

NHK会長賞

お笑いの合間に戦車行くニュース

宮城県 岩 測 徳 男

日本青少年育成協会会長賞

ろうそくのもの問いたげな黄色い灯

福井県 金 具 雄 二 郎

全日本川柳協会賞

退屈なデータが縁側で憩う

静岡県 熊 柴 豪

全日本川柳誌上大会賞

今日生きる一日分のねじを巻く

福島県 安 藤 敏 彦

断層が語る地球の大叙事詩

茨城県 佐 瀬 貴 子

ヘルパーの来ぬ日ミモザも枯れかかる

埼玉県 北 島 滯

巻き上げた租税が木簡に残る

兵庫県 赤 井 花 城

記録的ばかり地球が壊れそう

栃木県 荒 牧 やむ茶

第一次選者

「黄」

北山 まみどり

大嶋 都嗣子

「データ」

三上 博史

片岡 加代

「巻く」

柴垣 一

樋口 祐子

「くつきり」

佐道 正

高木 勇三

「期待」

佐藤 清泉

横尾 信雄

第二次選者(50音順)

黒川 孤遊

佐藤 美文

西 惠美子

松代 天鬼

矢沢 和女

全日本川柳誌上大会のご案内

(令和柳多留第4集通巻25号)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(令和柳多留第4集通巻25号)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(一社)全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞってご参加ください。

一般社団法人 全日本川柳協会
理事長 小島 蘭 幸

課題と共選者(各題2句・連記)

- | | | |
|----------------|---|-------------|
| 「内」瀧尻 善英(青森) | — | 覧のぶなが(沖縄)共選 |
| 「マスク」鈴木さくら(秋田) | — | 荒川八洲雄(愛知)共選 |
| 「飛ぶ」菅沼 匠(新潟) | — | 西村 寛子(愛媛)共選 |
| 「青い」平 川柳(東京) | — | 西 美和子(大阪)共選 |
| 「待望」渋川 溪舟(東京) | — | 間瀬田紋章(宮崎)共選 |

第2次選者

天根 夢草(大阪)、赤井 花城(兵庫)、坂下 清(富山)
いしがみ鉄(東京)、仁多見千絵(宮城)

参加費 2,000円(投句料・『令和柳多留第4集通巻25号』代金含む)

賞 令和柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
日本青少年育成協会会長賞・全日本川柳協会賞
全日本川柳誌上大会賞(予定)

締切 令和5年1月31日(火)〈当日消印有効〉

参加方法 参加用紙に記入し、参加費2,000円(振替又は小為替)とともに、下記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905
一般社団法人 全日本川柳協会
電話 (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433
振替口座 00970-9-3575

おせぬ壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

長柳会(大阪)

大浦 福子報

ズルイ人甘い笑顔に絆される
砂利道もぬかるみも越え五十年
姦しい妻がおすましおちよほ口
乱舞した遠い記憶の赤トンボ
神輿舞うやはり歴史の祇園祭
広島夏は祈りと哀しみと
パトカーを見ると隠れる癖がある
結婚線二本あるよと見せる妻
遠慮して今年も虎は下位にいる
アレレレ憧れの人変わりすぎ
おやすみと穏やかな声聞く枕
何時何処で逝くやも知れず下着白
ドラ息子脛をかじってホゾをかむ
少子化が国力落とす負の連鎖
知らぬ間に曲がってしまい猫背です
条件は食のセンスの合う男

福子 孝代 ともこ 和子 隆彦 正美 正博 純風 たけし ヒロ ふみ 淳司 隆明 光弘 登美子 由夏

岸和田川柳会(大阪)

石田ひろ子報

普段着はおさがりだった昭和の子
アイビーエス見事世界の人助け
国境を越えるミサイル越えぬ愛
支持上げるつもり国葬当て外れ
国葬に国と人での違い知る
阿波踊り4人にひとり出たコロナ
物価上げれば内閣不支持率上がる
鼻歌で流す涙は過去の恋

澄子 靖博 孝 くに お規之 秀子 おくみ 由子

促せばあっちこっちにいた仲間
人間が好きで人間には厳し
人間のエゴで泣いている青い星
退院の朝人間を取り戻す
輪を抜けてやっとな人間とり戻す
人間を核のお化けがおびやかす
人間味あふれる談話久し振り
油汗人間なればこそだろう
人間なら無用の戦続けない
人間のエゴたれ流す汚染水
最後まで人間丸くまれぬまま
辛苦に耐え忍んで付いた人間味
コロナ禍で拍車を掛けた人嫌い
穏やかに対応できる人が好き
人間が壊してしまおう青い星
あの頃は早く結婚しろと言いつ
今に見ていると風船膨らまず
ゼロ歳につながる平和9条を

はこべ 恵子 隆雄 優 真澄 勝久 和美 香代 侑子 和宏 康信 ふさゑ 三成 扶美代 彦弘 雅尚 ひろ子

川柳塔打吹(鳥取)

齊尾くにこ報

もう一つ0がほしいの年金者
ふわふわと漂うボクの基地は妻
豚饅のふわふわ感に舌鼓
時間あると再起促す父の声
今は子に早く早くと急がされる
うじうじと悩む子の背をそっと押し
朝ドラが今日のスイッチ押ししてくれ
ゼロからの出発母は厭わない
御破算にするとたしかに言つたよね
もう間近過疎の村からゼロの村
九条をゼロにするのは許さない
遺産分けプラーマイゼロの恙無し
ふわふわと生きて勿体ないこの世
ふわふわの椅子で良心鈍らせる
ゼロの時友の情けの身にしみる
初アート心ふわふわ雲の上
七転び八起きの果ての人間味

久米代 貴恵 富隆 悦子 紀美恵 余光 紀子 紀の治 節子

揺り椅子に忘れることの幸がある
アドバルーン遠く揺れてた少年期
白黒は黒沢映画の魅せどころ
天然と養殖私には同じ

大ジヨッキも天然の顔になる
天然のキヤラはどこでも眠れます
どの敵も天然のものでございます
天然を凌ぐ芸術などは無い
天然カラー映画は有楽座

天然の三朝温泉露天風呂
穴熊という戦法があり研究中
心の穴はつかり空いて隙間風
穴埋めを親がするから自立せぬ
大穴を当てて人生大狂い

ミサイルが地球に穴を開けまくる
家計簿の穴に笑いが詰まってる
ここちいい居場所でしたよ落とし穴

川柳藤井寺(大阪)

鈴木いざお報

相談のふりして金を無心する
飲めぬ酒記念銀缶売りに出し
塩ひかえ糖分取るな酒飲むな
フルムーンふんわりムード山の宿
嘘に嘘重ね混線してしまふ
戦死者の霊にプーチン縛られよ
里からのがんじがらめの荷をほどく
相談をする悩まないのて太る

宣子 芳光 玲坊 みゆき 美ツ千 重利 美知江 完司 照彦 石花菜 大鯨 凱柳 芳江 滋 龍枝 三津子 久仁雄 比呂志 一歩 ひろ子 倅子 まつお ちづる 瑠美子 勝弘

両腕でがんじがらめにされるハグ
虫の声秋のムードを少し呼ぶ
相談によつた仲間はぐちの花
なつメロに乙女ムードの揚げ羽蝶

相談をされた時から無二の友
頼りない人だ相談して分かる
相談に乗りますお金以外なら

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

西瓜積み荷台の人まで放り投げ
キャプテンの絶妙なトス見とれちゃう
各セッター目は後ろにもあるらしい
仲間とのかけ合いうまく笑いあり
ざらついた関係にトスあげてみる
トスされたボールに棲んでいた悪魔
道化師の妙技に天晴れバツクトス
サーブよりスパイクよりも僕はトス
しあわせのかたちにあげるトスいかが
ちようどいいトスが来たのでしめくる
とりあえずビールで舌を手なづける
わたくしにいいトスくれるひとと居る
青すぎる空よ話の相手して

生き方上手一歩下がって上げるトス
絶妙のトスでその場を切り抜ける
不規則に弾んで人生またボギー
退院の弾む足取り風香る
青赤黄キノコの色に弾む秋
百点を取ったか弾むランドセル

かずお 大子 喜代子 みつこ 扶美代 ダン吉 いさお 則彦報 英子 風来坊 真由美 澄子 孝子 洋子 重虎 和香子 柳子 美鈴 則彦 ひろ 霜石 吹喜 隆樹 初枝 のぶよし 龍馬

山口光久選

天寿全う母は蝶々になりました
誕生日祝いの膳は出世魚
おもてなし日本の良さに癒される
何よりの土産元気な笑顔です
空よりも君を見ている遠花火
見栄捨てて夫なだめて車椅子
原点は勇気を出して言ったノ
切り捨てたはずの煩惱暴れ出す
銃口に愛と平和を詰めなさい
若さつていいなさらさらの献血

順啓 次郎 奈津子 和夫 節子 寿子 美知江 智子

佳句地十選

(11月号から)

籠島恵子選

ならぬなら等身大で生きてみる
黙禱に読経のような蝉しぐれ
残り火が勝利の夢を外さない
再開の男は口バになつていた
生き様が普段の顔を変えてゆく
私の微笑はモナ・リザを超える
こてこてになるまで私を煮込む
銃口に愛と平和を詰めなさい
軍配を圖太い方にかけておく
悪知恵も枯れて卒寿の楕円形

敏治 富美子 拓治 克三 心咲 いさお かこ 麦青 眞理子

知らぬ間に弾けた種が花咲かず
 二日酔い記憶をたどる三次会
 水溜り今宵は月を生むだろう
 インタビュー優勝の声甲子園
 弾丸が暴く問題止めどなし
 割り勘と聞いて弾み出すコップ
 産道を出てくるまでは弾んでた

和歌山三幸川柳会

西川

千鶴報

玉の汗流す仕事に恵まれた
 七夕の星に願いは先ず平和
 風いでいる海に沈めた鎮魂歌
 冷や汗で免許返納した私
 潮騒に聞いてもらっている悩み
 言えぬこと吐きだしている広い海
 いい星に生まれた男の運の良さ
 寝そびれてクロスワードと電子辞書
 ジクゾーパズル脳がいい汗かいている
 流れ星あの日あの頃あの別れ
 この星を汚さぬように清く住む
 今日もまた題名のない朝が明け
 笑い合う家族を糧にして生きる
 この雨は地球が掻いた汗なのか
 動じない海に生き方教えられ
 追及にしどろもどろの汗を掻く
 拉致家族折りは海にかける虹
 愚痴などは決して言わぬ母の汗
 解毒したくてふるさとの海に行く

ふさゑ 花峯 一呑 義明 慕情 規子
 一雄 まき 純子 起世子 敏照 昭枝 准一 宏枝 菜摘 和子 碧 倅子 ひろ子 保州 彦弘 義泰 あき子 明子 知香

大漁旗翳す親子の二重奏
 光つてるとうさんの汗気付かぬ子
 夏休みやっぱり海も嬉しそう
 窓開くホームに一人星明り
 不義理した人に出会って冷や汗が
 海側の車窓に座る癖がある
 御無沙汰の海へ開いてゆく心
 波のように寄せては返すわが想い
 海の下で母さんでしたれりがとう
 泣き顔も笑顔に変えてくれる海
 汗水を年金手帳知っている
 人生の金星一つ妻娶る
 敗戦忌希有な平和の星座見る
 戦乱の国にも輝く星あかり
 戦争やコロナあっても好きな星
 海鳴りもララバイと聴く旅の宿

竹原川柳会(広島)

古田比呂子報

自転車で風切る父子秋桜
 父の意にしたがう母は秋桜
 白ピンク秋桜の咲く掲示板
 そう虫のコーラスですすね秋深し
 夕涼み虫の音月も芽えてくる
 ゴキブリを仇のように追う夜中
 少年の瞳キラキラ虫博士
 虫のいい話に乗ってみてやろう
 秋桜心の傷を癒します
 人は皆傷乗り越えて強くなる

眞智子 和美 よしこ 悦男 康則 俊介 晴代 美智子 八重子 與一 明宏 保子 妙子 満喜子 千鶴 蘭幸 和子 澄恵 笑子 弘子 慶子 敬子 白狐 輝恵

傷だらけの靴確かに歩いた人生
 この傷の話はこれでもうしない
 傷心は仏間の母に癒される
 あの時の傷がご縁という夫婦
 鉛筆で心の傷を開ける男
 信用が出来ない傷のない男
 古傷が癒えて再起の旅に出る
 良い話タダほど高いものはない
 堅実な蟻の行列が続く
 鎮魂の詩か葉月の遠花火
 カーブ快調娘と会話よくはずむ
 ふじばかま旅するちようちよ待っている
 空が泣く義父が降らせた涙雨
 せのびしたら体がほそく見えるよ
 はしるちかよりはやいとぶあかとんぼ

はびきの市民川柳会(大阪)藤原 大子報

親切を受けた喜び宿る胸
 旅の宿地産地消に地酒あり
 六人部屋六カ国語が酒のあと
 草むらる宿としている秋の虫
 ウクライナ安心の宿確保して
 妻という宿でくつろぐ日々を生き

京子 節生 夢香 節夫 栄香 昭紀 比呂子 千代美 歩美 貞子 厚子 幸子 初音 史子 小一 央 小二 沙弥 久仁雄

忘れてないかまた仮設という宿を
人生の所々に宿を置く

困ったら駆け込む胸の奥の宿

大樹の森に神様の宿がある

宿の下駄カラコロお土産の下見

さらさらと子供の視線未来見る

脳を鍛えるために五七五指を折る

ガツガツと鍛えた二十歳に戻りたし

鍛えるともうやめという頭

散々に反論浴びてしゃんとする

喋るより手紙を書いて頑張るよ

駒落ちから鍛えてくれた師に感謝

俺よりも長生きすると妻ジムへ

おかげさまやつと入選一万句

アスリート日々練習で鍛えられ

鍛えた体若いもんにはまだ負けん

合宿で鍛えられたか孫の礼

明日の星二軍の中で鍛えられ

わかやま吟社

小谷

小雪報

課によって言うこと違うのも役所

お役所の意識改革進んでる

一件に役所あちこち回らせる

散らばった子らを集めるホイッスル

今役所盤回しのイリュージョン

素地の無さ磨きかけても変化なし

お役所が多忙になったコロナ禍よ

夕節子

澄み渡る大空ボエム拾う秋

満作

スキルアップ少年の夢宇宙へと

涼子

一步

泰子

大子

瑠美子

みつこ

扶美代

フジ

こみつ

冬のト

専平

ダン吉

千鶴子

まつお

宏造

勝弘

正義

いさお

ちづる

一文

ばらばらと小銭を入れる精算機
ばらばらにならないように縄電車
ばらばらも日言葉と腰据える
年金の減額通知物価高

ばらばらの記憶で遊ぶ母の陰

忍の字へ協調性をわきまえる

無理でしよう水と油の君と僕

素っぴんの顔をマスクが救ってる

肩書のなかに滲んでいる素顔

ばらばらのジグゾーパズルみな孤独

熟成をするまで待っている素質

南大阪川柳会

松岡

秋の声またさんまには手が出ない

さわやかな朝へぼっかり白い雲

我が顔に刻まれているヒストリー

物価高暮らしたリズム狂い出す

打ち上げ花火ロケットに乗っていい感じ

電車内ウツラウツラを呼んでくる

一日のリズム狂わす長電話

終章のリズムゆっくりかみしめて

ライバルのリズムがじわり押し寄せる

僕が死んでも地球のリズム狂わない

きよるきよると立派な髭の目の動き

ダンジリの勇壮コロナ追っ払え

リズム感あふれる今日のフライパン

ひざ乃

大子

昌紀

力

亜成

あかね

精子

信勝

光

和宏

小雪

富美子

知香

敦巳

寿子

紀子

大輪

篤報

風羅

柳伸

江

千鶴子

まゆみ

ひざ乃

大子

昌紀

力

亜成

志華子

弘子

満作

鳴り止まぬ砲声いつの間にか秋
秋ですな小さい恋でもしませんが
大災害地球の断末魔だろろう

年一度松茸ご飯秋の味

弱音から説く歴史観ないですか

従妹が嫁に行くの他人に教えられ

台風の進路気になるこんといて

回覧板一緒に噂付いてくる

情報過多フェイクニュースを見抜かねば

ママ友の情報力の的確さ

家の恥孫学校でみな喋り

家々の情報詰まるゴミ袋

我が家では女系が強い歴史もつ

養殖は出来ぬサンマはデリケート

英国の女王見送る虹ふたつ

自販機の下へ百円汗まみれ

誰からも褒められないが生きている

善人は歴史に名前残さない

我が歴史都合いいよう変化する

富柳会(大阪)

山野

敬えば謙虚を返す低い腰

長い長い自慢話はお開きに

修行つみスキルを高め家業継ぎ

大波小波清濁呑んだ港町

朝食の余白に果実のある豊かな

戦闘のスキル平和に使いたい

スキルアップ少年の夢宇宙へと

蟻日路

一步

楓楽

国和

ダン吉

シマ子

加お里

常男

直子

静美

克己

敏治

篤

柳右子

通江

東風

双葉

実

峰子

寿之報

欣之

和子

正義

文重

きみ子

あかり

師と仰ぐ人が心に住み続け
帰宅する主人敬いシツボ振る
苦汗舐め舐めて熟練匠の手
真心がスキルアップをする介護
湊町で番よだれの小商い
ノブ握りさあ開けようか夢の国
邪魔せぬ様小さな旗を振りつづけ
齒科内科整形回りくつたりと
母似てす背の丸さといいい笑顔
天の川美は乱調に光る星
枕もと秋虫達の恋の声
思い出が家族を繋ぐ小宇宙
真剣に怒る言葉が荒くなる
内視鏡器用に痛を持ち帰る

子遊び親にわからぬ思いつき
しら切った大臣ついに追いこまれ
六十年まだまだやる気クラス会
とうとうと友の笑顔と長電話
高い秋刀魚を無理して食へることはない
会える時わねば明日は分からない

川柳ふうもん吟社(鳥取)山下 凱柳報

祖父ちゃんのベースに嵌り徹夜する
あと一歩とろい我が身が憎らしい
とろい風見せて全てをかっさらう
とろくなつた太い尻尾を持って余す

由夏 一文 壽峰 高鶴 武人 隆充 きよみ 章子 勝矢 和雪 常男 寿之 三樹夫 まみ子 かつ子 静江 遡行 美千代 回春子 金祥 月満 一瑤

とろいなあ僕のことかと気にかかる
ひもじくて羽織袴を米に換え
Uターン煮つころがしを褒めたたえ
体脂肪恋に燃えたら解けますか
的中率もつと上げてよ宝くじ
薔薇の花咲かすつもりが棘ばかり
札束になびく神など神でない
風に問いなびく歩道にゆく山河
ウーロン茶一杯なののに割り勘か
親子でも血で血を洗う遺産分け
分身のような我が句が没になり
喜びは倍に苦勞は共に分け
分け合つた秘密に塩をふりかける
一株の根分け取り持つ深い縁
喜怒哀楽使い分けする顔がある
ターリンへ腎臓一つプレゼント
浮気ばれ抜け道探しさあ逃げろ
抜け道が有るとは知らぬ真つ正直
立ち枯れの野菜モグラの通り道
政治家の抜け道知らぬ記憶ない
抜け道にあるかもしれぬ落とし穴
苦しみの抜け道のない老介護
抜け道のひとつは父の樹に登る
子育てにバトルしていた若かつた
今朝も又時計とバトル変わらぬ日
楽したい頭と足とガチバトル
政治家のバトル耳がうんざりだ

蟹郎 白兔 昌鼓 紫陽 絃一 みゆき 真理子 重忠 みつ子 茶人 美知江 無限 欣之 勲章 由紀女 栄策 宏章 龍彦 鐘馗 拓治 節子 紀美江 善平 菊江

下心あるとバトルに負けます
なあみんな怖いバトルはなくそうよ
バトル終え甘い夫婦の画布になる
バトルで泣きバトルで笑う夫婦仲
川柳さんだ(兵庫) 酒井 健二報

因習を破り若者独り立ち
ウクライナいまだ開けぬ突破口
七転び八起きして来た突破口
独断で国葬決めたのは総理
延命の重い決断迫られる
どつしりと構えた妻の頼りがい
メタボで米寿怪しい薬飲んで寝る
軽率が心に重くのしかかる
お見舞に重たい嘘を置いて来た
肩の荷を下ろし静かな明日を待つ
うちの夫軽い返事に重い腰
抱き上げるたびに命に感謝して
笑顔の裏にみんな重荷を背負つて
昔も今もサロンで決める政事
サロンなど知らぬ青春屋台酒
大桶の寿司にサロンとなる夕餉
心開き友と談笑ティーサロン
大皿がサロン着飾る秋野菜
中庭がサロンに変る誕生会
クラス会サロンで若き日が戻る
爽やかな秋の風切るサロンカー
門千代 大 八千代 凱柳 正和 峰明 雅尚 修平 哲夫 光久 哲男 勝正 義徳 ひとみ 喜久子 廣光 敏子 登志子 真桜子 野薫 いわゑ 優子

サロンエブロン掛けてすました顔の孫
育休でただらうろと子守唄

一良 迪

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

モンブラン山とかかった秋の味
落ちた栗拾いたいけど散歩道
支持率に平気装う聞く力

景子 和代

その通り育ての親は世間さま

美津子 宗鉄

雑音と言われて歌う人生歌
スリッパの音聞き分けているネズミ

玲峰

減るばかり老後資金が足りません
いじめの親平気平気と子を宥め

清乃

夫夫婦じつと見つめて子は育つ
新しい一週間に育つもの

和郎 ヨシエ

どの音も白井のラだけピンク
薬にも毒にもなれず浮いている

芳山 弘充

本意のうなずきポッポ浮く水母
座高だけ丘みどりには勝っている

弘光 正子

もう一度育ててみたいランドセル
自力では消せぬ心の水溜

万彩 一子

手の届く高さに夢を置いておく
階段でつまずく高くなつたのか

とも子 モナカ

もうあかんでも混んでいるWC

淳司 篤

妻の愚痴ゆつくり聞いてフルムーン
バイトして金の重みを知った孫

利子 俊昭

正解のない一日を過ごしている
正反対の性格だけどよくがまん

青帆 桂子

益明けの六畳の居間広くなる
痩せもせず現状維持で秋となる

俊久 治代

ウイルスが逢いたい孫を引き離す
後期です杖に結んだ迷子札

三ツ代 祐康

正確な計算宇宙から還る
それぞれ正義があつてネット民

小鹿 吹喜

夏バテか三日も上げず医者通い
仲のいい友と二人で湯治宿

令位子 ひろし

つい明日と言う日があつて怠け癖
値段など頓着なしで精を出す

哲男 稠民

一生を正攻法の蝸牛
正しさが違う共産主義の国

あきら 邦代

カタカナでどんな仕事かわかりません
夏バテか三日も上げず医者通い

宏之 恵子

里帰りあわててはずす土産の値札
献金はお断りです貧乏神

善輔 重男

正解のないノーアウトフルベース
正気の不正法を吐いて疎まれる

柳歩 美智子

愚痴を言う聞いて下さい佛さま
五ミリ程歩幅が狭く妻抜けぬ

多美子 久直

町おこし案山子出番の過疎の村
一〇一歳花は残りの夕日追う

良子 美智子

平気ではおれない暮らし物価高
円安で日ごとのくららし目一杯

雪代 豊仙

水切りをしても姿勢が直らない
仲のいい友と二人で湯治宿

宏之 恵子

隙間から秋風すうつとよつてくる
甲子園破れた孫の背をなでる

哲夫 すみえ

駅裏で一人見上げる名月よ
ズック靴チクリと痛い栗拾い

柳歩 美智子

犬猫もサマーセールになつて
弱いところ見合せ合い夫婦しています

多美子 久直

米寿すぎ気づき動きに変えて生き
元氣出せ笑顔をくれる夏野菜

凛絵 ひとみ

川柳は風流ですなかわやなぎ
記憶のないいつも嘘つく議員たち

悦子 靖夫

砂時計残りの砂が気に掛かる
血圧も素直に秋が冬になる

美穂 雨奇

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

藤塚 克三報

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

淳司 篤

景子 和代

景子 和代

川柳de遊ぼう会(大阪) 小野 雅美

悲しみは出向先の一人飯 晋一

頑張れと肩をたたいた恩師の目 幸徳

黄昏の一人歩きに彼岸花 てるひこ

組合に「米米クラブ」間違われ よしみ

杖をつき3本足の仲間増え はるみ

くもの巣のようなしがらみやと断つ 喜美子

特売日米の買い出し俺仕事 康雄

神業みたいカレー食べ終えただかなし えみこ

百才の祝いに開ける玉手箱 敏郎

名前までキラキラ光る親の愛 和純

豊作でケンケン踊りする案山子 孝純

宝石は好きです 昼寝しています のり子

哀しみの形に白い曼珠沙華 美智子

絵日記に微かに見えてくる貧富 (阪) 恵子

跳び上がる喜び話す人が居ぬ 旅人

グータッチでは伝わらぬ恋心 (岡) 恵子

色あせた日傘が忘れられている 満知子

仏前に新米匂うよう供え 雅美

川柳花の輪(大阪) 川本 信子

国訛りぬるいシャワーのように浴び 和織

祝福のシャワーあびてる花嫁さん やすの

傷心を洗うシャワーのような雨 亜成

あいまいな返事するより黙ってる 泰子

黙食でする食事会何のため 正太郎

場がなごむとんちんかんの受け答え 笑子

三才のとんちんかんを待っている 博泉
傷心に欲しい燦々陽のシャワー 信子

倉吉川柳会(鳥取) 大羽 雄大

丸くなれ大きくなれと袋掛け 醉美蓉

テーブルは丸い食器が支配する 照彦

麗子様前負けしていませんか 鬼一

スミースに漢字が書けぬ時がある 龍枝

麗しい乳房が浮かぶ美人の湯 紀美恵

筆順が間違つてても書けた凹 重忠

夫婦げんか認知になれば丸くなる 隆昌

何もかも女ひとりで忙しい さち子

古希を過ぎ背など気性丸くなる 恵子

いつまでも手書きの便り嬉しいな 智恵子

野良仕事三度の飯の大家族 日出子

プーチンを丸めこむ人いないのか けいこ

台風は丸い目玉で島めぐり 佑子

忙しくボケてる暇はありません 凱柳

丸太ん棒居間にころころ邪魔つくさ 大鯨

履歴書に丁寧に書く賞罰なし 麦青

一日の予定を書いてさあやるぞ 道春

傷ついた心夜中に丸洗い 由紀子

麗しいと言われた女今老いし 瑞子

五七五ひねり部屋中反故の山 雄大

川柳塔すみよし(大阪) 田中ゆみ子

台風が来てるが会議まだ続く まつお

集合写真何時も端っこすまし顔 万紗子

誉められて猫も逆立ち上手くなる さくら

父の日に父が集まる縄のれん 寿之

そわそわと出掛ける度に若返る 民子

集うのが好き人間は寂しがり 直子

病室の母に合わせている呼吸 アイヤ

先達も集うあの世の塔まつり いさお

明日受ける認知テストへ不整脈 憲彦

集まればなんやかんやで飲む話 智彦

正直に誉めた探るな腹の中 雅美

千枚田赤の集合曼珠沙華 ばっは

マイナスも誉めよ明日に灯をともし ゆみ子

お若いねなにより嬉し誉め言葉 福貴子

我が一句息のあるうち残さねば 克己

さよならを切り出したいが雨しとど 千代美

息災でおるか気になる同い年 俊雄

みえすいたおべんちゃらでも嬉しい日 里子

どんな日もゴミの収集ありがとう 廣子

いい返事スマホ握って待っている 久仁雄

冷静に見えてサンダル右左 満知子

食べて寝てトイレもちゃんと猫誉める とき子

首洗う五輪のドンも息詰まり 敏明

あちこちでハグがとびかう同期会 (失) 五月

白寿までもう一息と微笑う 萌

誉められてついOKと引き受けた 裕之

初産のそわそわと待つお父さん こみつ

集団になると強気で喧嘩腰 史郎

深呼吸すれば抜がる脳回路 志津子

誉められて笑顔いっぱい嬉しそう
えらいこっちゃ誉めたらマイク離さない
調子よく誉めて誠が響かない
真つ直ぐに生きる夜明けの深呼吸
歳忘れ走って動悸止まらない
一息をついては登る八十路坂

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

秋風がくすぐりコスモスが笑う
いいもんだ眠れぬ夜は句を作る
回らない鮎の値段に目をまわす
小さな巨人爺ちゃん供に公園へ
高いのを値切るおばちゃん関西弁
隙間風秋も深まり強くなり
コロナさんそんなに隙をつかないで
この隙間チヨットゴメン座らせて
隙見つけ入る立呑み技がいる
ローカル線お国訛りが子守歌
嫁旅行なんて静かな広い家
四季というけれど今年は秋が無い
栄転をけって家族と暮す道
子の寝相夜中に足で顔を蹴る
蹴る石を探す句会の帰り道
ジャイアント馬場ほんまにすごい蹴りだった
蹴っ飛ばす石の欠片もないタウン
缶蹴りもアルミじゃ飛ばさずもう廃れ
念願の若い命が腹を蹴る
コンクリの割れ目に咲いた花の意地

陽一 陽一
篤 篤
ふりこ 比呂志
勝弘 勝弘
満作 満作
和子 和子
楓華 楓華
紀恵 紀恵
菊江 菊江
新緑 新緑
柳明 柳明
れい香 れい香
照代 照代
隆一 隆一
英坊 英坊
厚江 厚江
幸彦 幸彦
初音 初音
雪菜 雪菜
和夫 和夫
こみつ こみつ
健二 健二
修平 修平
純 純
祐康 祐康

隙あらばと狙って待つてる目が光る
隙見せて弱さも見える色男
聞き上手心の隙を埋めてやる
割り込む隙見つけ平和を諦めぬ
日帰りの湯で転た寝の午後三時
コマーシャルもうこの顔は飽きました
なんとなく危ない女ひとり居る
炬燵の中足で伝えたアイラブユー
何かいいことないかと人の逆を行く
のんびりとさせてくれない廻る鮎

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒鬼報

毎日が気楽になれる怠け癖
ラブレター癖字読めずに愛が醒め
品選び余命考え決める癖
癖のない人ねけなしているの裏めてるの
「ヨイドン」信号待ちの独り言
嬉しいと声がうわずる母の癖
退院間近病院食が物足りぬ
まだ細い太いサンマを待っている
何食べたい何でもいと素っ気ない
先ず写真撮ってフレンチフルコース
饅頭を食べてビールも欠かさない
突風に逆さキノコの傘の骨

佐和子 佐和子
ゆきみ ゆきみ
紀華 紀華
久仁雄 久仁雄
正和 正和
耕治 耕治
勝弘 勝弘
廣光 廣光
かずお かずお
宏造 宏造
則彦 則彦
順子 順子
奈津子 奈津子
一弥 一弥
春代 春代
純子 純子
宏造 宏造
勝弘 勝弘
直子 直子
正子 正子
黒兎 黒兎
蟻日路 蟻日路

西宮きたぐち(兵庫) 緒方美津子報

逝く前に覗いてみたい黄泉の国
ふつふつと喜びがわく呱呱の声
生真面目に生きて泣いたり笑ったり
褒めるのに節約などは要りません
相合傘嬉しいデマが先走る
目の前に節約ちよつと覗きたい
やれやれと夏折りたたむ法師蟬
一期一会数多の縁に生かされる
詰め替えを買えば節約した気分
ちよつとしたデマが炎上する恐怖
ああ夫婦傾きながら廻る独楽
大根は捨てるところなどありません
デマ情報訂正は砂ほどの文字
六甲山にずしんと落ちた大夕日
夏休み質問責めの孫が来る
プーチンへ世界の怒りふつふつと
節約といいつつ妻がとる出前
皇室を見てきたように週刊誌
食欲がありさえすれば日々楽し
夫婦仲覗き見しているご仏壇
デマのまま流しておこう良い噂
飛ばされたデマは生涯忘れられない
いい目覚めやる気ふつふつ目玉焼
無人駅蚊に刺されつつ一人待つ
医療費を節約してる万歩計
ゆつくりと話せば分かる百二歳
タイマーで消されてしまう暑い夜
アイディアがまだ湧いてくる大丈夫

盛夫 盛夫
野鶴 野鶴
和代 和代
千賀子 千賀子
和宏 和宏
紀乃 紀乃
恵美子 恵美子
弘子 弘子
ゆきみ ゆきみ
幸彦 幸彦
武彦 武彦
ひとみ ひとみ
恭子 恭子
いわゑ いわゑ
新録 新録
一徳 一徳
隆一 隆一
宗鉄 宗鉄
哲男 哲男
廣光 廣光
哲子 哲子
迪 迪
邦男 邦男
みよし みよし
洋次郎 洋次郎
利子 利子
敦子 敦子
正和 正和

出遅れた芽には特別気をつかう
 根も葉もない言葉たくみに飛ぶ噂
 傷口に染みるピアノの弾き語り
 原発の安全神話デマでした
 釜で炊くめしの匂いが懐かしい

六甲川柳会(兵庫) 靴谷 和郎報

暮仕舞しましたご先祖様ゴメン
 ああ父の勲章死んでから届く
 目立たないところで凛として生きる
 今更だ母の介護へ詫びばかり
 新札は三度数えてのし袋
 子のそばに転居をしたという知らせ
 セカンドオピニオン同じ見たで解けた鬱
 年齢をまちがう程に歳をとる

健二 博

交差点とうとう走れなくなつた
 出来ちゃつた今更別れ言えぬ親
 回転ズシ皿を数えて手をのばす
 世の中に数え忘れたをされている
 焦げ飯のうまさ知らない炊飯器
 残り火が艶の出逢いで燃え上がる
 父も母もとうとう風になりました
 温暖化とうとう日本亜熱帯
 わだかまり解かず一言「ゴメンやで」
 貸し借りがいからずつと友のまま
 秋夜長 i f を加える星月夜
 頭数数え一人を待つツア

ひとみ すみ子 美津子 恭子 和宏 克美

七五三大器晩成らしき面
 栄

利恵子 義明 崇史 洋次郎 武彦 弘 廣光 盛夫 隆浩 和郎 千賀子 狸月

どうしよう今更好きと言われても
 孫に言われやつと免許を返す夫
 マイナーな川柳でよむ大宇宙
 人並にアイサービスに通います
 アッシーを止めてとうとう無為徒食
 物憂げな俺の生きざま昼の月
 日に二本だけの故郷路線バス
 全没はマイナー試す治験薬
 一億はいらん一千万ほしい
 戦争は一瞬で和の文字を消す
 イチニイサン元気があれば句が詠める
 自分史に残す冷や汗あぶら汗
 じいちゃんときおり訪れるカオス
 笑点の腹黒風刺もう聞けぬ

忠志 利子 次郎 迪 正美 道子 真桜子 憲央 勝弘 弘華 正和 哲男 敦子 禎之

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

努力だけは判つてくれた靴の減り
 人助け度量大きく粗衣粗食
 是非読みたいノーベル賞をとった本
 今昔の万博つなぐミヤクミヤクと
 紙の本この手ざわりの心地良さ
 老友が酒と昭和を連れて来る
 涙腺が緩むと虹が太くなる
 ひょうひょうと飛んでくるよな秋西
 メルカリで一期一会のショッピング
 コオロギを食べてグルメと百年後
 道なりに私は私この道を
 多数決文句はあるが我慢する

俊雄 ルイ子 朝子 繁子 北舟 郁夫 宏造 隆一 満知子 ゆきみ

ありがとうすみませんねが潤滑油
 仙人に憧れ懐が寒い
 清濁も丸め飲み込み込む太っ腹
 戦争は昔ばなしでない今も
 クレゾールたつぷり漬けた回覧板
 本物の鬼と化したかブーチン氏
 せがまれて子を見た絵本捨てられず
 なせだろう洗濯すると雨が降る
 読みかけの本ハッピーエンド折つてる
 フリーターの本ハッピーとして東大出
 好きだけ食べやと積まれ松葉蟹
 ひょうひょうと生きてこだわり捨てました
 持てるだけ持って帰れと西瓜畑
 いつの間にか上司払った宴会費
 ひょうひょうと生きているよ欲はある
 今も昔も年寄りの愚痴変わらぬ
 麦こはん健康食に出世した
 目まぐるしい世の中置いてけぼり食う
 ジェラシーのように燃え立つ曼珠沙華
 振り返らずただ前だけを見つめてる
 秋冷の散歩金木犀を追いかける
 勝つたと童顔こぼれ字良が好き
 一周忌墓と思ひ出話する

福貴子 星雨 捷二 洋志 一歩 榮子 杵香 峰子 賢子 千恵子 廣子 野鶴 黒兎 廣光 博

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

母ちゃんの顔見るだけでリラックス
 リラックスして人間をとり戻す
 嫁さんリラックス家が動かない

ばっは 佳子 光雄

惚れぐすりほつほつ効いてくる時間
惚れられたことがないから惚れません
若いころツカに惚れすぎ気もそぞろ

一目惚れ僕は一生君が好き
惚れっぱく葉いらすの日々生きる
まあええか惚れた弱みの放し飼

二刀流華麗なブレー大谷君
だーい好き私に惚れている私
惚れたのか惚れられたのか共白髪

惚れてから無口になった曼殊沙華
惚れ直すあなたの父のお人柄
発車ベル駆け込む足はアスリート

賢いか足の速い子もてました
女房にゃ手も足も出ぬ口達者
風向きはどうあれ足は地につけて

足して2で割れば辛さも悲しみも
難儀して爺ちゃんが切る足の爪
踏んばった足裏そつと陽に当てる

地図に無い道を歩いて来た素足
地団駄を踏んで鍛えた足腰だ
戦の起源二足歩行にさかのぼる

会議後は例の飲み屋で生き返る
感謝して札を尽くして今を生き
輕輕しく連絡先は言えないわ

華燭の典連理の契り幾久し
悲しみのレクイエム聞くイヤリング
合戦の歴史が語る遺跡群

会則に例外があり言い逃れ

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

敗者への拍手が止まぬスタジアム
鼻に抜け口で弾けるペーミンント
ソーダ水で頭の中を掃除する

日本のバラ抱きこれから生きる
爽やかな瞳にゆるむ隠しごと
わたくしが大福餅の管理人

忠告が小言かものすこくうざい
試着させども似合うといい加減
爽やかな気性に惹かれ半世紀

裾分けのスタチを絞りハイボール
秋の風爽快ゆえにももの淋し
心の垢洗い流して風呂上がり

忠告を素直に聞けぬ耳もある
爽快だ夜中トイレに起きぬ朝
爽やかな秋は望めぬ温暖化

花びらをスキとキライが剥いでいく
言い訳も野心もとうに捨てました
あつさりと朝めしコッペパン一つ

天からの雨の忠告聞きたまえ
爽やかなミントの香りイタリアン
爽やかな空が何時来るウクライナ

忠告を無視し溺れた離岸流
爽やかにニッコリ笑い逝きたいね
医学部へダメ元挑戦夢試す

呼び出しがあればあつさり逝くつもり

マスク越し受ける風にも秋の香が
まだ青い言われた時がなつかしい
コピーして着色変えてオリジナル

悪よのう接待攻めと袖の下
青リンゴ齧つて未来語つた日
輪番で幹事の役を受けて立つ

咳払い受けて静かになる喋り
整形で似たよな美人作つてる
まるでコピー俺い娘は怒つてる

目を閉じて見る故郷の青い空
恩恵を受ける九条有難い
隣から落葉は来るが柿は来ず

青い実がふたつ何かを物語る
青信号抜けて遍路の旅つづく
終戦を待ち続ける青黄旗

青空を眺め指折る過疎の駅
いつまでも受け身じゃなくと妻の乱
真つ青な顔で見せに来た宝くじ

まだサンマ細すぎるので食べてない
あんだけの賄賂貰つてどないする(岩)
美ら海のブルースカイは別天地

ふり返りたくなるフェルメールの青
楽しみはふたつ呑むこと歌うこと
ちくはくもええじゃないかというふたり

逆風を受けてだんだん強くなり
百枚もコピーした後気付く誤記

倭子 勝弘 廣子 瑠美子 世紀子 里子 敬子 美津子 志津子 憲彦 禮子 淑子 素頓馬 五月 いさお 満知子 万紗子 ひろ子 時雄 敏治 和夫 育子 八千代 蕉子 満作 女也

紀の治 楓花 芳光 寿代 雄大 くにこ 芳山 みちを ゆたか 紫陽 余光 幸子 風露 由紀子 けいこ 麦青 美ツ千 石花菜 小鹿 清明 重忠 規雄 コスモス 完司

勝久 健三 武彦 健二 真理子 晴子 時子 多美子 英三 北舟 憲央 敏昭 公輔 野鶴 義明 武人 千鶴子 まつお 勝弘 玲子 満作 美津子 いさお 正彦 一步 黒兔

配つたり頂いたりの良い近所
恋心かくそうなんて思わない
まだ青いけどずぐらしくなつてくる
亡母の声をコピーしたよな妻の喝
子は親のコピーでないと自己主張 (水) 玲子
秋風のやさしさを弛緩する五体
青みかん運動会の味がする
傾く陽に受け継ぎのない鍬洗う
洋志

川柳藤井寺(大阪)

鈴木いさお報

戦争はやめろとブーチンに吠える
貧乏人が吠えても政府知らん顔
わきまえているので吠えたりはしない
国葬の是非非吠える縄のれん
浜に出て雄叫びあげて鬱晴らす
ミサイルを打ち上げる度海が吠え
マスク越し聞こえぬように妻が吠え
野党の吠え方まだまだ生温い
北海の波が吠えてる鉛雲
千鳥足ドアを開けると妻が吠え
人だかりしてると自然足が向く
隅っこが好きで一言あるお方
成功に物好きと言う視野がある
三万もする大江戸地図を買いました
物好きは他人の噂耳を立て
わが人生そろそろ秋に差しかかる
場所柄を心得ている紅の色
心得が悪いとひどくしかられる
正扶義

哲男
ひとみ
英旺
則彦
ヨシエ
眞澄
洋志

姑の前で夫を立てている
物好きと好奇心との微妙な差
さくら
いさお

川柳塔なら

大久保眞澄報

いつものことよ虎の遠吠えエンドレス
枝豆は食べ始めるとエンドレス
ひばりの歌今日もかけてるエンドレス
答弁はいつも同じの総理殿
一言で妻から食らう機関銃
いつ終わる円周率のエンドレス
魂はきつと宇宙で遊んでる
ああこの世時化と風との繰り返し
実弾は駄目じゃ文春砲なら許す
逆転攻勢少し見えてるウクライナ
逆転のまた逆転に泣き笑い
失言で机が動く座席表
逆転Vの夢に破れたタイガース
小兵にも逆転チャンス土俵際
小が大ひっくり返すこともある
九回裏逆転と言う名ドラマ
今はもう前行く孫が誇らしい
十ゼロの九回裏にまだ期待
して嬉しされて嬉しい逆転打
逆転のオウンゴールの背がむせぶ
逆転の口火は眼鏡拭いてから
あの頃を見つめ続けている填輪
つらつらと並ぶ賛辞に遠い耳
恭昌
ゆきみ
優
勝弘
盛隆
貫一
朝子
すみえ
みつこ
一歩
弘子
定生
則彦
志津子
裕之
昭
すみ子
行久
寿之
茂子
良岩
扶美代
大子

恭昌
ゆきみ
優
勝弘
盛隆
貫一
朝子
すみえ
みつこ
一歩
弘子
定生
則彦
志津子
裕之
昭
すみ子
行久
寿之
茂子
良岩
扶美代
大子

向日葵が遠い西空向いたまま
リハビリ歩き少しづつだが遠くまで
遠い国の事と思えぬウクライナ
意地張つてだんだん遠くなった人
臍まげて孤独になつてゆくばかり
へそ曲がり曲がり曲がつて真人間
只一筋曲りもせずに廃線路
上向いて寝ても必ずエビになる
酒止める誓いを込めたタリ髭
よく生きた曲がつたことはしなかった
ミニスカの曲がる方へと追う散歩
へそ曲がり十人おれば一人いる
和夫
げんえい
敬子
じゅん字
楓楽
隆一
文聡
崇明
敬介
もと子
和郎
江里子

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

情状の裁き君には未来ある
マスク慣れ幼児の絵には口がない
リハビリを粘る傘寿の恋心
日銀が庶民の貯金食い潰す
御洒落する心めざめる秋の風
解決のいの一番はぬくいハゲ
ファウルファウルファウル次が十球目
ラ致問題早期解決待ちのぞむ
解決を時に任せてまず昼寝
解決は意外と時がしてくる
おもちゃ屋の前で駄々っ子粘り勝ち
マスクにも世界平和のメッセージ
マスク美人取らずそのままのままで
信篤
美砂子
祥昭
朝子
あかり
いさお
一歩
かずお
高志
玲子
かすみ
高鷲

信篤
美砂子
祥昭
朝子
あかり
いさお
一歩
かずお
高志
玲子
かすみ
高鷲

心にもマスクをしてる総理殿
土俵際耐える力士の粘り腰
年金の元を取るまで生きてやる
粘り癖男は処世弁える
亡き妻のへそくり預金命綱

貯金箱今日もお札を食べている
預金にも勝る子が居る孫がいる
はたいても信者の道を選ぶ人
ゼロ金利批判するほど無い貯金
初めてがまだあり次は何が来る

孫の笑顔がガンコ親父を軟化さす
健康とお金があれば文句ない
勝ち負けは時の運だと飲んでる
誉めたのに恨まれました舌足らず

七輪で燃えた秋刀魚は語り草
軽い方とつさに選んでる目利き
ゆつくりと泣いて笑って生きつくす
ユリト口の絵からシャンソン秋の宵

くしゃくしゃと丸めた夢をまた広げ
明日のことさえ隠してる神様のいけず
あつさりと負けて笑える喜寿となる
マスクからこぼれ出してるといい笑顔

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

日本の辞書から消えた高金利
時々そばでおなかを掃除する
気まぐれな九月だ午後は上着邪魔

一文 鹿野

壽峰 高所

郁夫 日に

仁 五食

鈍甲 境界

秀雄 悔しさ

賢子 庭造り

銀杏 年齢

ルイ子 体温

千鶴子 孫の背

高鷲 バランス

勝弘 邪魔

博 食事

彰一 めき

欣之 夏

博泉 水

星雨 足腰

和織 口出

千賀 歯

亜成 釣り

恵子 甲子

宏章 利害

孝子 この

弘子 元

鹿野そば早食いなんて勿体無い
めきめきと地球が軋む音がする
高所から人を囓っているトンビ
日に五食うどんを食べてご満悦
境界の杭が微妙に立っている

悔しさは勝負魂火をつけた
庭造り高価な石も今じゃ邪魔
年齢のバランス崩れ国老いる
体温が高いコロナが恋熱か
孫の背がコロナ禍あわぬ間に伸びて

バランスは朝の空気で作りましょ
邪魔になる隣の空き家朽ちてくる
食事でも肉と魚とサラダ盛る
めきめきと音立てながらも大黒柱
夏素麺冬は煮込みのうどんスキ

水汲みの肩でバランス農作業
足腰の強さで決まる手打麵
口出しが過ぎると子らの邪魔になる
歯を開けて医者が来るのを待っている
釣り合いのとれた夫婦と思ってる

甲子園来るときめき強くなり
恒

翠洋会(大阪) 原田すみ子報

利害など今日の穏やか支え合い
このメガネはずすと年がばれます
元赤軍マスク着けたら血が騒ぐ
ブライダル頑固の眼鏡くらもらせる

茶子 すみれ

完司 ゆたか

盛桜 弘六

文道 白周

小鹿 静恵

孔美子 重忠

律子 大鯰

瑞子 一平

かおる 慎一

蟹郎 草文

恒

ふりこ 舞夢

定生 恭昌

萩昌

孫のため英雄伝を五六冊
足許を見据えるメガネ光らせる
若いねより変わらないねがありがたい
戦争もコロナも終息待つばかり
利害抜き日は出沈むを繰り返す

ブラスマイナスゼロで大往生
利害超え貸した百万三途越え
英雄より凡夫のままで生きる道
老人のテーマの本に目がなびく
色メガネ信号誤認事故の元

九連敗最後に見せ場帳尻を
円安が庶民の冬を寒くする
肚据えれば恐れるに足らぬ

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報
平和への助走川柳詠んでます
助走では完璧だったことにする
疑心暗鬼助走路とまた長くする
白鳥と目指し助走をするアヒル

女装すら臙に秋の陽が落ちる
助走路が続く人間まで遙か
戦争へもう助走していませんか
大人への助走思春期の苦惱
鈴虫の音色と秋の助走距離

デジタル化されて我が家の代替り
節くれた指デジタルが大嫌い
デジタル詰まるまるで天下を取るよう
デジタル化ざらりとこなし若返る

楓楽 弘澄

敬子 和夫

義 げん

蕉子 大子

善之 行久

すみ子 満作

千鶴子 利秋

正明 敏治

知栄 寿之

賀世子 克己

ますみ 志津子

楓楽 文鎮

りゅうこ

文鎮

デジタルが味方の顔してやっつて来る
 便利と危険背中合わせのデジタル化
 デジタルに先を越されぬ老いの意地
 デジタル化部屋の upper にコンピュータ
 夫婦仲荒れてきたなど知るルンバ
 戦から得るものは無し破滅だけ
 イントロの途中で恋が破綻する
 静寂を破る和尚の喝の声
 夢破れされど山河は見捨てない
 力対力の対峙破滅へと
 コロナ禍だ源氏を読破するチャンス
 破れたら繕りの文化が消えた
 論破されそれでも小さい拳上げ
 約束は破棄いたします秋の空
 目力が付くなあマスク三年目
 宇宙から見れば騒々しい地球
 懸命に挑む姿の大相撲
 アフリカへ小麦届けたウクライナ
 黒塗りを剥がす力は民の声
 プーチンを痛打ノーベル平和賞
 Jアラート危機感煽る意図が見え
 現金派スマホ決済なじめない

川柳塔すみよし(大阪)前月号 田中ゆみ子報

目茶暑い秋はほんまに来るやろか
 列島のそれぞれにある風物詩
 ポシエットもどきまぎ続く初デート
 山歴が語るザツクの詰め具合
 若かった鞆ひとつで新所帯
 グツチより私に似合う布鞆
 若者はリユックおはあさんリユック
 鞆から時々出なくなる鳩だ
 権限は妻に持たせて悲無し
 相談はするが答えは決めてある
 決めました自分が生きる道だもの
 即決はしない一晚考えて
 決めている反省会は酒を呑む
 ポスの咳満場一致会議終え
 双方に勝ちを上げた決勝戦
 ヤツとなら毒をも喰らう腹を決め
 嫁さんは俺はもてぬと決めている
 夫決め妻が従うその昔
 幸せに決まっているさこの暮らし
 AOKIのスーツでばっちり決めている
 文春はこっそりふたり付け回す
 重く受け止めると言って無為無策
 こっそりもひそひそも好きおんな達
 ゴミの日に嘘もこっそり混ぜて出し
 こっそりと逢うのがとても嬉しいの
 こっだけの話なんだか嬉しいそう
 こっそりの耳が男の骨を抜く
 匿名の寄付でまごころ伝えたい

風邪薬だよこっそりバイアグラ(矢)五月
 こっそりと神社に行つて手を合わす 芳香
 母さんにこっそり知らずいい話 一歩

翠洋会(大阪)前月号 原田すみ子報

豆棋士が大きな鬼に立ち向かう
 甘くなれおいしくなれと小豆煮る
 豆粒より小さいコロナにはびこられ
 豆知識頼りに作る五・七・五
 運がいい答案弾む一夜漬け
 爺よりもネット信じて答え書く
 正解は人それぞれの貌にでる
 少しずつ食べて全部食べるお菓子
 赤い糸少し補強図ります
 少しだけ雰囲気変わる休み明け
 わがままも我慢も少しあり夫婦
 コーヒーを少し苦ものに今日活
 少量の味見が高いものにつき
 わだかまり少しあるらし言葉尻
 少しだけあの世覗いてきた手術
 褒め言葉ほんの少しの棘を持つ
 横綱に抱かれ泣き出す豆力士
 あの人の「一寸いっぱい」エンドレス
 息のあるうちはプライド手放さぬ
 五輪汚職とこまでゆくのともらない
 早朝の体操アンチエイジング
 ふれ合いを求め投句の五七五
 鯛の鳴いてさびしさ深くなる
 L寸のゆとりもあと少しになる

第19回 川柳「信濃川」新春誌上大会

宿題と選者 (各題2句) 一人一組、定形のリズム

「ゆ う」 相田 柳峰 前田 楓花
大内せつ子 平井美智子
坂本 加代 永見 心咲
ほか7名の選者

締切 2023年1月31日(消印有効)

投句料 1000円(現金または郵便小為替)

90歳以上の方は無料(証明書不要)

投句用紙は自由

発表誌は3月10日

賞 1位 魚沼産コシヒカリ 20kg

2~3位 長岡産コシヒカリ 10kg

1句7点以上 長岡産コシヒカリ 5kg

他にも賞あり

投句先 〒940-2042

新潟県長岡市宮本町3-2433

相田柳峰 宛

電話 0258-46-5999

第131回 中部地区誌上川柳大会

宿題と選者 (各題2句)

「妙」 相田 柳峰・あべ 和香 選

「刻む」 安藤 紀楽・平井美智子 選

「ほろほろ」 小林信二郎・弘兼 秀子 選

「バランス」 横尾 信雄・松原ヒロ子 選

参加料 千円(切手不可)

応募用紙 所定用紙(コピー可)

締切 令和5年1月16日(月) 必着

賞 最優秀句賞・優秀句賞

(愛知県特産品)

ほか合点30位まで呈賞

発表 [月刊中日川柳](令和5年4月号)

投句先 〒457-0038

名古屋市南区桜本町137

荒川八洲雄

TEL 052-811-2347

主催 中日川柳会

第13回 高田寄生木賞

川柳に関する論文・エッセイ

(評論、作家論、川柳の方向性やあり方、川柳と社会や個人との関わり等)

野沢省悟

2023年2月末日

選考

未発表に限る。4,000字以内

(PCカワープロ使用、縦書き、1行20字で)

〒03810004

青森市富田2丁目7-43 野沢省悟

○高田寄生木賞 1名

賞金3万円、高田寄生木句集、野沢省悟評論集、発表誌

5冊贈呈

○入選賞 若干名

発表誌に掲載、高田寄生木句集、野沢省悟評論集、発表

誌2冊贈呈

「触光」78号(2023年6月)

※発表誌希望者は事前に申し込んで下さい。(現金か振込)

現在、川柳界では多数の作品賞はあるが、論文や文章の賞

はほとんどみられない。このままだと量的に作品は増えて

も、その作品の検証や作家の論評がなされなければ、文芸

として質的に低下するのではないかと思った。ささやかな

一灯ではあるが、皆様のご協力を乞うものである。

・上記主旨のため当賞の基金を募集いたします。

(1口1,000円)

・発表誌希望者、基金は左記の口座に振り込んでいただけ

れば幸いです。

(川柳触光舎 0224018182005)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 残す・骨・なじむ・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	17日(土) 14時締切 星・つぶやく・前兆 レブリカ	誌上句会・投句先 〒596-0076 岸和田市野田町2-18-27 雪本珠子
川柳 たちばな	17日(土) 13時45分締切 印象吟・底(互選)・試す 自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 みちのく	17日(土) 17時締切 調子・威力・ゆったり	会場未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 激しい・フィナーレ・席題共撰	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
南大阪 川柳会	19日(月) 14時締切 赤・風・鳥・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008 松岡 篤
豊中 もくせい 川柳会	19日(月) 13時50分締切 憧れ・試す・高い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 ねやがわ	19日(月) 13時出句締切 ノルマ・ふところ・ムード 余生・自由吟	会場 寝屋川市産業振興センター 投句先: 〒573-1104 枚方市楠葉丘1-9-13 藤村亜成
川柳 さんだ	20日(火) 13時30分締切 団結・速い・ページ・描く 自由吟	キッピーモール 6F (JR三田駅前) 〒669-1324 三田市ゆりのき台3-14-9 上田ひとみ
和歌山 三幸 川柳会	24日(土) 13時15分締切 ベテラン・忙しい	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市 川柳会	25日(日) 14時締切 机・奪う・やれやれ・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	第41回没句供養大会 有料・儲かる・くすぐる・不自然 悲しい・失礼 敗者復活吟	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町2 1 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
川柳塔 すみよし	休会	

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	1日(木) 14時締切 挨拶・不意に・忘れる・席題	奈良市中区公民館 4F 投句先 〒636-0202 奈良県磯城郡川西町結崎421-64 長谷川崇明
城北 川柳会	3日(土) 14時締切 平凡・ゆうゆう・相棒・自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉 川柳会	3日(土) 14時締切 一言・にこやか・はつきり 席題一題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡湯浜浜町545-16 竹信照彦
川柳塔 まつ 吟社	3日(土) 13時30分締切 くどい・甘い・影・地	投句先 〒690-0012 松江府古志原7-19-19 中筋弘充 会場 雑貨公民館
おりひめ☆ ひこぼし 川柳会	7日(水)消印有効 ありがとう・ごちそう・ミラクル	投句先 〒573-0095 枚方市翠香園町2-7 「おりひめ☆ひこぼし川柳会」 藤田武人 TEL・FAX 072-395-5453
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 削除・キュン・席・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) メロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪府天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳 とんだばやし 富柳会	10日(土) 虎・アタフタ	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200 m 〒584-0066 富田林市錦織北1-14-6 中村 恵
六甲 川柳会	10日(土) 14時締切 派手・柔らかい・拝む・自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン6甲内 〒658-0083 神戸市東灘区魚崎町2-12-5 敏森廣光
川柳塔 打　吹	10日(土) 13時30分締切 息・結ぶ・逃げる・席題	倉吉市上灘町9 上灘コミュニティセンター 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川柳塔 わかやま 吟社	11日(日) 14時10分締切 兼題=その他・平・まさか 課題吟=角	JAビル11階(JR和歌山駅前) 兼題 〒642-0024 海南市阪井652-14 小谷小雪 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 乗原道夫
西宮北口 川柳会	12日(月) 14時締切 席題・メモ・待つ・やばい 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳 同好会	13日(火) 13時30分締切 答・細い・ぐらり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さ　かい	13日(火) 14時締切 しっかり・本物 折句:い・さ・き	東洋ビル4F 投句先 〒599-8122 堺市東区丈六77-4 齋藤さくら

柳界展望

特選 平井美智子

乾杯のグラスの底の裏話

特選 高瀬 霜石

B面の溝に昭和が棲んでいる

特選 森田 旅人

「大丈夫」ただそれだけで生き抜いた

特選 村田 博

古傷を剥がせば長い物語

★第15回「ふるさと」川柳大会。同人成績。

秀句 柳田かおる

抱きしめるわたしの中の乱ひとつ

秀句 新家 完司

近く順を乱すな親を追いつ越すな

秀句 永見 心咲

騒乱の因はころがったおにぎり

特別賞 森山 盛桜

クルスにも数珠にも乱は有ったのだ

特別賞 水見 心咲

ひと波乱あつて鼻緒をすげ替える

★10月30日、国民文化祭

おきなわにおいて、同人の平井美智子・栃尾奏子・笹重耕三・北山まみどりさんの4名が入賞。詳細はP95参照。

▽同人の動向△

○前田楓花さん（鳥取市）は10月20日山陰中央テレビ「山陰の創造者たち」に出演。因川和紙を使った立体ちぎり絵を紹介した。その模様は、ユーチューブ「山陰中央テレビ・山陰の創造者たち・前田孝子」で知ることができる。

▽出版△

○水野黒兎さん（豊中市）が、「残日句録」（B6判96頁、新葉館出版、1200円＋税）を出版。252句収録。

▽訂正とお詫び△

○九月号P104折田あきこの住所、大阪市旭区針大宮3-8-7↓大阪市旭

区大宮3-8-7。

○十一月号P64柳歴4行目、平成二十一年川柳塔誌友↓平成二十九年川柳塔誌友。P65作家1 恵利菊江↓恵利菊江。作家3 坂本晴雨↓坂本星雨。P72上段物語者 山東日出雄↓山東日出男。P77中段後から6行目、時間が増えまた

↓時間が増えました。P79下段16行目、百二歳と一緒に餓えたチューリップ↓百二歳と一緒に植えたチューリップ。P85上段8行目、P87上段16行目、中井萌↓中井萌。P97上段14行目、どじょう

がいたら二度目を持ってます↓どじょうがいたか

ら二度目を持ってます。

○十一月号P4上段14行目の句は、作者の申し出により削除。

▽新誌友紹介△

西宮市 澤内名都子 紹介者 高瀬 照枝

▽川柳塔誌電子化事業△

11月1日、羽原静歩「い乃智」がアップされた。常任理事会（11月7日）出席21名①常任理事の任務分担②「川柳雑誌・川柳塔社100周年記念事業」への取り組み③川柳塔まつりの反省④春の川柳塔まつり誌上大会⑤川柳塔まつりの会計収支報告⑥定例確認事項。

次回常任理事会12月7日（水）AM10

新同人紹介

荒牧孝子

楓楽・朱夏推薦

★「英語 de Senryu」の吉村侑久代先生に関する記事が、9月8日「中日新聞」夕刊の一面に掲載された。先生は河合楽器製作所のカレンダー「フォト・ハイク」に作品を寄せて、来年で20年になる。カレンダーは河合弘隆会長が世界各地で撮影した写真6枚に先生の英語俳句と日本語訳を添えたもの。なお、カレンダーは一般向けには配っていない。

★第44回神戸川柳誌上大会。参加者365名。同人成績。

準特選 富田 保子

床ずれのままで終るかこの命

★令和四年度川柳研究誌上大会。参加者48名。同人成績。

高野山川柳塔碑合祀報告

十一月八日、第三十一回目の高野山川柳塔碑合祀法
要を実施いたしました。

今回は、コロナ禍のため、令和二年九月から令和四
年八月まで川柳塔社同人の物故者十五名を高野山大靈
園に合祀法要をお願いしました。

次回は、令和六年秋に川柳雑誌・川柳塔社100周
年記念合祀祭を行う予定です。

〈江島谷勝弘記〉

合祀者お名前

中原みさ子様 (鳥取市)	山口弘委智様 (枚方市)
磯部 義雄様 (和歌山市)	山東日出男様 (紀の川市)
田浦 實様 (大阪市)	内海 幸生様 (八尾市)
阿部 紀子様 (生駒市)	奥田みつ子様 (東村山市)
海老池 洋様 (千葉市)	
原 章峰様 (出雲市)	
加川 靖鬼様 (尼崎市)	
吉岡 修様 (四條畷市)	
黒田 能子様 (芦屋市)	
遠山 唯教様 (堺市)	
都倉 求芽様 (京都市)	



載

連

新

令和五年一月号から、野沢省悟氏による
「ほうれんそう波稜草の花」(川柳塔鑑賞)が始まります。
ご期待ください。

【執筆者略歴】一九七六年から川柳を始める。「か
もしか」「現代川柳・雪灯の会」「双眸」等を経て、
現在「触光」発行人。句集に『あは暎は雪』(八五)、『ぼ
ん』(九三)、『東奥文芸叢書川柳7 60』(二〇一四)
等。著書に『極北の天』(九六)、『富二という壁』
(二〇一三)等。

「各地句会だより」掲載について

「各地句会だより」を、14年ぶりに令和5年から再開し
ます。

川柳塔社グループの川柳会で、紹介・アピールをご希望
の会は、川柳塔社事務所まで原稿をお送りください。

内容：会の特色・様子・行事・今後の予定など自由

字数：19字×50行

写真：会の様子や集合写真など1枚

締切：随時

なお、掲載月・文章の添削については編集部に一任願
います。

編集後記

★私が「川柳塔」誌友になつたのは昭和50年1月だが、不二田一三夫さんの編集後記が面白かつたのを思い出す。一三夫さんは、最終校正と編集が済んだ日に、新世界の串カツ屋「てんぐ」に行き、コーラー一本で串10本(計600円)を食べるのがきまりだった。(昭和50年4月「編集後記」)

★昭和50年に大阪市の大入りに入学した私(和歌山市から通学)は、高校時代に興味を持った新世界に入り浸った。ジャンジャン町にあった寄席「新花月」(松竹芸能やてんのじ村の芸人が出演)に通い、3本立ての映画を観まくった。「てんぐ」にも通うようになる。金が乏しい時は、飛田本通商店街入口にあった「大万」に寄った。串6本と

酒1合で300円。
★先日、「てんぐ」に行ってきた。串カツ1本130円。学生時代にあった「町は大阪串カツはてんぐ」の田辺聖子の色紙が今も飾られているのがうれしかった。
(道夫)

ひとこと

木津川計先生

去る七月二十四日、私は病院のベッドで痛みに耐えています。夜、木本朱夏前編集長からラインで、私の句が木津川計先生のNHKラジオエッセーで採り上げられるが、関西圏の放送なので、鳥取には流れないでしょうとの事。残念だけれど嬉しいお知らせでした。偶然にも七月二十七日の夕方ラジオをつけると、計先生のNHKラジオエッセーで私の句が紹介されたのです。二度目の偶然は九月二十八日。計先生の最終回の放送を退院した自宅で聴き、ゆつたりした口調と人情味溢れる大阪弁で、ご自分の人生を振り返られていました。

ラジオエッセーを続けて四十二年。十月で八十七歳を迎えられ「これからは何もしません」ともおっしゃっていました。二度の偶然でも私は心から「計先生、これからもお元気で」と祈らずにはいられませんでした。
(前田楓花)

に乗ってホイホイと駆け下り膝を痛めた。それでもサポーターをして登り来週は山の辺の道から龍王山へ。頂上から、私のホームグラウンドの二上山が見える。先日、白内障手術をして遠目に合わせた。秋空を突く二上山の雄岳雌岳の勇姿を眺める楽しみにワクワク!
●10月1日「川柳塔まつり」の会場で、故塩満敏さん・故前たもつさん

の蔵書約400冊を展示しましたところ、320冊ほどが参加者の皆様にお持ち帰りいただきました。蔵書をお預かりした者としてホッとしています。来年の「まつり」でも、新たな蔵書を展示したいと考えています。お楽しみに。

●電子化された「川柳雑誌・川柳塔」から、ユーモア作家須崎豆秋さんの句をS3年から亡くなるまで拾い集めたS36年まで拾い集めたところ、約3400句もありました。皆様にお目にかかれるよう思案中です。

●「川柳雑誌」は楽しい。路郎師の巻頭言・巻頭句、川上三太郎氏、前田雀郎氏、相元紋太氏の柳論をはじめ、福田山雨楼氏、東野大八氏、高鷲垂鈍氏などの柳論はいまでもワクワクさせるものがあります。大いに学ばれてはいかがでしょう。
(勝弘)

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

<input type="radio"/> <input type="radio"/> 年 年 月 月 から から 一年 半年 9800円 5000円 } 該当の方に○をつけて下さい	紹介者	電話	住所	氏名
	(無記入でも可)		〒 -	フリガナ

川柳塔のホームページアドレス

<https://senryutou.net>

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 木本朱夏選
 愛染帖 (2句) 新家完司選
 檸檬抄「アイドル」 (2句) 江島谷勝弘共選
 (永見心咲)
 インスペクションナビ(2句) 大西泰世選
 「運」 菊地政勝選
 「初々しい」 川名洋子選
 「スーパード」(3句) 水野黒兎担当
 初歩教室「スーパード」は3月号発表

2月号発表(12月15日締切)

3月号
 檸檬抄「かなり」
 一路集「耕す」「パワフル」
 初歩教室「近い」

本社12月句会

とき 12月7日(水) 13時開場・13時40分締切
 ところ アウィーナ大阪 3階 葛城の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし「冬に立ち向かう」
 兼題「
 席題「
 動 謎
 ひ や く
 風物詩
 自由吟」
 佐々木満作氏
 森田旅人選
 富永恭子選
 松岡篤選
 森松まつお選
 小島蘭幸選
 (各題2句以内)

本社1月句会

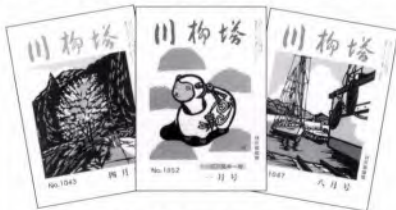
10日(火) 午後1時から
 兼題「祝う」「大変」「情け」
 「きりり」「自由吟」

本社句会欠席投句のお薦め

*幅4.5センチ×長さ25センチの句箋一枚
 に一句ずつを書き、裏面に題とお名前
 を記入のこと。
 *投句料1000円(切手不可)。
 *句会日の前々日までに事務所に必着のこと。

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
 TEL (06) 4800-3018
 FAX (06) 4800-3028
 Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
 ホームページ https://www.bikenart.com

定価 八百円(送料100円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)
 二〇二二年(令和四年)十二月一日発行
 発行人 小島和幸
 編集人 桑原道夫
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話(06)六七七九三三四〇番
 振替〇〇九八〇一四一九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス <https://senryutou.net>

箸がとまらん 極うま塩昆布

「直火仕込み製法」により炊き上げた濃厚な旨さ

職人の技術で、超とろ火の火加減により、
秘伝の煮汁にじっくり溶けだした旨味を、昆布に染み込ませています。



お友達LINE
QRコード

舞昆のお友達に
なって下さい。

商品のお問い合わせはこちらまで（ご試食承ります）
舞昆のころはら フリーダイヤル 0120(11)5283 イイコブヤサン

橋詰農園の味好みかん

～家族で作り上げるこだわりの味～

健康なみかんの木から採れる絶品

余韻に浸れるほどの「コク」をお楽しみ下さい

〒649-0141 和歌山県海南市下津町小南 349

TEL & FAX 073-492-1692

E-mail beetrus@nifty.com

http://www.hashizume-nouen.com

